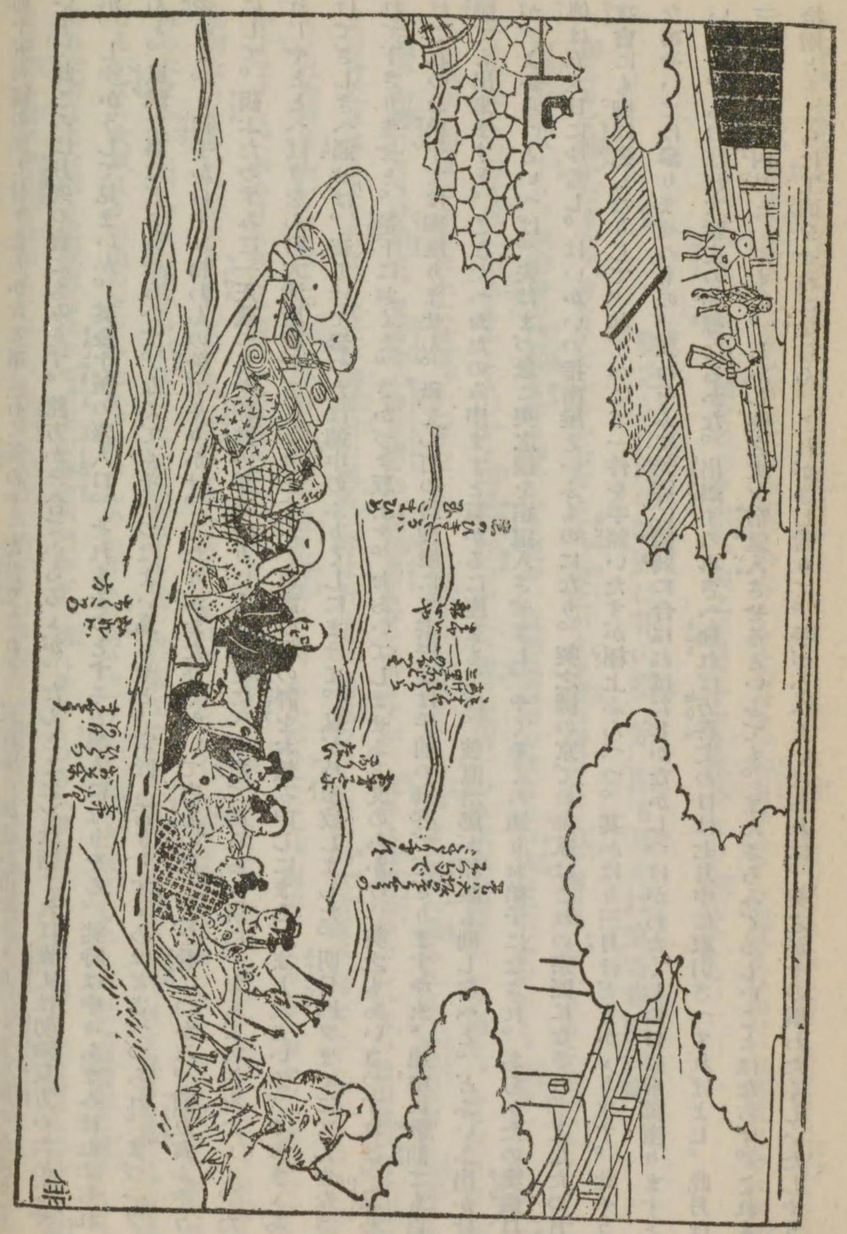


があり。明日大坂よりふさが着るゐこなたへむけて登ります。是を力に拾兩ばかり工面致しませふ。はてつひ又取戻してやります。申さば元手に入れますやうなもの。のふふさといへば。なんのいな。先の事はあんじずと。おためになることなら皆なりと。やらしやんせ。わたしやもはや着かざつて。どこへもゆく氣はござんせぬ。また是からこなさんは付合もあれば。せんぐりに着せねばならんといへば。契之もこれにすこし打しほれ居たりしが。大新がはやゆだんなく。さて弟子衆も宗匠こなたの御門中を當ぶん四五人おたのみ申て契之様へゆずつてしんせられませ。わたくしは今夜から契之様のみばへの門弟になりませふ。包銀は明日までかけて下さりませと。かるロまじりに宗匠そのおさかづきを契之先生へつかはされませ。又契之様のお盃を下抽頂戴仕りますと。はや直治郎をわがかたのお客にせんとの入學は。大新作の上手もの。げに里なれしとんちなり。夫より大新はいに支度して。扨明日は私が直治郎殿の五六町かたわきに。りかうなしやく家を見廻りませふ。則寺町たこやくし邊に手まへゐみえる客衆があれば。少々心あたりもござります。何事もまづ明日の事。私はおいとま申ませう。もふおまへ方もおやすみなされ。お雪さんお客御ちそうなされませと早口にいひ立けるは。よく〳〵小便がしたかつたやう。玄關でじろ〳〵とおもてへ出しなに黑犬を。ふみけるが。きやんといふこゑにびつくりして

たれかすにおしてふんたる黑犬はしゝと云ずに泣て逃吠

と興歌してハアハア〳〵と笑ひ〳〵ぞかへりけり。

第三　うれしさの七ツおき東明を待かねた田葉粉の數呑

所替れば品かはり。難波の春も。今は都へ出水の旅しゆく。夜のあくるをまちかねて。一日のはかりことは難明にありと。古人のことばを思ひ出し。明日はどうしてかふしてと。契之ふうふは七ツ時分より目をさまし。たばこの數

のみを。してゐるうちほどなく夜もあけければ。宗匠とも相談して朝飯後より契之はせたい道具を調るつもりにて見あるき。やぶの下邊を徘徊して。そこゝに手つけを少々づつわたしかい付置。晝時分にかへりがけ寺町通にて大新に行逢ば。是は能所でお目にかゝつた。さて此近所をあさから見廻りましたが。たこやくし通是西へ入町刀屋宗介樣のかし家に。しごくの所ござりまして。大かた極めてまゐり。たゞ今出水へさんじます所。則家ぬし宗介樣は。わたくしかたのおきやく。貴丈事をあらましはなしましたれば。此いへぬしもはいかい好にて。それは能まじはりが出來ると悦ばれ。掃除は此方から申付てやろ。もし請人がなくば是もこちでこしらへてやろ。なんならおれなりと請に立とひたるい腹へはいかいをくふやうに。しやんとことが明てある。すぐに家ぬしとお近付にして借屋もお目にかけませふと。夫よりたこやくし通へ同道し。先刀や宗介に引合せば。大新がいふに相違なく。さりとはたのもしいあいさつ。彌々是からおたのみ申上ますと。件の借家をみれば。格子作にしてまねのやうでも玄關もあり。二階も小座敷になれば十八匁には見よひ宿代と契之も悦び。夫より刀屋をいとま乞して寺町の辻で。拙者是から直治郎殿かたへ行。近日御近所へ借たくをかまへますとうはさいたすべし。段々貴樣のおかげと一禮いふてわかれ。幸と錦天滿宮へ願をかけ。主人の目をかすめました事はおゆるし下され。此度の仕合でます〳〵手つかひよく守らせたまへと。神慮に身の勝手づく計いふて足早に御社三べん廻り。我ねがひ松竹梅のすなをかなと心で奉納して。夫より木屋町の直治郎殿借り座敷へ行ば。直治郎殿は貴丈の御旅宿へ御たづね申積にてたゞ今出かけます所。是はさいはひ先以昨日は船中よりだん〳〵おせわ。夫はおたがひ。ふさも宜しう申上ケますやうに。扨私明後日より寺町たこやくし通へ俳諧みせを出します積り。則家もかります。明朝請をいたすはず。いよ〳〵船中御やくそくの通御厚情お賴申ます。是はまたおはやい御てまはし。私も何ほどか大慶。茂八それ島原のひしやからくれた海鼠腸で一献上てくれ。御覽の通り主從二人のわび住居。家内に色けをさつた所なんと風雅ではないかと。書院先の小櫻をおいてに茂八がわりひざでの酌で樂。

御ちそうのさかなを契之賞美して。小ざくらや海鼠腸くしが思ひざしとすれば。直治郎横手をうち。さりとは又かくべつなものと直にたんざくに認てもらひ。夫より種々馳走して吸物のうへにて。さて拙しやか俳名はなんと付て下されますといはるれば。。なるほど是がかんじんまつ思めしがあるなら。いやわたくしは先生しだい。然ばかやうはと瓜流軒之落と付ければ。直治郎殿も氣に入りはなはだ悦ばれ。これより直治郎殿といふ者は一人もなく。之落丈之落丈とぞ申ける。契之かさねて變宅のこゝろごしらへ諸事用繁ふ御座りますれば。まづ今日は御暇申。これは御もつとも然ばお出か。何事も家うつりなされたそのうへで千代を契之先生と路じの口まで見おくりて。さそふ〳〵。

大和言葉 風俗俳人氣質 卷之二終

大和言葉

風俗俳人氣質 卷之三

第一 早天から借屋を見廻る俳人の宿這入

おしめとも春のかぎりのけふの日の夕暮にさへなりにけるかなと。古歌の心に似て契之はけふ晦日なれば。花の都の春をおしみ。木屋町より戻る道すがらも發句の趣向などして。心もいそ〳〵と雨樂宗匠の方へかへれば。早や大坂よりふさが着類たんすにそでひつ。何かのぼりあり。宗匠夫婦におふさもかたはなかいて座敷へ直せしが。萬事才覺の節。門弟中ても來合せ見つけてはふけうと契之が氣をつけ。殘らず二階へあげ。偖て大新が借屋の世話してくれたこと。直次郎殿にうはさして之落と俳名ついたこと。家ぬが俳諧ずきの事くはしく咄せば。三人共悦び何にもせよ手ぐみのよいしゆび。まづ大坂の宗匠へこまかに狀でいふてやられよと。雨樂翁きをつけらるれば。よふ思ひ出してくだされました。かんしんの私はしゆびのよひに取りまぎれ失念いたしてをりました。さあ〳〵ふさも文したゝめやと。手早やに夫婦が狀したゝめ。下女に飛きやくへ持たせてやり。さて宗匠件のくめんはどふいたしませふ。みなまでの給ふな。かの所の手代が手前元來てくれるはずにしておいた。いまにも來たら句作りは二階で〳〵と。うはさの所へ。こんの木めんぶろしきを花いけのすいばちの形にたゝみて肩にかけたる仁が。案内なしに臺所へとほりければ。宗匠内儀が七もんじやのお手代さんが見えましたといはるゝと。直に二かいへあがり賜へと宗匠と契之とが先達してだん〳〵はしごをのぼりけるが。おふさは疊にヲの字とシの字を七ツほど書いて居れば。内儀おゆきがきてんきかせて。おふささんひとつ呑もまいかとすしのちろり不興をみつけ。その場をさつと黑豆のにしめて。二ツすゝめけり。さて二階の三人は相談しめ。たんすひとつからにして金拾兩かり。おふさにみせ。いはば七月まで火の

ようじんに藏をかるやうなものといへば。そのやうに一度々々にことわりぐち。いはんすことはないわいな。わたしがなんとぞおもふているかと。ぬしの廻り氣からあのやうにいはれますのナア宗匠さんと。盃契之にひとつ上がれとしたまずにさせば。夫が興になり。おゆきさんお燗がよいかへと。ふさが口合をやれば。さすが宗匠内儀ほどあつて。わたしが名はゆき。大坂の丹山さんの奥樣はお花さん。さしつめおまへはお月さんと付ねばならんと笑まじりの酒事なかばへ大新が來りて。まづ一はいのんで。さて明日は四月朔日。吉にちのさいはいに。家うつりは明日中にさせましたし。藪の下に手附うつてある道具は明日かねわたして直に藪から荷こませませう。まだ暮六ツにはなるならず。夜分へ打越をかまはずに。たゞいま請をするはつ合にしてまゐりました。請人もてくみがすんである。まづ抽者につ いてはや〳〵お立と灰ふきをかち〳〵〳〵明日の段をその夜のうちに一場つとめ。偖てあす早天より大新がせはでしやんと其日の八ツ時に蛸藥師の借宅へうつり。おふさもはや世わたりの風雅を結ぶたすき懸け。はいかいに似た宿かへのしうぎの白かゆすゝり居るところへ。木屋町の之落とてしん物しな〳〵茂八に荷なはせみえければ。つゞいて出水の宗匠さいはひこれはよい所と。之落丈を宗匠に引逢せ。大新も近付になり。家うつり酒に日をくらしその夜はまづ一通にして之落丈同道にて宗匠雨樂も立れけるが。大新は今夜中にかべの腰張をしまふて取とかたはだぬいて居るを。宗匠がはや氣をつけて。散り土佐のこしはりへげて秋のくれ。といふはせを翁の一句もあればその青土佐はおやめになされと。道にかないし俳人の物ずきいふてぞ立れけり。さて宗匠出水へかへり。その夜中立屋金助俳名万呑子をまねき。契之が宿這入直治郎之落といふ俳人になりたること。内々の一件もくはしく語り聞せば。万呑横手を打ち。さてもとんち御はつめい。偖てその之落丈をまづわれら取り入り。遊里にてさつと御馳走申したし。七日中に調達することを今日うけ給りさへすればした物と。それより万呑が思ひ付き。明日こなたにて百韻の會にことよせ。之落丈をはじめ先此むればかり出合はねは。大新かたにて夜どほしはいかいにてもいたし。まづ此方の城を丈夫にし

て見せかけねば左やうの事はらちのあかぬもの。明日終日の入用は憚ながら此男。万呑込と相だんきはまりしが。夜もいたくふけければ一向拙者はこれにとまり。あすのしゆかうを仕らんと。諸事の手組してとろ〳〵とねると思へば。そのまゝあしたにとなりにけり。よの中は戀もなさけも花よりも山ぶき色の一ト本ぞ。有德の之落一人を取り入るための風雅にて。けふ百韻の內會とて雨樂翁のだい所は魚屋八百屋の勢もよく。此たび宗匠のよきしゆびは。われらが去年の古かけも下されさうなにぎはひと。あさから家內がのみかける。万呑はりやうりの物ずきしてゐる所へはや契之があんないにて之落公の御入とざゝめきわかり。座敷へ通り。まづ万呑がはしめての盃してはや千年もなじんだやうになり。だん〳〵興を催ふし百韻の卷も目出度濟んで。茶氣をじまんの夜飲もをはり。いましゆんて來た雨樂の座敷。酒ゑんの花ぞみちにけり。こゝに押小路へんへ去年の冬。宿這入したる松坂や彦兵衞といふ道具あきなひをするもの。勢州よりおやぢを取りよせ孝心をつくし。何とぞよきとくいがたを取入れたいとおもふ折から。万呑うはさにて之落丈の事を聞き。少々奉公のじふん笠付けをせしが。是を小學のちからにして契之が弟子となり。そうせうにも近付になつてけふはだい所へ取持がてらきてゐけるが。しゆびをかんがへ酒もりのざしきへ出て。むりに十ばいのんで。さて且那之落公へ申しあげます。私道具あきないを仕ますが。はゞかりなから尊公樣はお銀はたくさんにあれども。御ざしきがり遊ばされも間もなければ家具等は御所持なきよし。どふでお調へなされる物わたくしの道具をおめしなされて下さりませと。酒の力で出るまゝにたのめは。傍から四人が合槌うつひやうしにて。しからば惣朱のかた地にして。膳椀貳十人前。もちろん湯桶めし次かよひ八寸いづれも本。二。三。向詰は春けいの木具。外に茶氣のすひもの椀五人分づつ五通。湯盆すきや物しな〳〵明日御みせ下され。おちかづきのため少々ながらとゝのへませふとかいあきなひの口があき。賣らぬさきから拍手打て和歌三神をぞをがみけり。これをよき出かけにして万呑と宗匠と二人が千兩の一件を口むしれば。それは耳よりかねてせつしやも心がけゐる所。八朱の利そくならばおの〳〵がたをおたのみ申したし。向後わたくしの一ツ家とも朋友とも仕り。宗匠おの〳〵まづ承知仕りましたが。來る盆前まではたなにおきたし。しかし先樣今月入樣なれはいかやうともなりますが。それでは手まへが先樣かに利足の先をせねはならずといわるれば。いやわたくし方の口は七月中にさへ手に入ればよろしう御ざります。さてもはや御酒御取なされぬかと。万呑が物なれたるゆゑそのばできつと聞きらず。心でうまひ口元して內儀もふさもよろこびの二ツ三ツでよいきけん。五人が思ふ念願は順に來る利と大着てまはし。工夫付さす宗匠の內儀の雪で盃はきへて花香の茶にかはり。今夜の一森われなりと百韻の卷ひつさけて大新が立ちさわげば。一度に一トむれをどりたちに。いんでねもせず四條小橋を越たゑ。

第二　初對面から酒盛に能付けこんだ商人の上手者

下戸ならぬこそ男はよけれと兼好法師のつれ〳〵に書き給ふ。今此理をしりたるは道具屋彦兵衞の事なり。之落丈が酒宴の興に瀧呑みをして取り入り。銀高三〆貳百匁があきないしてげんきんにまで下される所を。賣方よりたのんで盆前までかけおきけふはやはり之落丈の方にて仕出しは彦兵衞がふるまひとて。連中いつもの五人組。木屋町のさしき川原おもてを見渡してのたのしみ。すぐに其日は万呑がかけをうけ合。島原でのみつくし。あすは宇治行き。あさてはぎをんのぶしの根に酒のあいまでさせて。いつとなく四月もすゑの五日頃に五人のれんちうを之落丈の借さしきへまねき。さておの〳〵にたのみたきことあり。せつしや本店にあつけある金子の外に大坂へ三百兩池田にゐる內に內證銀をあつけおきしが。江戸堀邊にてすいぶん慥なるものなるが。そのかはりにこれは三朱の利足なり。これまで利あけをいへば戻そふといふゆゑ捨おきしが。此たびは戻しおれはおの〳〵がたにまはしてもろふゆゑ。尻を丈夫にたのんてみる積りなるが。もしかへした時は三百兩といふ金子の取引せつしや一人にては不用心。家來をめしつれる

ほやすけれど。まづ身分のかるひ奉公人ゆゑ心もとなし。五人のうちより御壹人なんと大坂へ來て下され。のこりの四人は順番にこのかり座敷のるすをおたのみ申したいといわるれば。五人ともうけ給り。御尤もなる仰まづその口はかへそうといふとも七月まではあつけておかれませ。昨日御うはさの當ふんの御つかひ金七月迄は拙者おとりかへ申しますと。万呑はもし大坂で三百兩取りかへし新町へでも入レこまれては。京の連中のかつてあしゝといふ下心にて念を入れ。さて相談きわまり案内しやなれば道具や彦兵衛とのをお供につかわしませふ。それは忝ない。しからばおの〳〵かたは跡をおたのみ申します。若しるすのうち室町のたなより若手代ともがまいりましたら相應に馳走して下さりませ。偖て彦兵衛との御俳名は。私はなにかなし松坂屋の松の字と彦兵衛の彦の字を俳名につけませふ。しかれはけふより松彦丈。ほつそくの悦び酒すぐにこれから大新方へ御れん中同道申そふ。さて新六貴丈の所より出船しませふと。ゑつぼにかけた大新がはや御出といふ所へ。むろ町の店より若手代四五人。これはよい所へすぐにお供と打ちつれてぎをん町へぞいそきける。さて新六方にてしばらくのうちなれど藝づくしの酒盛してふしみまでれんちう見おくり。初夜時分に松彦がしるべのといやよりふねにのり。まづ明日は道頓ぼりへ上るつもり。さても松彦丈。連中より外の人が下らうといふてくれられても貴丈はのかさぬつもりてあつたといはるれば。松彦よろこび。わたくしが道具しやうはいは大坂を二またに懸ねば勤まりませぬ。其かわり大坂で壹町目筋邊の道具屋よきおやどかたくさんにござります。サアわれらもその町宿がのそみ。本家の出店へ着するもよけれとも。物かたうて氣がつまり又第一此たひは内證金の立引なれば先づかくすがひみつ。さてそろ〳〵ねまいかとて。二人はひるの醉にまかせたつた一ね入になんにもしらぬうち。夜明てふねは着にけり。夫れより道頓堀へあがり。まづけふは休足がてらしばいにてもけんぶついたそう。いか樣さやうもよろしう御座りませふと。松彦が氣にあふやうに立廻り。一向風雅とて日本はしのはたどやへつれ。之落丈もむかしにかはりおとなしうなつたと。おぬしが手にほめて。中のあたり芝居へもゆかず。はま

しばいをけんぎんに拂ふて三切ばかり見て。件のはたこやへ歸られけるが。よいしゆと見て。ふろの口明をおめしなされと下女かいへば。まつ貴丈から。いや旦州からと。松彦がおまへついしやうにて之落丈から入れしが。之落がけさからの體にとんとよめぬ所があるゆゑ。風呂に入るうちにふくさつゝみの紙入を手に取りみれば。しつかりと重し。しかれはなを心得ぬ所あり。ちよとあけてみます。非道はいたしませぬ。神明これをゆるし給へと。らしやのかみいれおしあけみれば。重めのあるはなまりの玉にてやう〳〵正銀四五匁。はかりより金銀とてはなかりけり。松彦はぎよつとしたれとも。その間にふろよりあがりしゆゑまづかみ入れをその座になをし。そらさぬ顔にていたりけり。さて船ちんまつ彦がかほでふしみのとい屋にかゝりおく。之落が内より六百持て來たに。小遣錢と四五匁のかみ入にある小玉はかり。明日中にもたらぬ路銀の事たしかに見つけたれど。此場でいろにも見せては三貫貳百めの道く代にのしじやとなを心をおさめてすこしも色に出さす。旦那あしらいにしてさて明日はわたくしのしるへのかたへお出なされ。ぜんたいかやうな所で金銀の取引はなりませぬ。もし御旅しゆくはとむかふよりたつねた時かる〳〵しうみへますと。心の内ては宿錢の當分いらぬをいのりけり。之落はとかくげん氣つき。いろ〳〵と物このみいふを。子どもたらすやうにたゝきつけ。その夜はねさせ。翌日そう〳〵やどはらひ三百いだし。そば切やのはらひも百文なげ出し。殘る貳百の命にて壹町目すぢの椀屋久兵衛方へゆき。京都にてのとくゐかた此たひせう〳〵御用向あつて當地へおくたり。一兩日御やど御たのみ申すといへば。わん久かたもよいきやくと見。同商ばいは相たがい。上方は又かくべつ貴樣の土藏の石ずへする金の山の客大有とそやしかけ。少々大坂の道具もおもとめ下さるへしといへば。松彦はむねに劔のきつさき折り入てやうすをいへば代物かい付けのじやまにもなり。商人の恥。ふたつにはなぜその樣なかたりを手前へ同道めされたといわれては大坂のやりくりもしまいと。ひとり心をいためけるが。之落にむかいなんとかの金子借つけある江戸堀へお出はなされぬかといへば。いかさま追付まいるべし。ゑちぜん屋十兵衛と申してもめん問屋。

すなわちせつしやがいとこ筋とまがほてはなし。一はしりいて參らふと立ち出る。つらのにくさやはらだちをしばしわすれ鯛のしやうが酢て酒にまきらせまちいたり。やゝあつて立歸り。まづよろこんで下され。これより九朱の利足て又壹年も廻してくれる筈にそうだんしめて參りました。これ貴丈のおかけきうに同道してくれられたゆゑ積の通りに參りしといへば。まつ彦は物になれたる男にて。まつわたくしも安堵いたしました。これからわれらもかい物に出てまいりたし。貴公様おるす番と云ひつゝはや立出て。くだんの江戸堀のもめん屋をたつね行。ていしゆに逢ふて何心なくうらとへば。老人の物しつかにくわしくやうすをかたりけるは。なるほどあのものは手まへのがれぬものでござりますが。むろ町のたな手代のせがれにて五つの年にふた親にはなれ。てまへで十三になるまで丁稚同前にいたしおきしが。池田はむろまち。だんなのうばがよめりたるかた。これへ手前が親分にて養子にやりましたが。池田で人となりましたれど繼母のまことを。もちいず。不孝の仕あき。あく生の仕たいまゝ。勘當いたすはづなれど。養子の義理をおもひ銀壹貫めつけて京のたなを頼み手代ほうこうさせて。右壹貫目を。ばん頭があづかり。すゑ〳〵は少々の利足もつけてわたす筈にたのみ。たまかにつとめ宿這入の時はまた少々せわいたすつもりにて。二親のないことをふびんにおもひ。まゝ母のじひ心。池田は又外の手代中の子をやしなひ相續いたしますが。あのどろぼうめは。去ねんの冬。店へのぼり。三月たつやたたぬに。また店の氣に違ひ暇が出たるゆゑ。池田は先月おもてむきの勘當いたせしに。承れば木屋町に先々月よりざしきがりしておるげな。壹貫めのいのちて今日まではくらしたそうなが。もはや。なくしたやら。けふてまへへ來て。御むしんの申し納でござりますほどに。金貳拾兩かうりよくして下されといひおるゆゑ。いけ田は跡の月勘當する。金子ごとは一向へんじはせぬ。茶ものますことはならぬほどに。とつ〳〵と出て行と申しました。さだめて京には今でもたなの若手代共がくるでござりませふが。それはみなあいつが惡うした友だちども。そいつらもおつつけいとまがでますと。くわしくわけを聞て松彦もきもをひやし。道具代のうわさすれば。それは大ぶんのうり物。偖々きのどくなこと。何とぞ代物をきふに取りもどすやうに。なされませ。わたくしがかんがへてみまするに。此たび手まへで貳拾兩かしましたら。又それを元手に入れ一計略して見おるつもり。若しふできなら近日かけ落と見へます。ずいぶんお氣をつけられませ。その元様はお若いが。おやたちのことたいせつにおぼしめす心てい。たんとのことはなりませぬが。御そんが參つた時は内々で五兩と七兩とは拙者がまどふてしんぜませふと。かたじけない。たよりすくない。一禮をいふてはやいとま申し。ときつくむねをおしなでゝわん久かたへぞ歸りける。松彦心におもふは。しかればせつしやを同道して町やど取り。十兵衞をたばかり貳拾兩のしゆびするつもり。此うへやどで道具にても調へをると夢にゆめみるやうな物と。やどへもどりて之落に向ひ。俄に急な道具の請取物同商賣にてたのまれたれば。今晩夜ふねでのぼりたし。貴丈は御用も相濟たればおせわしくとも御出船と。ていしゆと歌仙してゐるもおそろしいはいかいと。思ふ心の色ほかにあらはれたるもつゆしらす。之落は名殘の花の場をのこしてこそは出でにけり。

第三　木屋町の借座敷て心能ふ夢のさめた上首尾

津の國の難波で風雅のゆめさめて。脚本のあかいうち自身俳名も取りおきし松坂屋の彦兵衞は。けさふしみへ七ツにつき。問屋で一向かゝりつゐて之落もその身も鶯籠にのり。五つ時分に京へ入り木屋町のさしきへ戻れは。夕部は契之万呑兩人のとまり番。室町の手代衆が。四五人もみへて美い盡の俳諧て夜かふけ。まだ夜半のゆめみてゐるさいちうへ。旦州の御かへりと彦兵衞が洞とゑにめをさまし。手水もつかはず出むかひ。まづ大坂の御手ぐみはと万呑が早たづぬれば。九朱の利足にして今一切まはしてくれるはづ。なんとしめたかとげん氣つけは。かねもの仕事はまたかくべつ。松彦丈御くたひれ。いはふて朝倉三はい入るつりゑびすの盃で。ちよと茂八。間辨しやと兩人が氣をつけ

てさいきをよろこぶと。何か出やうもしれされど。私はちと大坂て急なせり物をたのまれましたれば。まづかへりてまいりませふ。用事仕あげてまたのちほどに。留るをふり切彦兵衞はわが家へこそは歸りける。三人はこゝちよくさて手づかひのよろしい時はする程な事が上しゆび。七月まて貴公のおあそび銀もし堂かつぶれてはと。おまへもおつしやる。我らも申す。そこで宗匠句作りして金貳百兩せつしやかりうけ。宗匠と契之先生との加判にてきのふ取りひき相すまし。もし今日もおかへりなら。かうしやうしの山ぶきと。くわいちうより取出し之落丈の手に渡せば。これはだん〳〵お働き。然らば證文いたしませふ。なんのそれほどのめくさりかね御證文におよぶ物。しかし宗匠への念のためおはな紙に一寸うけとりをなされませといふ所へ。宗匠大新みまいに來り。これはぞんじの外はやいお登り。さて大坂のおしゆひは。極上と万呑がはなしにおの〳〵いさみけり。契之はれんちうにむかい。おの〳〵樣がたのおせわにて壹月にたらぬうちよほど門中も出來ましたれば。このあいたより初會を仕り度きつもりなれど。之落丈のおるすゆゑえん引いたし置ました。今日は日がらもよし。一向御面會下されまいかといへば。いか樣これはさいはひ。われ〳〵がのぞむ所さやうなら宗匠樣。万呑丈はたゞいまよりお出下され。何かのおさし圖おたのみ申したし。大しん丈は御くらうながら。風雅なりやうりのしゆかうお取持おたのみ申し。八ツじぶんより之落に御光來まち奉つると。四人一所に立ち出て。契之が宅へぞかへりける。戀なうて人をうごかす金銀の。之落がつゆをなめんため契之がかたへつく弟子は。ごふくやのやとばいり。われらはくわし屋のいんきよじやの。たばこ入屋の旦那じやの。せつしやは近所のひやうぐ屋でござりますのと。のちは箱屋のむす子。おけやのていしゆまではい人になりて。たこやくしの宿をかまへてからやう〳〵壹月たゝぬに。宗匠雨樂にまけぬ門弟。すいついたむまさは蛸藥師のつぼへこつほりと。はまる手づみぞせうしなり。さて契之がかたはけふ初會のよろこびを。おふさがむすぶのしこんぶ。いそがしくと。契之さん。大坂へも狀だしてと。よひことにつけても丹山夫婦のせわを思ひ出し。晝飯の出來初穗。未さるむけてそなへけ

れば。大新が又おふささん胡麻うらんすか。ほんにごまで思ひ出した。まつ彦のしらみのかわが大坂て請取物してきて。けさ木屋町で酒ものまずにゐにおつたが。大かた會も候得どもにしおるであろ。商にせい入るさりとは不風雅な男と。万呑と大しんがそしりかけ物は此月夜からすの繪讃物がよかろふと。宗匠もせわやいてゐらるゝ所へ。松彦がすまん顏で來れば。大新がそゝりかゝり。さきから君をまつ彦となんにもしらずに口合いふを。まづいづれも二階におはなし申したしと。四人をよせてさて之落がだん〳〵のやうす。大坂にてのせりふかみいれをそつとあけて見た事まてくわしく咄せば。四人ともなにと歌仙の月夜に釜。ハアと口あく其かほは。しつかいじごくの繪圖にある高盛にした飯の傍にゐるがきの樣なみふりで。中でもたんと宗匠が坊主あたまを搔れける。万呑はむねんのまなこに角をたて。せめていま一日まへにしれば貳百兩の金は渡さぬもの。しかしまだ不足はせまひ。木屋町へかけつけて。そつくびおさへ取てみせふ。いづれも御立とだんばしごをばた〳〵とおりけるが。宗匠雨樂は老の足ふみはづして三ツめよりさか樣に落られければ。そくざにめをまわし。やれ氣つけよ水よあいすよとおふさもなき〳〵立ちさわぐひやうしに。龜甲のくしを落せば。取りあげんとおもふうちに契之が針立のところから戻りかゝり。つい拾兩ほどのくしをふみくだいてしまひ。けふのはれになんの此くしさす事があると。取り込みの中でのふうふけんくわ。食山犬赤老の針術にて宗匠の氣はまづつきびやうぶ引廻しておふさにかいほうさせ置き。手のびのせぬうちにと三人は木屋町のさしきへゆきけるが。だいどころにいつもの男もみへず。しかれ共しちりんに炭火ほこらせいり酒がしかけあるゆゑ。先ちとおちつき。ざしきへ通りみれば主從ともに一人もゐず。こゑ上てよばはりても。おとのせぬこそ道理。今朝まであつた諸道具衣るゐ。着るゐひとつもなし。夫からおもての家主にたづねければ。今がたまてこゑがいたしましたがと。樣子を聞て大きにぎやうてんしてまへは七月まて兩替ののみこみが壹貫めござります。ほかに米みそしほまでも盆前までうけ込んてゐます。よもやそうはござるまい。どれ拙者もざしきへまいつてみませふと。まだまことにせぬか

ほつきでおくへゆき。やうすを見てとんと腰ぬかし。四人目とめを見合せうら口の水門のほとりを見れば。川原へぬけたやうす。石垣へ指かけたはしごにさげ札あり。取りあげみれば

今之落あとのおせわは宗匠の句のたねにせよお坊おさらば

と留別をおしみてこそ失にけり。

大和言葉 風俗俳人氣質 卷之三 終

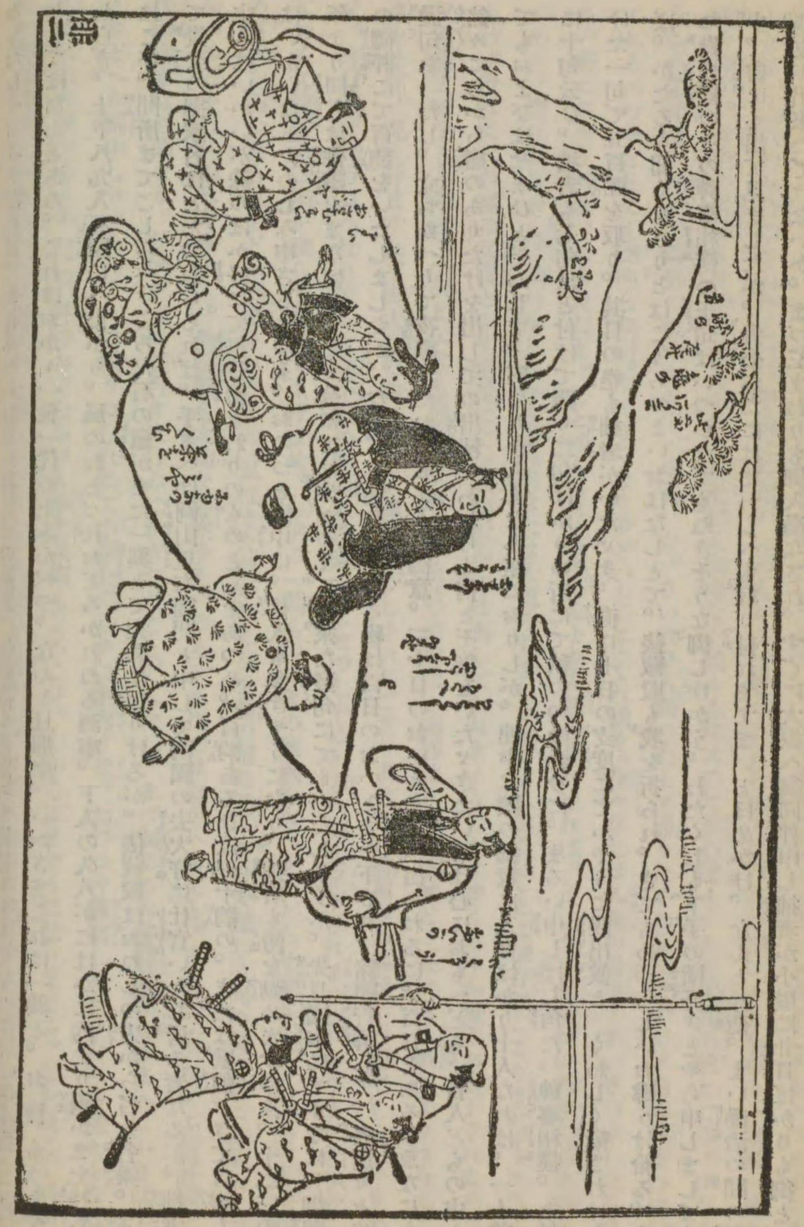
大和言葉 風俗俳人氣質 卷之四

第一 能衆の有馬行は一際目立松竹のまく湯

有馬よね衆の立姿。瀧の白糸いとしゆてならぬ。ゆるせぬしあるわかかたたもと。落葉山こそ名所なり。毎もときは に湯女うたの。戀をふくむや身をまもる。温泉の名湯は行基菩薩の開發にて諸人の病苦をのかれ來る藥師如來の靈地 ぞと。老若男女たつときもいやしきしつの山かつもわけへたてなき一の湯屋。二の湯に名高き宿坊。兵衛がかたに は。けふ大坂より大黒屋俵藏様の御入湯とて。五拾疊じきの別さしきを。出入の米屋魚屋まで。てん手にはいたりふき立て。兵衛が本の花客をいまや御入りとまちかねる。ていしゆふうふが立かわり難波の空をみわたせば。いづくもお なし秋の日も。こゝは色めくありさまは。げにたくさんによい物の有馬行き。又ひときはそみへにけり。はや船坂まで 御出と遠見のものが注しんすれば湯女のかゝが氣をせきて。小湯女引つれかけ出る。こゝまでやくしのむかひ坂。 けさから御駕の人を松竹の祝儀を染こむお暮湯でまつお足をあらはせませと。諸事手ぐみよふ積りしは。ちそうぶり とぞきこへけり。此度は俵藏殿もわざと供まわりもかる〳〵敷。荷物は五日以前よりはこばせ置き。駕のものも宿よ りかへし。手代一人にでつち草履とり主從四人にて心まかせにゆる〳〵湯治あるべき由。さして病氣はみへねどもこ ろばぬ先の杖はしら。丈夫に百はおたしかと寄こぞつての追從も。聞なれあらるゝつねなればめづらしからずそみへ にける。さて翌日晝湯すんで。當所龜の尾の瀧けんぶつとて。大湯女小湯女召しつれ。兵衛のていしゆが道案内にて 下人の久八にすこしのさゝゑを持たせ。かくべつのしゆかうは近日催すべし。まづけふは御内見などと兵衛が氣をか へ。すり火うちのたばこを一興にして川原づたひに出かけ。岩間をくゝる水のながれをふか〳〵稱美してしばらく是

に席をもふけゐらるゝ所へ。兵庫海道より西國がたの侍とみへ。上下四人通りかゝり。俵藏殿に物御たつね申したしとて。主人のお侍申されけるは。手前は西國がたのものにて候がわれら主人に百日の御いとまを願ひ。諸國一見に廻り申が。當所の名湯うけ給り及ながら。湯治望も御座なく候ゆゑ。國本にて其心得もいたさず罷出候ところ。びろうなから道中より始めて痔勞の氣味をおぼへ申あいた。さいはひ入湯いたして通りたくおもひますが。右御咄申わけにてしるべのやどとても御座らぬが。つてなくともやどいたしてくれ候や。各々かたは入湯の最中とすいさつ申したるゆゑ。所のさほうおたつね申たしと。ことばもかほも風俗もよき人柄と見へければ。ていしゆ兵衞がいんぎんに小腰かがめて。憚ながらお侍様へ申しあげます。あなたは大坂のおきやく様にて當所のことは御存じござりませず。わたくしはすなはち二の湯の兵衞と申す宿屋にて。西國がたには別しておれき〳〵のおきやくしゆか毎年お出下されます。又當所と申すところは。みなどなたも長御とうりうゆゑ。つてのない御客はきらいませど。夫はお人柄によりけりてござります。見うけますれば御大身のおさむらい様。何のしさいがござりませふ。有馬中の客屋がお宿申したがります。今日是で御目見へ仕りました私か福の神のお客様。直にせつしやめか方へ御光來下されませ。それ久八おとも申しておもて座敷の三階を殘らずあけて上げませ。お供の一間もつゝきの座敷をおへやにとらせませよ。さて旦那先づあの下人を召つれられやどへ御越下さりませ。私はまた此のだんなを龜の尾の瀧へ近日大御しゆ向の御内見にお供申し。おつつけそれへかへりますと。俵藏殿も大切な客衆ゆゑ。ゆるしも出ては立かへらんと。うらからねがふ蟹訴訟。俵藏殿もはや聞とり。此方どもの瀧行きはけふにかぎつたことでもなし。まづ初てのお客様兵衞も手まへにかまはずとやどへお供申しや。われ〳〵は殘りのむれにて小湯女のみやに案内させ。おつつけ歸宿しておさむらひ様ともお近つきになりませふとあれば。件のおさむらひも亭主兵衞もよろこび。しからばさやうに仕りませふ。なを後こく同宿にて貴意得べくの中へ。べり出すかゝ湯女が。なんと兵衞の旦那さん。お湯におめし遊ばすと一番におめし出しに預

るわたしやおみやなれば。お目見へのためお持たせの提重。俵藏様も西國のお殿様も打ちこんで。この水邊のお酒もりしてはなんとあろ。これはおかゝ一世一代の上ふんべつ。なんと旦那衆。いかさまこれは一興と。お侍もうちやわらぎ。上下八九人石原にへたがり。風のおとづれおどろかれぬる酒事。下人の久八がにはかに内より鍋かまを持ちはこび。間所まてこしらへ。ころた石の竈がまた一興とて大酒になりけるが。俵藏殿はおぬしの方から名を名乘。さて貴公の御家名はとたつねらるれば。手まへは岡山里右衞門と申して西國の去大守に仕官いたし居る者なるが。拙者主人はいかいが殊のほか好にて毎日傍まわりのものともをあつめ。百韵あるひは五十韵の。または歌仙。さては盡しはいかいなどたのしみ申さるゝゆゑ。おのづと家中に。俳人も多きやうになり。拙者も傍を勤めますゆゑ。十二三の年より同名は俳諧をまなばせ。たゞ今にては少々づゝ不出來な發句にてもいたしますが。先月國本にてすなはち御前の御評にて百韵をいたしましたが。なんでも卷を取ツたる物は百日のおいとまを下され。諸國行脚して。名所々々の發句をいたし。立ちかへりて夜嘶のたねにせよとの御意。三十日のおいとまさへ出かねるに。百日とあるゆゑなにか銘々にちから瘤のありたけを出しての出精。われらも何とぞ卷をいたゞきたいとは心におもへども。名人どもの中とてもおよびはせまひとぞんして。何のりきみもなふ座におりしが。連中は殿の御意に入りばかり十人なれば。一人前に十句云ひ。拙者も七句ほと付けて殘り二句ばかりの所にて秋のつけ合ひに。まるい中しばし角たつ神事相撲。と付けた一句で五百點を取り。其日の卷も拙者がいたゞき。直に七日の支度にてかやうに罷出候と。くわしく嘶されければ。かたるも聞くもさりとはこゝちのよいおはなしとて。俵藏殿も我を折られ。さてもめづらしいお噂うけ給る。また貴公様のその神事相撲の玉句はいつかたでもぬきそうな御しゆかう。わたくしも下手の横好きとやら申しまして少少。會にも出て見ましたが。貴公がたにはまわしへも取り付れますまいとほめかけ。なんと兵衞。よい湯治の間の御朋友が出來たではないか。まづ三まわりも御入湯なされ。すぐに大坂へ御同伴申し拙者が小屋に廿日ばかりも御とめ



申しませふと。たがいに苦のなひ養生場。これは逢ふたりかなふたり。西と東の大關の我等がかた屋の花客さま。まづまづ御宿へお供して三階のざしきより諸國の人が入湯する大兵小兵の丸はだか。お目にかけんと口やぐらにのせて。いさなひかへりけり。さて道々も俵藏殿と相談きわめ。一向里右衞門樣もお咄し合ひに五十疊の別座敷へおふたりの旦那衆。御一所に御座りたいと。湯女のみやが兵衞にさゝやけば。夫こそさいはひのぞむ所とうなづき。ほとなく宿へかへり。まづ兵衞が本宅で御祝儀の盃して女房にもおめみへさせ。それより俵藏殿の別ざしきへうつらせ。湯女が役目とて西國のお湯におめし。大坂のたゞいまお出と。幕も一所にして心能湯に入り。里右衞門殿の若黨が。手前にて水そふすいに奈良づけの香の物など。箸下におくと旅の氣さんじ。早や床とらせて二人の旦那は寢ながらの世間咄し。いろ〳〵と物がたる內。とかく銀事からの取合せけんのうはさも。これか入分。まだも二分は心中かと。それから梅津の川なかれのうはさまでか出て。又銀事の咄へもどりしが。さてその銀沙汰で里右衞門殿がおもひたされ。俵藏殿を慥な人と見こまれ樣子くわしく語りますとて。拙者親るゐ共よりかたみとして分けくれたる金子七百兩あり。これを近年かし付け置たればたゞ今にては大かた千兩はかりになりましたが。國本にて拙者か所持と申し貸し付けては殿へのきこゑ。侍の金銀をかし付くる事はゞかりある故。城下のたしかなものを賴みおきし所。これも近年不手まはしゆゑ。まづ金子は先々月取りかへしおきましたが。外にあつけそふな町人もさしあたりて見得ず。此度の行脚をさいはひに京か大坂にて廻し置きたし。なんとその節は貴さまの金子といふ物にしておせわなされて下されませふかとあれは。金持同士の出合はまたかくべつな物にて。それは御心安い儀。何時にても御國元へお歸りの節はお飛脚にて御のぼせなさりませ。四五千兩の借付けのうちへ指加へて上ケませふと。一口でやくそくが濟み。しからば大坂へ御同道申して。貴樣の御宅にしばらく逗留申スうち。はや飛脚仕て國本へ取りに遣はしませふ。か樣な事もあらふはしか。若し能い借し口せわしてくれる人もある時は。京か大坂から取りによこすこともあらふと。ふと家內の者

共へ申しましたが。丁どつもりか宜しうござる。萬事は大坂にて御相談申しませふ。拙者まづけふの龜の尾の發句をあんじまして。はねはずる〳〵に致しませう。貴丈もお休み。偖ても陽と陽とはさみしい物。明日はとうから〳〵からからと笑ひ寢入りにしられけり。

第二　腰ぬけの居ばからいで契之夫婦が工面した湯治

欲のくまだかまたさけると。世俗のたとへに違はず。都出水の雨樂宗匠は瓜流軒之落か計略にて二階から落され。腰ぬけとなり。あまつさへ。たのみにする万呑とも確執となりてはいかいの道もつとまらず。うらむるかたとては梅文居契之と。内儀のお雪がくちより毎日のくり事を。おふさがしやくのたねにして。契之も今は針たての祝儀におわるゝうき中より。ふうふがびんぼうを質屋の藏へあつけ置き。金一兩三歩さいかくして。宗匠にも少々工面させ。夫婦の者が介抱にて三日跡より湯治して一の湯の上大坊の方に。三階は勿論二かいもこり物とて下の小座敷を借り契之が背においてやう〳〵湯に入り。おふさはけん約の朝夕こしらへ。間さへあると溫泉寺の藥師如來へ詣でて。わたくし夫婦共主人の目をかすめましたる御ばつにて。之落といふ語に逢ひ。丸はだかになりました上。老人の雨樂殿まで腰ぬけになられたも皆我々か惡心よりおこりましたこと。せめて宗匠のこしぬけを全快させて下さりませと。身のさんげ滅罪して願を懸けけるが。ありがたや藥師の名湯にて一ト廻りほどに宗匠も湯口までは杖にすがりてありく樣になり。京へもそう〳〵狀を登して内儀にも安堵させ。三人とも春來このかたの笑顏して。百五十日ぶりですこし心能い酒事するうちにも。おふさは藥師の御名をとなへ。我ばかり精進して舒の炙りざかなもくはずに。花山椒で仕廻ふてゐる内。宗匠も久しぶりにて硯引よせ。少々前書して悦びの發句しられけるを。契之が吟じけるは。まづ題落葉山の月。當所落葉山は詩人もこれを題し歌人は愁傷の秋を詠ずれども。予落といふ緣を除き。けふ三日か中此名山を見

ず。今溫泉の名湯に藥師の御慈惠を受け。二度老の腰をのすこと佛力微妙を感じて。落葉山今腰の立月見かな。としたゝめけるゆゑ。契之は押いたゞき共に藥師如來をぞ敬けり。さて契之も筆そめて都蛸藥師の難に逢はずは。有馬藥師の佛德もなきなり。すなはち蛸も湯治も一如なりと前書して。蛸やくし美味や有馬慈悲やくし。として直に二句ともふさに持たせて溫泉寺へ奉納させけるが。同宿の客ふすま越にそこ〳〵と聞き。宗匠雨樂の座敷へすいさんして。おしほらしい御噂とあいさつし。件の發句を聞てはなはだ讃め。私も若州にて補山と申すはいかい師。是はよいおあい宿。けふよりは御心やすふ。おはなし申しませふ。それは御たがひとて。それから久來のなしみ同前になりて。明の日はいひ合せ。宗匠を宿の手駕に乘せ。ふさはるすに殘し。契之。補山。三ぎん同伴して蔵が瀧へゆき。邊の茶店に駕を立て。西行の古歌などを噂して。三人とも相應に發句面白く趣向し。紅葉の枝に契之が銘々のたんざくをむすびしが。きのふあたりも附たる體にて二句の發句あり。手に取りみればたしか覺ある人の手跡にて。思ひ出し見れ共しかと覺へず。まづ人知れずたもとへ入れ。さて長居して宗匠が此うへ風てもひかれてはあしかりなんと。程なく歸りけるが。道すがらも件の發句を取り出しよく〳〵見れば。一句は古主俵藏どのゝ手跡。いま一句は光棍の之落が筆跡なり。びつくりして契之もとんとよめず。主人俵藏どのがあのやうなまいすめと同道しらるゝ筈なし。これは之落めが手跡にまぎれなし。勿論主人の手跡はたしかな見おぼえありどちらぞ一人は見ちがへか。何にもせよ旦那か。之落めか。一人は當所へ來てゐるにちがいはなしと。これのみおもふて。うか〳〵歩行盲人の按摩にほふど行あたり。あちらこちらにどうめくらめと。しかられたのでおもひ出し。又件の發句を見れば。盲人も見た貌付や柿もみぢといふこの句は。たしかに之落めが毎度手柄ばなしに出た發句。さては當所に入りこみゐるにまぎれなし。なんでも身上のかたき討ち。近々に目に物見せんと一人いさみて。いつとなくうへ大坊へぞかへりけり。

大和言葉　風俗俳人氣質　巻之四　終

大和言葉

風俗俳人氣質 卷之五

第一 相宿の俳人の知恵を借り大かた呑込た小豆餅

世の中はうきふししづみ七度とて。契之も六軒めの奉公は大坂で仕くづし。京のたこやくしで帳面をしめ。今目のさめたはよもやねむけも來まいやう畫夜ろく〳〵に寢もせず。宗匠を大切にしてしんじんもおこたらぬゆゑ。日々順快におもむき。氣ほうしにも出かける樣なげんき。さて其日も程なくくれにおよび。まづ宗匠を入湯させ。それより夜飯のしたゝめなど濟で。宗匠もふさもちかく寄せ小聲になりて之落が當地に入りこみゐるよし咄せば。二人ともふしぎに思ひ。その俵藏樣の御同道が讀めぬもの。もし人たがへではあるまいかと。おふさは前後物あんしすれば。宗匠も。又老の心よわく貴丈かそその柿紅葉の發句を毎度之落めがうわさしたるゆゑ。夫れを證跡にしられても。古句は契之丈今の俳人は大かたはめますぞや。然らば之落がはめ句やら何もののしゆかうやらしれず。手跡のよふ似たはまま有るもの。得としあんしてせんぎめされ。相宿の補山師とも相談して見られよとあれば。いかさまさやうにいたしませふ。三人よれば文珠の知惠と。補山のくたびれてねてゐらるゝをおこして來て。契之が身のうへ。大坂よりこのかた之落にかたられたこと。ふさが衣るゐの。みなになつたことまで。ひとつもつゝまず打明し。そろ〳〵夜がふけ。あくひして口あく所へ。おもてを賣廻る小豆餅を買ふてくわせ。また之落めにたおされやまんと。そしり〳〵夜明け迄ぞはなしけり。偖て朝の入湯も仕舞てより。契之は上大坊のていしゆに逢ひ。大坂より大黒屋の俵藏殿といふ人が若し湯治に來てゐらるゝうはさは聞れぬか。成程其俵藏樣三四年ぶりて此たび。見へましたが。まへとの時より殊の外人すくなにして。三まわりも五まわりも入湯致されるよし。則ち二の湯の兵衞と申す所の客でござりますが。お人

すくなにこそあれ。今度もよほどお土産がござりませう。金持には何がなるやら。此客で有馬中の商人は蚤とりまなこでさわぎます。きのふも藥師まへのかご屋がよひあきなひをいたしましたな。其俵藏樣御ぞんじて御座りますか。いや〳〵近付ではござらぬが。名のたかひ分限者ゆゑ京都でもうわさ申し。偖て其人のつれがござるそうなが。是は何といふ仁ぞ名はお聞なされぬか。なるほど御つれも御座りますが。此お名は承りません。なんでもお侍でございますが。西國方のよほど大じんと申します評判を承りました。お供廻りはこれも三四人で御ざります。すべて當地へはお歷々のお侍が人すくなでみへます。さてそれにつきお咄を申しませふは。此近在にゐる東國方の浪人でござりますが。けつかうな掛物を三ぶく所持してゐられますよし。一ぶくは大燈國師の一行物。さて定家卿の舍兄成家卿の懷紙。今一ぶくは兼好の歌ぎれ。しゆふくは紗金。古金らんのるゐ。いづれも家のきわめあり。是を此たび賣拂て武具馬具をとゝのへ。よい主取ありて來春はそう〳〵江州へんの大守へすまれるつごうにて。俵藏どのゝ入湯を聞つけ一昨日兵衞が所へ持參して見せられました所。つれのお侍が存しの外の銀持にて。國本へ飛脚を立て金子をとりよせ。とゝのへたき望み。この侍は少々目も利ますげなて。向より金五百兩といふ物を四百五拾兩まで付けられましたれば。俵藏殿もまたのぞむ氣になつて其うへをゆく積りなれど。つれ同士の義理にて遠慮してもほしいていをていしゆがあいさつに入り。まづおふたりの中へ右のかけ物をおかい取りなされ。大坂へ御同道にて俵藏樣おかへりなされてからお望のかたへ付けあけておとゝのへなされるか。また一ぶくと二ふくとに割て直段の御相だんをなされ。おもとめなされますまいかといへば。これは尤なる挨拶とて一人手前に貳百貳拾五兩づゝ出してまづ中間へかい取るはづに極めしが。此お侍も宿へ路金が百兩封印のまゝあづけあるゆゑ。まづ是を手附けにいたし置き。國本へ早や打ちを立て金子取寄せんといわれましたげな。金方共のせりふはかくべつ。其もと樣の路金を手附けにいたしましてもすまず。又お國へ取りにつかわされても五日や六日にはお手に入らず。拙者が金子を五拾兩今渡し。殘りはたゞいまより

大坂へ飛脚を立て明日中にとり寄せ。明後日取り引きいたしませう。しかれば當分貳百兩あまり私がおとりかへ申すといふ物。ゆる〳〵お國へ飛脚をおたてなされ。大坂へお供してから御返金下さりませと。尤な俵藏殿の立引き。しからば。さやうになされて下さりませとて。くだんの浪人殿に手つけ金五拾兩わたし。しやんと手を打ち。銀もらふて酒呑んで明後日。又持參仕りませふと立たれました所が。ものゝふも金と云字に魂を入れて。腰の物を座敷にわすれて歸られ。跡から。おい〳〵と脇ざし持ておいかけましたげな。とかたり聞かせば。契之はなをもふしんはれず。まづていしゆに。よいくめんなおはなしを承りても。心がいそつきます。ある物は又ちがふた物とあいさつして。かつて へ立て。それより宗匠も相宿の補山とも評判して。浪人が脇ざしをわすれたが聞どころ。かのやつめにきわまつたといへば。宗匠。補山二人はかたり討ちの手がゝりが出來た。さりながら風をくらはぬやうにしいと長々引かれけり。

第二　そば切屋の參會が大事になる酒盛のはやり歌

びんぼうに窪れる人も世の中の模樣のうちぞあしき染物とて。なにほど金銀山のごとく持て居ても。まづしい者がなけねば下わざの奉公するものもなし。其日くらしがなけねば。足の不自由なものが駕にのることもならず。びんぼう人があればこそよいものも立たもの。これが世界中におもふまゝに金銀を持て居たら。まづ芝居のやくしやは此やうなおとなけない商賣はよしにせふといふてやめるであらふし。壹文ぐわしや。仕出し餅のるいは。顏がうれて人付合ひもいかゞといふてよの商ひにかはるでもあらふし。後は開帳まいりしても物賣もなし。芝居見よにもしてみせるものはなく。京大坂にごふく屋と銀かしばかりになり。世界は藥鑵で蛸ゆでたやうにかなるであろ。夫をおもへば不仕合しても當分下直な染物を請取りたとおもふて。氣を死なさずに家職を大事にして居るあいだに又極上染の注文も來るもの。今上染の大黑屋俵藏殿は。上大切のていしゆがうはさにちがいなく。近在の浪人が所持のかけ物を里

右衞門殿も相組四百五拾金に求めらるゝつもりにて。金子五拾兩手附を渡し殘りは。きのふ大坂へ飛脚を以て取りにのぼせ。明日夕方に取引する筈にきわめられしが。よいしゆの物好きとて今一日をまちかねて。宿に居ればたいくつとて當所の清水といふ所の名物そば切を目當に俵藏どのゝ手代の甚兵衞と丁稚とをつれ。里右衞門殿は草履取りばかり供に召しつれられ。主從五人清水へ行てたのしまれけるが。其せつ有馬中に出た盡のはやり歌を子供までがうたふ中に。わけて一トふし。有馬名高かき清水のむすめの顏につや有惚たいな。かゝさんひかりにぬつと出たア出たわいな。とうたふは此そばやがむすめつやの事なり。いかにも容儀うつくしき者なれは里右衞門殿行かゝりにこれに執心にて。俵藏殿ともさゝやき合ひ。つやもある戀も今ぞや色見草。と一句を書付け。さかづきにそへてさゝれければ。丁と請て。冬待かほのはづかしき照と。つやが脇を付ければ。とんとこれで里右衞門どのも腰打ちぬき。俵藏殿を小座敷へまねき。あの女に花をとらせたいが拙者懷中は小判と豆板と計。もし貴丈壹歩貳三十ばかり御所持はあるまひかとたづねられければ。何とか思はれけん俵藏殿はなはだ立腹の樣子とみへ。りよぐわいながら大坂では相應に人の評判にものつた拙者。壹歩貳三十借せならかせとの給ふてもすむ事を。所持はあるまいかとはむねんなる御ことば。大身のおさむらいともおぼへぬ不興。此まゝにてはゆるされず。かくごめされと。酒か無分別の腰の物。するりと引きぬかれしが。其さや口より壹歩が貳百ばかり雨のごとくに出てければ。里右衞門殿も二度びつくり。梅かへが身ふりでひろいあつめ。其うち貳三十切借り。さてつやをひそかによび。小すみにて殘らず紙にひんねぢてとらされければ。歌のふしとはちがひ。少々目にたつ事がありても夫から母をやもしかりには出ず。酒ばかり呑に出けるが。夕がたより湯女どももかけつけてけふの御趣向は我々共におうわさもなしと。ねだりまじりの酒宴たけなわになり。程なく夜分へうつりければ。里右衞門殿の若黨むかいに來り樣子をみるに。中々四ツや夜半にお立の體も見得ずと。我も小座敷にてよい機嫌になり。そろ〳〵藥師の邊りをあるき廻りけるが。石だんの中ほとにへたがり。心よふ風にふか

れて居る所を。おふさがいつもの藥師詣。おゆるしなされ通りますぞへと。秋さむき夜の肝じしがぞつと身にしゆみ。なんでも下向にはよいしゆびせんとまち居たれども。ふさはかきまぜるほどお禮やら又願やらくりかへし〳〵隙入れて居。なほくだんの男もそろ〳〵本堂の前に來かゝる所へ。ふさは下向すれば。女中樣は御きどく千萬。それこそ眞の湯治。おつ付けお湯も相應しておぬし樣があるならよい湯の子が出來ませふ。おやどはどれに御座りますそわたくしは一の湯の上大坊におります。さやうなら是までお見うけ申さんはず。せつしやは二の湯の兵衞の方に居ますといへば。おふさも是は幸の聞合せと。なをもことばを和らかにそば近くより。おつれ樣が大勢御座りませふ。お國はどこ本でとたつねれば。身どもは西國がたの者て御座るが。主人の供にて諸國見物にまわる處。少々主人痛所あるゆゑさいわい入湯いたされます。すなわち旦那のおつれと申すは大坂のれき〳〵大黑屋俵藏殿と申す仁。今日は當所清水へ出會いたされ。今むかいに參りしが。中々八ツより手前にはお立ありまじきやうす。拙者も一献たべて醉さまして是へまいつた所。なんとお手なりと引かせて下されまいかと。はやとひ藥師如來〳〵と不風雅にくどきかゝれば。ふさは無雅な所をかわゆくおもひ。契之が事も打ちわすれたか。手ばかり取てくださんして何のせんもなひこと。人に物おもわすやうなおしかたとふともゝをふつちりやれば。南無藥師るりかう如來と。たがひにいもせのちかひをして手を引合ひ。うか〳〵と落葉山のとそなる谷川へ行き。廿三夜の月見がてらに酒ばなし。水盃は氣味が惡しとて。件の男がこしさけにあるほくちの火でたばこの付ざしをして居る所へ思ひがけなく夫契之と補山とが來り。兩人の不儀ものめ見付けたからかくごせよといふに。二人は十方にくれうろたゆる。件の若黨を補山契之がふみたおし。用意せしか早や繩にくゝしあげ。おふさもふよいけがしやんなと。かたわらへのけ置き。さておのれが主人といふ侍は大語りの之落といふやつであろふ。けふ清水の料理屋へ俵藏殿同道でうせたをかんがへ居る內に。おのれが藥師の石段へすゞみにうせたをさいはひ。ふさにふきこんだ狂言まんまと計略に落葉山の此だに川。水くらはぬ先に一

白狀すればよし。さなくては此通りと。たつき取らへて岩の上へねじふせければ。まづおゆるし下さりませ。やうすつゝまず申します。元私めは九州の者で御座りますが。二親の勘當をうけ宿なしになりましてうか〳〵兵庫邊を徘徊してをりますうち。あの之落にめぐり逢ひ。たがひに二親の勘當請たる咄が合イ。是から語を商賣にしてくらす積りに相談きわめましたれは。之落が京の蛸藥師邊で一ト仕事した咄。中々讀の込んだ者ゆゑ先頭分にいたし。藥師の緣を祝ふて又當地へ入りこみ。大黑屋俵藏殿の入湯をかんがへ。まんまと同宿までをして今日迄おりますが。西國方の大身岡山里右衞門といふを眞受にしられしゆゑ。此近在に居る人見妖軒といふにせ物師の名人。三十年來語屋をして居る有髮の浪人をたのみ。古筆のかけ物をこしらへ四百五拾兩に賣らせ。俵藏殿をたばかり似せ物の元手金三拾兩を引き。殘りはわけ取りにする積。明日中に埒明ます所と一々めいはくに白狀。このうへの御慈悲にわたくしめはお助なされ下さりませといへば。三人共にあきれはて。さりとはおそろしいたくみ。一度ならず二度ならず古主俵藏まであぶない所。ふうふのものが恩ほうじにせんぎ仕ぬいて忠義にせんと。補山諸とも相談にて。白狀したで今こいつをゆるせは。大將めが飛でしまふて忠義のたねを失なふゆゑ。此まゝにて繩付にして宿へ引き。ていしゆにのみこませ明日まで土藏へ入れ置かんと。手ぬぐひにて口輪をはませ。上大坊方へつれかへりていしゆにかくといへば。それはあつぱれなお手柄。さやうなやつめは有馬中のあだとなるやつと。そのまゝ土藏へ入。箱はしごにさるつなぎ。かごの鳥かやひやめしを猫のごきに盛。そばにあてがふて。土戸までしめ。夫れから兵衞が所へ行。段々やうすをはなせば。兵衞も肝をつぶし。だまされたしかへしの工夫してゐる所へ。清水より能いきげんにて湯女共に手をひかれ。はやりうたを足拍子にして俵藏殿と二人が高笑でもどりければ。里右衞門が中間は若黨のやくしまいりして二度清水へもむかひにこず。宿へもかへらぬをふしんがり。近所をたづね廻りければ。はさみ箱持の十內も同くかけだし。里右衞門一人になりて俵藏殿の家來ばかりつれ件の別座敷へ入りけるが。兵衞がちよと內々御意得ましたとて俵藏殿ば

かりを本宅へよび。かの次第をかたれば。一向あきれてゐらるゝ内。別座敷へ里右衛門が中間あわたゞしく立ちかへり。俵藏殿家來にあいさつもせずと主人のそばへゆき。小ごゑになり。若黨文内がみへませぬゆゑ近所をたづねまわりますうち。一の湯の宿屋の下女と見へて二人づれでぬけ湯に入る客の供をして通り。兵衛には之落とやらじ落とやらいふ大語を客にしてゐることが今夜しれて。今相談のさいちう。若黨とやらは今がたつかまへられたと評判いたすを聞き。まづ立ちかへりました。思ひなしが。今がたからていしゆの顔付がいな物になりました。何かなしに片時も急に爰をふけるが專一といへば。里右衛門大に驚き。夫はまだもはやふ聞たが仕合。然らば草履取の熊助はどふした物。是はたゝ今わたくしがうわさいたしたれば。直に京口へかけ出しました。まづもつて安堵。若黨役の文内は迚もふびんにおもふてもせんなし。いそいでしたくせよといへ共。俵藏殿の家來が次の間にゐるゆゑ出樣もなき所を。里右衛門工夫して醉さましにぬけ湯にかるふ入て參らふほどに。今にも俵藏どのおかへりなら其通りいふてたもれ。どふて今夜はかわくであらふほどに。茶をよくしておいてたもれやと。くたんの中間召しつれ湯かた壹つで湯口へ行くふりして。湯のぬけよりも鰐の口。ぬけて何國へ行きけるか飛ぶがごとくに失にけり。さて兵衛がおくざしきは。俵藏殿をはじめ上大坊のていしゆまじりにいろ〳〵との相談。別座敷よりは俵藏殿草履取がいふは。ぬけ湯に里右衛門樣は御出なされ。おかへりはおそきに湯口へ參りせんさくいたしましても。ねからみへませぬといふゆゑ。兵衛の家内が手わけしてさかせども有馬中には居ず。其間に夜明けになりてもかへらず。偖は風をくろふてぬけた物にきわまれば。各むねんの齒ぎりしてゐる所へ。大坂よりのぼりて四百五拾兩の小判を夜通に持ち來たり。俵藏殿に渡せは。是で俵藏殿もさとりをひらき。今一日の事で此金もして歸られる所を。上大坊のうわさの契之が見付けたゆゑ。少々の損で事すむといふ物。契之ふうふは元手前が家來なるが。やうすありて不通の暇を出せしゆゑ。此度のさいなんに役に立つたといふもの。然らば善惡ともに世の中のもやう。それ兵衛里右衛門めが殘して歸りし物は何ほどあ

る。ぎんみしや。殘のそんは身共がせふと又けつこうな了簡。其まゝ別座敷へ行き殘りある物をみれば。はさみ箱の中にはたゞの一つも品はなし。ばん袋の樣なる物に砂をつめて入れ置き。當ぶん今頃着てゐた二ツ三ツの衣服がぬぎ捨てあるばかりにて。いつのまにぬかしたか大小もみへず。宿へ預かり置た百兩の金が物じやと封押切見れは。殘らず鞍馬小判に赤がねで裏打ちしたのなり。兵衛いよ〳〵立腹して。是からは金銀の損はかまわず上大坊の藏におる同るいめをせん義のたねにしてくれんといふを。俵藏殿があいさつして手前も五拾兩に歩判三十切の損なれど。四百五拾兩の事をおもふてからは悦びの酒でも呑ねばならず。何がなしにそなたの損は拙者がまどふてやるべし。此事さらりと川へ流しやと。夫より上大坊のていしゆをたのみ契之ふうふをよびよせ。是までは不埒なれど。此度かげながら忠しんの心神妙なるゆへ。今表むきでふさを其方へ緣に付けるほどに。ゆく〳〵ふびんをかけてとらせ。何角のしうぎはこの壹包と。金百兩盆にのせて契之にやられければ。盆中にあまるほどふう婦がため涙をこほしていたゞけば。はてあやまりて改むるにはゞかる事はなひは。さてとまだ慈悲ぶかひおなさけ。宗匠殿へ進ぜてたもとまた百兩に所持の名木をそへておくり兵衛と上大坊か中へ金貳百兩出し。貳つわりの算用よきやうにしてやり。小判の中から目むき出して酒事してゐらるゝ所へ。清水そばやのつやを母親がつれ來たり。昨日里右衛門樣がつやをひそかにおよび遊ばし。壹歩三十切お出しなされ是を花にやると御意あそばし。紙包にして下さりましたが。おかへりに仰られますやうは。能ふ思へば壹歩は明日貳十切も宿の下女共へやらねばならぬほどに。今その一歩持ちておれに付いてこい。直に小判と引きかへてとらそふと御意遊ばしましたれど。夜も更けますうへ。なんのおさむらい樣におうそがござりませふ。明日お引替下されませと申しましたれば。そんならあすまで借てくれと御意遊ばし。お堅い此樣に證文迄遊ばして下さりましたゆゑ。おいたゞきに參りました。よろしうお取次御賴申しますといふゆゑ。又三度めのびつくりをして俵藏殿にはなしすれば一向よい慰じやとありてつやにも金拾兩とらせ。四百五拾兩の小判も今四拾兩になれ

ば。手のよい語に逢ふたと思へど。兵衞が女房に三拾兩やり。殘りは下女や男のまき錢にしてさつぱりと埒明け。契之ふう婦もまづおいとま申して上大坊同道して宿へ歸り。宗匠にもくだんの百兩を渡せば。これは夢であろとてなんほでもまことにせず。まづ補山にも御禮申して藏の繩付もたすけてかへそうと。契之ていしゆ二人が補山丈の一間へ行けば。草臥て夜着すつぽりとかぶりねてゐらるゝ故。まづしばらくねせまして置たし。此間に藏のやつをほいまくり。補山樣には跡でお斷り申しませふ。若しお目が明てそのまゝにてたすけてはすまぬと仰られましては。俵藏樣のおことばがむになるとて。くだんの若黨を引出し。命めうがな大盜人めと尾貳三拾たたいて追出す所へ。若州の補山でござる。此度湯治に參りましたとわらづとに小鯛を貳拾枚計入れて。是は土產のおさだまりと。家來に云ひ付けさし出されしか。ていしゆも契之もかほの色はなし。おくに若州の補山樣はねてござるに。いやこれはと。今來た補山に物もいはず。ふるい〳〵二人はおくへ行きみれば。補山は夜着かぶつていびきかいてねてゐらるゝ。これはなんでも狐の補山が來た物。表へ犬をまはらせよ。さりながら。まづ此補山樣をおこして見よとて夜着引きまくれば。今迄いびきのした補山は見へず。石佛のやくしによらいがねさせましてあるゆゑ。宗匠もおふさもかけ出て家內壹度にこゑをあげ。隨喜の涙を流がしけり。是ひとへに契之ふう婦があやまつてあらためたる誠の念力。岩をも通す石佛の藥師如來と拜まれ給ひ。溫泉の佛力を末世に殘す名湯の。今日本にかくれなき諸人の病苦をまぬかれ來る。げにありがたき靈地なり。それより若州補山を座敷へ通し。始終のやうすを物がたれば。いよ〳〵これもかんしんして。件の石佛を早々打寄りてまづ御堂を立て。上大坊に壹年も守奉り。其後は溫泉寺へぞ納めけり。偖てそのせつ補山の土產物に持參しられた若狹小鯛。不思議の中ゆゑ入口にすて置きたれば。犬がよほどくふてしまひ。無疵なが九ツ尾ばかり七ツと殘りけるが。下人の三助がこれはあたら事をしをつた。二の湯へきつねのやうな客が來をつたゆゑ。德もあれば損もゆく。藏にしばられてゐたやつめは。きうめいなりとしをつたが。わなをぬけた三疋のきつねめがのこり

多いといへば。飯たきの玉が味噌すり〳〵。わかさ小鯛が九ツきつねが三疋尾が七ツといふたれば。はや歌にうたふて有馬中になり。後は京大坂のはやりうたになりし事いまの世にかくれなし。誠に藥師の御利生とうとかりける次第なり。

大和言葉 風俗俳人氣質 卷之五 大尾

諸道聽耳世間猿

諸道聽耳世間猿序

彼賢人の仲間法度に。僞めしき眞は語るとも。眞くさき虛言は吐かぬものとや。釋迦の藏經。莊子の南華經。うそのまことの眞のうそで。おもはくは我が心より出て。人の口にかはりゆき。貼となり鼬となる。其尾に喰つく世の噂を。天に口なく。婆嬶のそしりはしりにも。いは猿の戒しめを守れば。白痴狙の指ざしにあふ。さらば尻笑ひの戲れ草を。朝三暮四の筆まめに書聚めて。題號を。聽耳世間狙と呼ぶ事は。見猿の人の伽ともならんかし。

明和三年いぬのとし

浪華　和譯　太郎

諸道聽耳世間猿 總目錄

一之卷

一回　要害は間に合ぬ町人の城廓
　　先祖の武勇は商の懸引
　　浪人の算盤指南に
　　二一天作の五百石
二回　貧乏は神とじまり在す裏貸家
　　一人娘を犧牲に
　　するそなへた百燈より
　　秡ひ出す女房の邪神
三回　文盲は昔づくりの家藏
　　我目利して買ふ道具は
　　心もとない凌雲の榜
　　隱居の異見に夜は曙の茶器

二之卷

一回　孝行は力ありたけの相撲取

　　捧ぐ肩脊も弟が骨痛
　　跡から扇ぐかち荷物は
　　小山に近き古市の澁團
二回　宗旨は一向目の見えぬ信心者
　　看經に義太夫節は
　　こつはゐな二十四輩に
　　先だつ子供は白骨の御文
三回　呑こみは鬼一口の色茶屋
　　擊てどもならぬ內證は
　　冬も裸の男舞
　　笑も道理付髮の間違へ

三之卷

一回　器量は見るに煩腦の雨舍り
　　濡るゝ袂に玉襷は
　　小比丘尼がつかふ薙刀
　　逃るが勝は町人の奧の手
二回　身過はあぶない輕業の口上
　　鳴て悔しき驕香の見世物

乘合に見立られた人相は
大津八町の打身藥

三回　雀は百まで舞子の年寄
どこぞかめいる坊主客に
いひがゝりの卒都婆小町も
尻はつまらぬ若衆の惣嫁

四之巻

一回　兄弟は氣の合ぬ他人の始
傳授に抛うつ身代は
輕きが上の麻衣に
染替し身は三吉野の奥

二回　評判は黒吉の役者付合
顔見せはづれた江戸下りは
時知らぬ富士の峰より
越にこされぬ五十三次

三回　公界は既に三年の喪服
唐と倭の汐あひは
曖昧頭屋が女夫帳

そなた百迄名月の丹藥

五之巻

一回　昔は抹香烟たからぬ夜咄
吝嗇にかたまる古狐も
うま臭ひ趣向の捨罠に
かゝる遊びは下野の殺生石

二回　祈禱はなでこむ天狗の羽箒
あがる御圖にてんぽの皮
一はいはまる西代の深田は
それよ昔の猪股の小平六

三回　浮氣は一花嵯峨野の片折戸
大盜人の今同心は
殊勝げのなき古筆の贋物
都の錦は故郷の歸り咲

諸道聽耳世間猿　一之卷

㊀　要害は間に合ぬ町人の城廓

それ治まれる代の弓は弦をはずし。鎗は鞘に錆ついて。古道具屋に幾世經らん。我見ても久しくなりぬるが金百疋に負けてくれまいかと。一僕つれたお侍が。その鎗でまさかのときは。殿の御役にたつ事か。今の世は城より算盤を枕にして。御馬の先で。銀借る工面。今年二百十日は暴よかし。御藏米を直段よく賣拂ふて。天晴の感狀に預からんと。七星檀に風を祈り。先納銀の催促に。町人が詰懸ても。樓門に琴を拽しての請答へ。これを忠武侯諸譯發明の臣とはいふなり。昔は町人百姓とても武藝を勵みしと見えて。小西攝津守は堺の町人より一國一城の主になりたるとかや。其末の分れの家に小西三十郎とて。今に堺の大小路に角屋敷を構へし藥種問屋。主人の三十郎は未だ若年ながら。先祖の武勇を慕ひ。軍學を好みて不斷一刀を佩はさみ。居間には城取の砂物をつくりて。兵書あまた机に充滿。明暮孫吳が奇計を感じかねては。大祿も戴く望み。萬事の物好猛々しく。一里出るにも鷹匠足袋に武者草鞋。肌の守袋には一寸八歩の念じ佛。刀双段々壞の御誓ひ忘れさせ給ふなと。すはといふ時身がはりに立つて貰ふ心當。立にも居にも身を放さず。店の勘定藥種の高下も知らねば。近所の交際も絶えて。毎夜の咄し伽には町内の端に店がりして居る。甲州浪人山本勘六が方へ仕かけて。さま〳〵兵法を論じ。手前先祖の小西攝津守は賣人の家より起りて。武威を朝鮮國まで輝せし英雄。其元の先祖山本勘介殿は木曾の山林より出で。軍功を北國の雪に積し勇者。其末の其元。我等。かく御懇意に御出合申すも。兵の交り賴母しう存じますと。威儀を正して言ひ並ぶれば。此勘六は武士の腹に生れながら。生得劍術を嫌ひ。不鍛練ゆゑ。浪人のよすがに。手習ひ十算盤の指南して。何うぞ壹貫目くひ

ためたらば。商人とも出かけるつもりなれば。三十郎が軍學咄しし。とんと面白からねど。浪人といふ名に恥て。いか樣互に先祖は武勇の家。併し攝津守殿は手前先祖勘介よりは御大身ほど有て。器量はるかに勝つた大將かと存じまするは。今日の其元の身分藥種問屋で安樂に暮さるゝといふは。是全く先祖の餘光。孔明が八陣の法を殘せしに似て。天晴の大將。先祖の勘介などは。我は發明にもござつたれど。子孫の爲に才覺のわるい男。只今私浪人の身過に先祖の家業じやとて。柴刈も出來ませぬ。まだしも眼も足も滿足に產れたが仕合。左樣では御座らぬかといはるゝを。三十郎怪しからぬ顏にて。それは何うした仰せられ分。家業の藥種などは。町人の所作。羨むに足らず。又先祖の小西行重は。もつとも一旦大國は領したれど。いはゞ猛將と申もの。勘介殿は陪臣にて終られしかど。名は一天下に隱れなき軍師。既に手前が居宅を去年建直しましたが。あの地取を御覽なされて下され。あれが勘介殿の流義の繩張でござる。大小路通を大手といたし軒高く。兩店に開きて中をとり放し。寄來る商人物買を引つゝまんず手段。橫町は搦手。溝をふかめ。駒よせ犇しとうち。溝板は夜々くり引にいたし置ました。其外座敷內藏などにも寸志ばかり計略をはかり置ましたれど。むさと人に洩さん事を存じまして。大工日雇どもにも他言いたさせぬため。神文を取ましたと理屈がましく罵るに。勘六こらへ難て。それはわるい御合點。此太平の御代に。さまで要害をなされいでも氣支ひはござらぬ。今日の軍法は店の勘定の懸引。藥種の高下をはかりて賣買めさるゝが。孔明より楠より智勇兼備へた大將と申すもの。手前などが如く。算學では富士の山を崩して海を埋めれば。何十里が間は田地になりて。作ものが如何程あがると迄は割出しますれど。元手のない悲しさは。此活計を仕る。世には腹心の淋しい程無念な事はござらぬ。向後は軍學を止めて。ちと算學をなされたが肝要との意見得心せず。はて扨御浪人とも覺えぬ。商賣の懸引は手代共が居ますれば。拙者が仕るに及ばず。帳面も證文も此一腰で相濟事。もし約束を變ずる者には。心覺えの五郎政宗一尺八寸。胸元へさし付て。貸した借らぬの是非を明白に白狀いたさせます。腰の拔けた素町人めらの事な

れば。命にかへては陳じ申さぬと。兼々謀りをりますれば。ちつとも心を用ひるに及ばず。はて其元の御先祖勘介殿は左樣な卑劣な武士では無かつたに。是を思へば、楠は三代の忠臣。嗚呼と嘆じて其後は咄しにも來ざりけり。扨勘六は算學に達して萬事發明なる男と。取次せし者ありて。去西國の御大家へ五十人扶持にて。勘定方を兼て金役人のあり付。出立の日熨斗目大小立派に供廻り美々敷。小西三十郎が方へ案内乞て對面し。拙者儀兼々武籌も疎きとて。嘲弄いたされしかど。かたのごとく出世仕りたり。貴殿にも先達て御異見申した如く。向後は町人相應の算術を勤めて。武道をお止めなさるゝが肝要でござる。お氣にはまゐるまいながら。又々寸志を申進んぜると暇乞して出て行くを。三十郎鼻であしらひ。何と手代共見たか。世には物好な大名があるものじや。あんな侍に高祿をくれるから。我等も追付天晴の知行で。召出さるゝは確かな事と。夫より愈兵書に眼を止めて晝夜怠る事なく。倦む日はいつも戎島の波濤へ出て。眞直な針で釣をたれ。此針に魚の懸る時こそ。目の明いた大名が抱へには來るなれと。あんだらつくして居る中に。手代共が寄てかゝつて唐物の買こみ損に。さしもに山本勘介が繩張も。士卒の爲に落城して。今さら夢が覺むれば。一騎討に打なされてつゞく勢もなく。一家一門へも面目なく堺を立退て。大坂の乳母が方へ便り。やう〳〵殘りし軍用金十兩ばかりの細元手にて。小間物のかたげ賣。是も口が重たうてはいかず。淨瑠璃物眞似の一ツもして。面白をかしう云はねば。何時行ても用は無いと。すげない挨拶ゆゑ。俄に道頓堀へ入こみ役者の聲色の稽古。まだおれが仕さうなは中村吉右衞門じやと。立にも居るにも。花は三吉野人は武士。末世に殘る名こそ恥かし。舅殿後に逢はふと。武道の意氣込を忘れかね。是一ツを藝にして得意方をかけ廻れば。女中方が集りかつて。此方はいつも堅苦しい吉右衞門の物眞似ばかりさつしやる。ちと富十郎がお初德兵衞をして見せさしやれとせがまれて天窓をかき。富十郎が女楠でもいたしたら。寫して御目にかけませう。心中事は何うも得いたしませぬと斷いへば。いつも〳〵同じ咄。同じ聲色ではよい商も出來ぬから。いつそ田舍へ一挫と思ひ付て。彼山本勘六

を思ひ出し。其時の異見の深切。あの方へ下つて先非を悔て頼んだら。引そもないものと。小間物仕込みて舟便りに西國へ下り。城下へ入て尋ぬれば。勘六今は段々に出世して。五百石の御用人。案内乞て。私は泉州堺の町人小西三十郎と申者。勘六樣にはお馴染。ちと樣子ありて下りました。御逢なされて下さらば恭しと云ひ入るにそ。取次して勘六聞屆け。玄關へ出て對面すれば。變り果たる三十郎が姿。何も云ひ出さぬ先に一より十まで涙を流し。御意見を用ひませず。かくの仕合と。誤つて改めたる口上に。勘六哀を催し。扨々お心のつきやうが遲さに。あつたら身上を失くし召れたは殘念の至り。しかし悔みて返らぬこと。馴染と云ひ身共を頼みにはる〳〵との下向。隨分と家中傍輩へ取次して進ずべしと。懇なる詞にぶらさがり。毎日々々一家中をかけ廻り大分の商ひをして。かさね〳〵の御世話忝しと。一禮述て代金請取る段に。口次して遣はしたれば。此方へ三割の口錢を引申すと。算用して渡さるに肝を潰し。是は左樣になされて下されては。いつかう足のまいる事。有やうは此度御世話下されし商ひ物高で二割そこらの利分。それを三割お引なされては一割の損が參りますると。段々歎いても聞入ず。いや〳〵しらざ半分値といふ事がある。云はゞ武士の存ぜぬ小間物。三割の口錢はわづかな事。よい利が無くて濟むものかと。一向取あへぬのみか。其後は御用々々とて逢もせねば。三十郎は一生の口惜涙。無念や表裏侍めに欺かられた。過分の御知行を頂きながら。商人のすあいをとるとは。武士の風上にもおかぬ奴。損してすご〳〵歸らんより。一太刀恨みて立退んと。義心を鐵石に固めて付覘へば。時こそ到れ山本勘六が登城のかへり。薄暮の木蔭より踊り出。手ごろの棒にて乘物を打碎けば。主は見えずあき乘物。こは狼藉物と取まく家來をさん〳〵に打散らせば。殘りしは乘物と着替ばかり。智伯にあらぬ琥珀の羽織。せめては是をずん〳〵に引裂きしは晉の豫讓が思ひ入れ。われ此賊を討たずんばと天に誓ひ。毎日々々夜をこめて城下はづれの土橋の上に。北斗を拜し待あかせど。馬の沓の流るゝばかりにて。遂に黄石公は來らず。

㊀ 貧乏は神とゞまり在す裏貸家

神は正直の頭にやどり給へば。佛は決定往生とて。尻の穴に心を通はせ給ふ。神佛一體兩部とは高野大師の口車。所詮極樂と高天が原は。京と大坂の違ひにて。何方へ行ても歡樂の都なるべし。たかき屋にのぼりて見れば。瓦燒くなる大坂の上町邊高原といへるに。神とゞまりて石の上古太夫といふ神道者あり。固より唯一の貧乏にて。天の岩戸めきし爐路の奥に。兩の宮風の宮に崩れし窓に科戸の風を防ぎかねて。月に四匁の家賃さへ。遠かみゑみためはらひかねたり。女房はおゆふとて四十に三つ四つ毫たれど。爪はづれ賤しからず。夫の神心を受繼ぎて。湯津の爪櫛にくれを清め。いつも八重垣を出ずにしほたらと。二人が中の稻田姫。今年十五の桂の眉。名はおしでとつけて世のうきふしの忘れ草。手足は花車に背てゝも。身には汚れし古袷。せめて質種あるならば。雪花菜の神使ひ。惜いものじやとこれ沙汰なり。親古太夫は朝に出て暮るまで人の軒に祓ひたまへ。清き身過もかほどまで佩た鐺のつまりしは。まだいつまでぞ八百日ゆく。濱の眞砂の買がかり。なせど八百つきせねば。賴む力も夏過て。秋の頃よりぶらぶら病。神なし月の末つかた遠く根の國へ歸りければ。跡や枕にとり付て。殘る親子が悲しみ哀れといふもあまりあり。野邊の送りもやう〳〵と何賣てやら仕まひしが。けふよあすよと月日はたつ。中陰過てそれからは背中に腹のさびしさを。替て一入涙なり。此隣に蟬聲なす邪神。奉公人の口入に生馬の十兵衞とて。是も此春女房に分かれ隣づからの寡鴉。かねて古太夫に娘のおしでを苦界させよと勸むれど。何喰ひても一人娘を傾城などには思ひもよらず。御深切は忝しとちり灰もなくかてつけねば。掘そこなひし金の墓と。呑かわかして暮しけるが。時こそ來れと胸工み。打とけてのつまらぬ咄し。鬼と思へど問るれば。かゝろふ島のなき身をば涙ごかしに濡らして子ゆゑの闇に踏みかぶり。つひそれなりの轉寢はこれも神の緣結びと。隔の壁も打ぬいて表向の女房。娘とも親子の盃。十兵衞は思

ふ壺へ引入れて高原を宿替して。堀江の場中で二間口娘一人をあての槌。銀壹貫目を借出して普請もざつと取繕ひ。おしでは俄に三味線の稽古。箱風呂の洗ひみがき。鉢かつぎ姫が鉢のぬげたごとく。金の橘銀の梨子。皮薄で色白で顏だちなら物腰ならいはふ所もない上作物。中間うちの肝入共が打寄て。十兵衞はどうした奴。後家の和泉式部をふづくつて穴のある小野小町を養子にした。あいつは平の清盛じやと樣々の噂して羨まぬ者もなかりし。女房おゆうも廂につるゝ蓬ではなふて。松にまつはる捻藤根性に入かはり。銀になる娘じヤと可愛外に慾心魔王。祟德院樣ほど爪がのびて。おしでをしで野と改め親の內から自賄の藝子。時々は膝もとへ引つけて泉五のお客は高麗橋邊の兩替屋の番頭衆。年ばいも五十近いとあれば末頼母しい。なんぼそなたが嫌ふてもつまる紋日は出次第で。節季はいつも金參兩づつ文箱に入て持しておこしてなり。折節は內へまで仲間の汁で西照庵の戻りしやと。炙物を送つてくれての深切。あんなお方でなければ根がとげぬもの。拔つかくれついきたがりやる。禍半の足下さんとやらは島の內風俗のあばずれ。此間こちの門通らしやろ。時おりんがあれじやといふたゆゑ。格子から見たが髮は今はやる竹折髷とやらに。家茶繻子の胸高帶で。黑紬の羽織に大名衆の書判見るやうな替紋。重ね草履の尻の切れて有た樣子ではたんと汁のたらぬ風俗。商賣は何する人かしらねど。あの身持では鐵漿付ても袖詰ても杉原一束のあてにはかならぬ。とてもする勤めじや程に男ぶりを擇まずと。今時はとれる客と見たら眼痴でも鼻かけでも取外さぬやうに仕やらねば。味噌鹽のたしにはならぬぞや。內の者共も心得て禍半から人かこふと五度に三度は揚じやといへと。現在の娘さへさりとはすかさぬ人遣ひ一人の小女郎が三味線の稽古するを。われは晝中に高枕して長煙管べらりとくはへて。そりやそこが違ふたと生頰くはさるゝすさまじさ。中々兀頂の茶屋風呂屋の內儀でもあの樣にはないものと町中の取沙汰。昔の神ごころはどこやらゆきて。長髓彥を踏のばして人挨拶。天津こづらの憎い女房と誹らぬ者もなかりけり。亭主十兵衞はいつの頃よりやらめつたに神信心を仕出し。生馬の目も拔くと異名とつた男が心も弱々となりて。門口に八鼓の

大蛇を筒切にしたやうな注連縄を引はへて。家内には切かけの幣だらけ。月に六齋の百燈。節季の朝でも中臣の祓を三座づつあげねば茶粥にもすわらず。それにつれて慈悲深く嘸が家内を追遣へば。跡へまはつて詫言半分の猫なでごゑ。我判入れた奉公人の親が來て私も段々不仕合で又妹めも出しませねばなりませぬ。姉が居ります親子殿へ成ともと談合なされて下さりませと頼めば。十兵衛はにがり切て扨々こなたは道慾な心入れじやのう。姉ばかりか妹まで賣て喰ふとは子の可愛といふ事はござらぬか。わしも娘が自賄はたらいて居ますがどうぞはやう引したいと思へど。人様の世話になりました借金も少々あるゆゑそれまでと思ふて居ます。こなたの娘も賣さへすれば口錢の納る事なれど。そこをとある十兵衛じや。酒もちと止さしやれ。娘の身の油を呑やうな物じや。錢壹貫合力しましよ。青物なりと賣しやれ。此後にも姉が方へ無心などいふていくまいぞ。苦界する身の肩がすぼる事じや。嘸鹽物でも燒て茶漬進ぜてたもと。涙脆き事。杉本佐兵衛このかた。嬶は大森に出くわした。楠の亡魂のごとく背中からわめき付。是あんだら殿よい加減に盡さしやれ。口入商賣するものが口のはたの飯粒を拂ひ落すのみか。方もないわろに大枚の錢を合力は何事ぞと。疊叩いて熱えかへるを。はてさういやんな。あの衆もこちらも皆天照大神のお流れじや。まんざら他人ではないわいのと。何事も神様ごかし。お伊勢様へは年に二度づつ缺さず。住吉講天神講かけ錢倒れと制しても。聞耳潰しての信心に。女房もほつともてあまし。よう思ふて見れば。わし一人あたふたとして禰宜神主に奉公するやうなものと思案しかへて。横道遊び。春さきの樗蒲なぶりに日が暮ると其まゝ。袖なし羽織引かけて。近所隣の男交くら酒うちくらふて大口咄し。奉公人の遣ひやうから男を尼に敷自慢。痔に灸すゑてやる氣强い顔まで高なしの下作女房。夫十兵衛堪らへかねて。女のあらふ身持かそなたの今の不行儀を前の近付の衆が見られたら。皆十兵衛が心いきが移つたのと。そなたの科はいはひで。おれが浮名の立つ事じや。そういふ心になるといふも全く神々の罰と思はるゝ。ちと神棚でも拜んでお詫申しやと。度々の異見に。おゆう大きに腹を立て何といはしやるぞ。是が神の罰といふ物なら死れた古太夫殿はどうでござる。こなたぐらゐと違ふて神道のちんぷんかんを覺えぬいてゐられたけれど。一生乞食同前で死れたではないか常々こなたの役にもたゝぬ神たゝきが氣にいらぬ。伊勢講も百燒も内證の械が廻いでなるものか。其信心に遣ひすてゝ錢は何處から出るぞ。わしが娘のかげで是程にまで仕出した身上。こなたの物は一ツもない。わしに向ふて一言もいはしやる事はろなまい。兎てもいふたとて神なぶりはやめる心あるまい。神道者相應に高天が原に似た所の高原へ出ていにやと。箒おつとりはらひ出せば。理の當然に力なくすご〳〵と家出して。もとの高原へ宮うつし岩戸籠りの爐路住居。本綿襷に鈴打振りて。遠かみゑみ多目嬶めが爲に追出されまし〳〵て。と。家々の軒に立しは目前古太夫が恨みのなすわざと。人皆嘆は仕たりしが男を追出す厄神。女房はいつの世に酬ふかしらぬ。

㊂ 文盲は昔づくりの家藏

天子の劍。宰相の劍はすでに沽りぬ。今一口元帥の劍有り。是を沽人。先生ならでと張良の文作にのせられて。韓信是は迷惑となめらはれしが。西蜀への通り札を貰ひて。終に漢家四百年の基を興せしは子房の目利のはつれぬ所。なんぞ方寸の器物を見きはめたりとて目利者とはいふべからず。年々の相場に身上は乘て北濱の米問屋に。大豆屋七兵衛とて家つくりも昔ものゝかうとう親父。家内二十人暮しにて降ても照ても年分に千兩づつは。延てゆく鼻毛のあまりひとり息子七三郎はあま茶育にて釋迦でもくはぬいき過者。一度聞た事はちんふんかんでも遁さねば。耳塚と異名を付て息子中での憎みもの也。親七兵衛は根から土人形にて世間に何がはやらうとも。江戸合羽の煙草入に茶紬の置頭巾にて。店から臺所のきまりを心がけ芝居遊山は身がなまけると嫌ひ。茶の湯の茶は澁ふて呑れぬと。一俵十二匁の丹波茶に吉野栢の菓子にて尻のつまりし身持。朝鮮人を三度見たよりは咄のない男ぞかし。か程の老武者根

城もよく持固めたれは。最早七十に近きとて隱居の望み。法體して名を大愚と改められ。七三郎は七郎右衞門と呼れて我代知りたる顏にもつばら禪學に誇り。洞濟二派の悟錄に眼を止めるより自然と心高慢。米市場に拂子をふり立て。作麼生か千俵買ふ。什も三千買ふなどとゑしれぬことばをつかひ。僕兒少婦が茶碗一ツ破りしをも喝と叫んで三十棒を打けるにぞ。半季究めの奉公人は中戸の客板を打て放參々々と障をとりにける。付合が廣がるにつけて近頃より夢想國師の流れにふみかぶり。雪の朝茶春の夜咄と頻に古い物好になりて。生た萬寶全書とそやされて目利がる事すさまじ。上町邊の書物屋菊亭といふ發明者門口の這入ぬ程な掛物箱を持て來て。旦那此間はお見舞申しませぬ此横物は唐筆でござりますが。けしからぬ見事に見へますれど名印かないゆゑ。誰じややらしれませぬと出して見すれば。七郎右衞門一ト目見るよりせゝら笑ひそちも此樣な古筆を商はふと思はゞ。ちと心懸たがよい。是は魏の明帝の築かれし凌雲臺の額じや。此樓を築く時あやまりて額を釘にて打付たゆゑ。文字を書に韋誕といふ能筆を轆轤にて釣上て書せられたが。地より高き事廿五丈ありしよし。韋誕恐れて白髮となつたとあるが。其額のまくりと見へる。魏と唐とは唐は餘程後じやのに。唐筆とは書林にいふまじき文盲としかられて。是はしたり根から存ませぬ。あなたにお目にかけたればこそきつとわかりました。是は魏といふ國の人の書たのでござりますか。私は魏筆といふは贋物の事と存してをりました。左樣なら古い物でござります。お目利の上なればよいやうに買て下さりませといふにぞ。いか樣此文字の震ふた所が面白い。おれがきはめて安うも買れまい。金子廿兩に買てやらうといはるゝに。菊亭それでは口錢がござりませねど。旦那に見てもらいまして高ふも申されまいと置ていねば。跡へ壹丁目筋の刀屋が旦那あなたでなければ知れぬ物が出ましたと。朱鞘の相口を出して。是に庵に木瓜の目貫がかけてござりますが。此紋はまへかどに海老藏が來た時見ました曾我兄弟の紋所かと存じます。めつたに古う見へますれば。もし昔しの曾我殿がつまらぬ大晦日にまげられた。質屋の流れではあるまいか。御覽じて下さりませと指出すを。七郎右衞門とつて倩々見て是

を曾我兄弟が所持とまでは氣か付ても。どういふわけと云ふ事は壹丁目の拵屋の目には及ぶまい。是こそ曾我の時宗が箱王丸の昔。箱根の別當の許にて。敵工藤左衞門に始めて對面せし時。祐經より箱王に遣はせし。赤木の柄の差添じや。身も格別にはないが出所が面白い。銀廿枚なら置ていにやといはるゝに。さても〳〵學文知らぬ者は曾我とまでは氣がついても。根拔がいたしませぬゆゑ。旦那に廿枚て掘出されたと銀受取て歸りぬ。とかく道具屋で知れぬ物は此先生へ持て來て目利して買ふてもらふとは。商人の軍法大豆屋の城を賣おとさんとぞ謀りける。ある時伏見町加賀屋何某が方にて。道具會ありて。諸方の腹脹れども打寄て倦た道具は持て出で。珍らしき物をとかゝりける。永德の三幅對。德乘が緣かしら。砧の水指。瀧本の自畫賛。淺黃印金が一尺四方。高麗茶碗楊貴妃の天冠。定家卿の鼻鐳。法然上人の尿瓶まで。それ〳〵に難分けて市大きにはづみけり。かゝる中に六十有餘の老人山繭紬の服太に鼠小紋の羽織も綿のおちつきし大柄。私もちと拂ひたい物がござると二重切の花活に朱棗器一つ出されければ。何れも見て廻しまづ花活は銀五兩にをさまり。茶器は銀二兩より難けるに。いや〳〵それはあまりなりと引こめらるれば。段段難上て金百疋につけゝれば。なんと御隱居もふよい直段でござりますが。お放しなされませぬかと問へば。いやいやお目に入ねば是非なし。手前了簡とは大分相違いたすと取あへねば。はてなあ見た見がさして名物とも見えず。少少なれも見ゆればよい拂ひ直段であらふにといへど。たゞ默然と返事せられず。大豆屋七郎右衞門床脇より遙かに。御隱居御道具今一度御見せなされと。道具屋に取つがせ暫く眺入て。是はちと存じよりもあれば私が申請ませう。御不足ながら金子八十兩に負けて下されまいかといへば。其時老人手を打て。さても〳〵こなた樣はお若いが。道具をお好なさるゝと見へて天晴のお目利。八十兩では賣損がまゐれど。斯列んでござる道具屋衆も。金百疋相應と仰られた物を飛で大金にお付なさるゝは。此道具の素性御覽なされての事なれば負けて進ぜませうといはるゝに。一座大に興を醒し是はどうした名物と。明た口ふさがねば。七郎右衞門したり顏にていかさま千兩道具を小金にまけて下さる

るは。甚だ身にとつて大慶にこそござれ。連城の璧も見るものがござらいでは瓦礫も同前。これは室町殿の御重寶曙といふ茶器でござりますかと存る。ちと見所あつて申事じやが左樣でござりますかといへば。いかにも曙の名器でござると。臺所から取寄るは。七重の服紗十重の箱に。滿座の道具屋素人衆も是はと驚き。もみ手にて。七郎右衞門樣御目利の名物。今一度拜見いたし申たしと。懷から嗜みの鹽瀨取出すやら。手水遣ひに立やら。手に取て見れば見る程めつたにしほらしく見え。少しのなれといひしまで爰がどうもいはれぬ所と。寄こぞりて譽そやすに。老人重ねて。お素人方はともあれ。歷々の道具屋衆がござるが。いづれもの目利で求めさつしやる樂が大坂中にはあまたござらふが。今夕の體ではいつかう目の明た衆は一人も見へませぬ。向後は七郎右衞門殿をお賴み申して。道具の素性も見習はつしやるが貴樣方の家業といふ物じやと。あくまで惡口せられても一言の返答するものなく。一座しらけて其夜の會ははて。皆面目を失ひ歸りけり。是よりも此沙汰が廣くなりて京堺にも聞へければ。去る御大家より聞及ばれ。其曙の茶器は故ありて先祖より此方の家に所持する所。又々此度賣物に出たりとは。其意を得ず。しかし何れを眞僞とも定めがたければとて。大豆屋へ使者を立てられ。目利所をもつて改めさせられしに。並べては若干の違ひにて。御傳來もたしかに極。數札の證據もあれば。大豆屋の茶器は丸藥入にも劣りて見ゆるにぞ。又此噂か廣くなりて。目利が違ひしとて。七郎右衞門か異名を目違ひ先生といひはやしぬ。隱居大愚此樣子を聞及ばれ。大きに腹立し。七郎右衞門を呼付。いらざる目利自慢より大分の金銀を費すのみか。人に笑はれて大恥の名をとりし事。も と商人の道を忘れたるよりの事なり。町人は算筆とて外の事はきつと嗜なみて家業をつとめ。無用の目利いたすべからずと。席をうつて叱りつけ隱居へ歸られぬ。七郎右衞門跡を見送り手蹴の中音にて。卑しき海士の胎内にやどりて。諷はれしはいかゐ白痴の。

諸道聽耳世間猿　一之卷　終

諸道聽耳世間猿　二之卷

㊀　孝行は力ありたけの相撲取

孔子の參や魯なりと仰せられたは。曾子はたどうまひとの惡口。其曾子は孝經の作者なれば。孝行もちとまへめてなければならぬ事と。唐繪の竹。畫く生過者か告こみ違ひ。茶火ねばなをらぬものぞかし。枝折る栞は誰がためぞと捨らるゝ親の方から。捨ていぬる磔柱めにあんまりな慈悲心。此手の親が世間に多く。河豚の蝶のやうに切ても突ても煩はぬ息子を。あれは病者なゆゑ氣晴しになら。何なりと稽古させいと。涎三尺流らかして。糟谷宇左衞門がかけ聲はこちの息子に似ましたとはよつぽどな甘口。息子の穀つぶしに親父のあんたらを俊成卿に點してもらふたらば持どや仰せられん。今時は白い齒見せずに追ひ遣ふても。諸屋の夜食腹から始人の一切買葬禮の戻りに。竹田の新機關見る程の事は。きやつとうまるゝと知りぬいて居る世の中なり。播州高砂に相生浦之助とて手取の相撲あり。元より活業の丸裸にて一錢の貯へなく。屋上の鐘もひたるい腹には響の灘と力士立に喰しばつて。寒き夜をあかし瀉にいく夜寢覺て暮しぬ。此浦之助二親に孝行なる事近鄕に隱れなく。朝は星をいたゞきて曾根の鹽濱へ雇はれ麥一升の働き。冬は寒取に生疵の絶るまもなく。とふぞ親達を安樂に養ひたいと。四十八手の外に身を粉にはたひて身過の工夫。拵ぐを追ぬく貧乏神ありて。此親父は小博奕打て大酒喰ひ。なんぼ有ても掘ぬき世帶底はかとなく負くらせば。鬼の女房に鬼神とやら嘘衆も同じくなる口にて。針手もきかぬ石臼嘆。三度の朝夕の外に間鍋の菜好み。陰口が惡いとて近所の茶飲にさへはねのけられても。鎌婆がかへり子をいぢりたて。小遣錢が足ぬの博奕の元手が少ないのと。ねすり事のある狀。親に似ぬ鬼の樣な關取も土俵ほどな涙を覆しぬ。それさへあるに一人の弟がぶら〳〵と煩ひ出し

て。此處や彼處の身節が痛み。咽の下に口が明ていつをかきりの濕病ひ。立た事横へもせず。顔も手足もむさし坊の居喰とはこれなんめり。浦之助が身ひとつで愛染様ほど手足が有ても。迚もつまらぬ末六十日と。力足を踏みしめて。氣を春ざまに大坂の勸進相撲。何でもしてこいとちや遲しと早々登りて。番附に載てもらへば。何處へいても附廻る貧乏柱といふ所に。播州相生浦之助とかいたるはひたるそうには見えざりけり。其頃の關取は仙臺の眼力。九州の山揚山轉。紀州の駈拔。伊丹に鬼面。難波に唐綱などゝいふ。古今の大兵とりての功者。東西に分れて花々し。さあ今年はよい相撲じやと近年の大はづみ。高木屋橋がしはる程の人群集。高砂の町人衆も大坂見物に登りあはせ。此方の在所の相生もとるげな。とふぞよい相撲に勝がし國許の外聞もあれ。一廉花はとらすぞと。空色縮緬の羽織に郡内の大縞袷。金子五兩を包ませて。けふは勝かと。毎日々々割子の松川菱になる程力味で居らるれど。浦之助は親兄弟のづつなはが足に纏ひついて。行く日も來る日もあくるめなく。晴天十日物の見事に打付られて。高砂の外山の霞足たたず。國許の客衆も花出す鹽もあらざれば。姫路のおさかべといふ前髪相撲にやつてしまはれぬ。浦之助は我ながら身を爪つての男泣。せめて給銀に手はかけじと一兩たらずの身の油。褌にしかと括り付。西國へいぬる傍輩の相撲の。着替どもをひとつにして十二三貫目の歩荷持。顔は窶れて神崎の川中で剝ぐ尼が崎。悪い時にはとぼ〳〵と足元見えぬ武庫川や。祈れどきかぬ神心。道理で我も腰拔の。蘆屋の里も打過て。かゝる住憂き世の中を誰が住吉と蒐原の里。小揚賈ふも悪錢ひらなか摩耶嵐にはおろされず。錢がなほしや求め塚。纖もしや〳〵りもなき身をば。いつまで是でいく田河。運の築島ながしめに。鵜越の辛き世を逆落しとはあやにくの。所の名さへこり須摩や。明石がたがたふるひつゝ。やう〳〵内へ戻れば。爺親がにじり出て。内には火の雨が降ふとかまはず。大坂三界駈廻つて長々の留主に。親には不自由なめをさせたが。定めてよい銀がとれたであろと。聲かけられて。おづ〳〵と褌の下から海士が玉出すやうに温もつてある給銀を出して見すれば。不興顔に上方へ相撲々々といふて大そふたてゝ登つたは是

か。おきをらふ腕なしめ。此摑み取の世界に大坂の腹はれどもに這つくばふて。目くさり金の壹兩やそこら一夜さのはり代もなひ。不甲斐ない悴を持たゆゑ年寄て入米がわるい。病てをる弟めが達者なら此様には有まいと。支離所か行基の嘗てやらせらるゝやうな病ほうけを可愛がつてわめきつけば。二枚屏風のあちらから鼻聲にて兄貴戻つてか。大坂は結構な所で上手な醫者衆がたんとあるげな。わしが此病ひには五寶丹とやらいふ藥を飲だら愈るといふた人がある。代物は金一兩ほどじやと聞たが。買て來て下さつたかといふを。母親が釜の前で横煙管啣へながら。何のいのわが身のことを兄がかまふ氣はない。二親が飲代さへ咽しめしてあてがはぬもの。大方給銀も金の三兩やなどとはとれたであろけれど。大坂のけんたんやで仇酒喰ふて遣ひ捨たのでござらふ。親は拵ぐ子は樂するといふたとへに一ツも違ふた事はなひ。日本一の不孝者とはおのれが事じやと。遠道かけて戻つた息子に。熱茶一ふく飲さずに責せたげる泥棒親。こんな道慾な家人ありがたい日のめのさすも不思議ぞかし。浦之助は戻るやいな挫き付られてさりとはそうした事ではなひといひ譯するほどつきあがるにぞ。如何にも私が不器量からおまへ方に不自由させます。堪忍して機嫌なをして下されと。親々の辛いほど魂の琢ける底光り。思へば今度の相撲は始末ばかりして。蛸の足一本ばつかりとは喰なんだゆゑ脾腑づかなんだと。此中での相撲形氣。浦々の引網を手傳ひて撰制魚の生ぐちに肉走りて踏かためたり。足曳の。大和の御所に花相撲あれば。前にも懲ず旅立ちて今度は勝も勝たり七日の相撲拾ひをとりは取たれども。高が在所の土龍ども殊に土地に見知られねば。山伏の布施ほどな花もくれず。力瘤さすりおろして此勢ひに京の相撲ではおのれやれと。心の氣丈張り詰めし。竹の内峠を越えて古市川にさしかゝれば。跡からヲ、イ〳〵關取殿と呼かくるに。誰じやぞいと振返れば。年頃五十ばかりの痩男つゞれの肩結び上て醤油袋の頭巾。時分柄の澁うちは腰にさして。うそよごれた顔つき。漸々追つき是々親方まあそろ〳〵いかしやれ。こなたが大黒の大黒様へ參つていやしやる間。わしはちとあの寺がさすゆゑ脇道を廻つて來た内にはぐれましたと。水滸すゝりあげて馴々し

い挨拶。こなたはついど見た事もない和郎じやが念頃そうにいはしやる。そして見れば小淋しい顔つき。貧乏神の様なりでといふを。彼男これ關取。乞食つかまへて乞食といや腹立てる。直にはどふしたわるロと皆までいはざず。扨はおのれが是迄付廻はるゆゑ思ひばかくゆかなんだのじや。にくさも憎しと引かついて大地へどうどのめらすれば投られながら其裾にすがりつき。おまへと一體かうなつたはなみ大抵の事かいなアと。したひよるにぞつとして。それからの病つき。天道人を殺すのか。高砂や此うら船に病ひ船がつきて。いがみにいかむ尉と姥。千歳の鶏首物ほしげに。萬代の龜の首すつこめて。暮すのも天なるかな。命なる哉。

㊁ 宗旨は一向目の見えぬ信心者

去る淨土寺の說法を聽聞せしに。因果經にお初德兵衞が道行をまぜて。それ娑婆の果敢なき事は。たとはゞあだしか原の道の霜。一足つゝに消てゆく人の命。死る時は帷子一枚と。慾い惜いの惡念を離れさせ。婆嚊の臍くりをふるひ出させ。此施物をわるふ請る出家は。七生が間は牛に產るゝとござると。舌も乾かぬ所へ梵妻が安產したとの報に驚ろき。衣もそこ〳〵にかけ出さるゝを。殘つて居た講中が。和尙樣たつた今の說法に。施物を請て惡業をすると牛にうまるゝとおつしやつて。是はどふしたお身持と。とらまへて詰かくれば。氣はせきながらじら聲をつくり。はて扨こなた衆は凡夫心じやのう是しきで牛に產りやうなら。此世界は人と牛とがふりわけになつて。米市の外に牛の食物の相場が立ますわいのと。一言にしめして出てゆかれぬ。維摩は惡田に苗を植るごとしと。非人乞食にものやるを叱り給ふげな。まして此樣な僧に物やる事は雪隱へ錢落したやうなともたとへ給ふべし。たゞ愼みかたきは婬酒の二ツと親戀上人の見識。佛體を得し出家に肴喰せ女房持たせて。奉公をもせよ獵漁をもせよ。一向一心に念佛すればとくゝめるやうな勸めかた。末世の衆生の心では。經文より座禪より家業の妨げにならぬのみか。犬の手も人の手と

いふ時分に注連飾り松立る世話を助かり。上戸の覆面にたとへし暑ひ最中。屛風引廻して牡丹餅素麵の客家もなく。常盆常彼岸のならはせ有がたいとは。是斗りても思はねばならぬ宗旨ぞかし。さるによりて在家は信心のあまりに金銀を投うつ事。他の宗旨に百倍して。三百里あちらの仙臺の奥から霜月かけての六條參り。脊負ふた菰包みの中から小判の御冥加錢。取次なしに賽錢箱へ打こんで。涙を覆しての御恩報じは假令の信心でゆくものか。御相伴については一膳三文の白箸を。我喰ふた跡を國もとへの土產にして。一在所のものに戴すれば。ありがたいと思ふ心から輕い塵の落る事全く祖師の功德の廣大なると申すへし。河內の柏原に高持の百姓太郎右衞門とて。代々の堅門徒神棚は雜行とて御祓樣も內へ入れず。佛壇は心齋橋で木地から三貫目の誂へ。御眞向樣御脇掛皆々祖師の御正筆。朝夕の看經に二人の息子太郎七淸太郎とて。廿と十七になるものまでに肩衣かけさせ正信偈のつれぶし。悴共もありがたふござると同行中へひけらかさるに。惣領太郎七は佛嫌ひの芝居好き。佛壇へなをると。親父の歸命無量を。こんたんでのゑちやへと鼻歌て間に合せ。願以此功德は山アにぞ着にけりまでやくたいもなき仇口。弟の淸太郎は坊主まさりの有がたや。七首和讃八首和讃のつとめ方。五帖一部の御文樣には。どこからの何枚目にどふしたおすゝめがあると宙覺え。兄の淨瑠璃を氣の毒に思ひ。あなたの前で鼻歌いふとは信心が決定せぬゆゑの事と折ふしに異見すれど。太郎七は上の空親父樣はお年よられたれば有がたい筈の事。我々が年で佛付合するはあんまり早ひ。廿八日の精進も祖師樣が近付でもなし。母者人の日さへ精進すればよい事じや。そちもちと淨瑠璃を習ふて見や。お勤の節のやうな物てはない面白い事じやといふを。淸太郎かぶりをふり。そんな勿體ない事いはぬ物じや。今日斯して居るはみな御宗旨の御影なれば。親の日は少々落ても。御宗旨の日は精進を御逮夜からする物と。兄弟がいさかひ。親太郎右衞門襖を隔てゝ聞て入られ。扨々太郎七めは憎いやつじや。しかしあれが則無宿善とて如來樣に御緣のないのでかなあらふと。諦めて捨て置れぬ。弟淸太郎ある時親父の前へ出て。私はちと御願ひがござります。祖師上人は越後へ御配

流なされてより二十餘年の御經過。北國の雪に笈を負せ給ひての御苦勞はみな御自身の爲めではない。濁世の凡夫を助けんとの御修行と承はれば。おまへや私共が安樂に暮しまするも皆あなたの御善根と思へば。あまり冥加ない事と存ますゆゑ。せめて御舊跡の二十四輩を廻つて來たふござりますと思ひこんで願ふを。太郎右衞門大きに悅び。廿四輩は年來の大願で有たれど。御緣が薄ひやら是まで出るといふ時節もなかつたに。若い者のよふ思ひ立めされたと。けしからぬありがたがりやうにて。にはかの用意長旅の事なれば路金をしまつせずともと。着替雨具虫おさへの丸藥足痘の黑燒水の變りのふり出しよと。殘る所なく取揃へて。下作の小百姓に達者ものをえらみて。若い者の事萬事を賴むとくどいほどいひ付て。吉日の首途を見立てより。留主中の看經にも淸太郎めが無事にて歸りますやうにと。賴む木陰に雨もりて。淸太郎は常陸の板敷山で。山伏の盜人に出遇ひ。路金も着替もさつはりと剝とられ。主從非人同前にて命から〳〵東海道を逃登りて在所へは歸りしかど。剝れた上に叩かれた逆さま竹の痛みがつよく。燒栗の芽も出ずに極樂參りをなしけるにぞ。親太郎右衞門か力落し兩の手ももがれた悲しみ。日の立つに付て一家同行への諦め咄し。御舊跡廻りから病ついて歸りしも不慮な事のやうに思ひましたが。是が則ち信心の到りましたのでござらふ。淨土へお救ひに預りましたは不定世界を早ふ遁れた仕合者でござる。敎へて歸る子は知識といふは。淸太郎が事ぞと。悅び涙に深くむせび入られける。此歎きに引續きて兄太郎七に嫁合すとて呼とつて置し紀州の根來の姪。風の心地とて二三日起さりしが大傷寒にとりつめての臨終。是もあなたのお救ひと念比に御禮申せば。大和の小泉へ嫁入て居る中娘の初孫。はや瘡にて取てゆきししらせの使ひ。內に十年の餘飼ふた赤猫か井戸へ陷つて死だまで。皆如來樣のお救ひと。八萬四千の光明の中へ。攝取不捨の御盟ひを報恩謝德の信心他事なかりけり。ある時隣村の道場に本堂の棟上は。いつ何日と。大坂から舞子藝者を呼寄せければ。物見たけいの草中とて思ひの外の大參り。柏原の太郎右衞門も講中の一筆なれば。天氣のよいを悅び。精進酒ひとつ過して。地築の棒をつきならして。梭欄の葉箒賣たか親仁

店の端にもしばしは休みと。鍬がれた一節をやらるゝに。息子太郎七見るより爰でこそ我等が隱し藝を。親父に見せて驚かさんと。私も狂言一番致しませうといへば。御堂樣へ御奉公じや。何なりとせいとの赦しを受け。心得まかせの飛上り。矢の根曾我の荒事面眞赤にぬりこたくり。全裸の大廣袖角髮の大童。淨瑠璃に合しての思ひ入れ。見物は口々に。やう〳〵庄屋の一番息子めと譽るを聞て。親はこゝにと悅ばれける。太郎七は大音に。あゝらふしぎや左の腕のしびれしは。兄十郎が大磯にて敵工藤に遶りあひ毒酒を盛と覺えたり。たとへば此鬼鹿毛千里も飛べ萬里も行けと。思ひ入の力足に足代の繩が切て。高さ三丈程の所から眞逆さまに踏はづせば。やれ落たは氣がつかぬは藥よ水よの介抱に。親太郎右衞門はあわて騷き。悴やあい時宗やあいと呼いけれど氣はつかず。次第に冷て事きれたり。朝には江戸塗の紅顏も夕には白骨の身となれりと。御文樣も思ひ出されて。いかな親父も腰拔けて御救ひも程がある。これは又あんまりなかたつけやう。此上はわれらひとりのお救ひなれど。もそつと婆婆に用事があればまあ十年ばかり待て給はれと。一向一心にぞたのまれぬ。

㊂ 呑こみは鬼一口の色茶屋

吳越の人は文身とて惣身を彩り。衣服の代りとするほ。漁を常の活業として。水に沈みて世を渡るゆゑと聞しが江戸の競たて衆は入墨を腕ばかりか。身うちに龍の纏ひついた所。背中に眉間尺の首。尻こぶたに近江八景。弘法大師がござらば般若經六百卷でも彫てもらひかねぬ血氣壯。それが何の爲なら。上方野郎はなまぬるいとの力味から。滿足に產れた體を我と支離にならいでも。男は男で通ればこそ。江戸中がそふでもなし。額に鐵あてぬとて裸百貫の相場は彌勒の代まで變るべからず。昔より今にいたるまで百敷の都より天さがる鄙の末までも。替らぬ色は戀衣。送りかへせば比叡の山風と諸ひしも漕分れゆく室や御手洗の浪枕。こゝは名たゝる二挺だて葭原にのみ濡れぎぬを。染

ればかはる品川や。とんとはまりて深川に。鬼の喜助といふ寡茶屋。蒲團二疊にはした枕の漆も兀しとさん盃。いつでも肴は一種にて座敷といふが釜の前。七つ階子の戀の坂。晝ともいはぬとこ闇に。たてこめたればうつの山。夢見る事のならばこそ。寢かへるさへ油斷すればおちこちのたつ木部屋二階。隣あたりの思はくには。此茶屋町のたゞ中に。あそこで遊ぶ物好はどうした柴ぞとおもへば。さる事にて。入こむ客の風俗は。晝さがりし黒羽に落し佩の蝶。鮫も掃除のわるい鍔の埃り。天窓は色々の龍宮界。醫者俳諧師皷打のならず客。三十匁とつかふては。質種もなき神神を請こむ亭主が男ぶりは。競組の目にも堅縞のかます袖。十服つぎの煙草の烟。遠慮もなう客の面へ吹かけ。町所の知れた野郎なら賊でも連て來なさい客にすべい。疊上てもとらにやおかないといふ筈。名さへ鬼の喜助なれば。渡邊の綱でも仕過しのならぬ茶屋。そこさへ寄てくれるを嬉しがりて。家島與左衞門とて四座の末のすかんぴん。うつ皷のぶつともほうともならずもの。其中での水遊び。毎夜喜介が方へ降ても照てもかゝさねど。遊びは十日に一度のあてがい扶持。其間は吸物の加減に雷盆のかた相手酒の燗に氣轉をきかして。をつとよしなの板もと廻り。いはく有馬の湯の談合と。口合のいひつゞけに。親父今宵は拙判官じやと月囃子の謝禮を包みのまゝに露の間の二階籠り。それさへ下から天井裏を梭櫚箒でせり立られ。一寸壹わの仕過しが積れば金の一兩あまり。突やうに催促しられても。濟すあたてのないが定。遊びも今宵かぎりぞと念比に損かけて門口までもよりつかねば。喜介大きに腹を立見付次第に剝覺悟。與左衞門か所へ仕かけしに戸は閉よせて留守の體。内を覗けば疊までいつ賣拂て仕廻ふたやら。竹責子に鼠の巣紙屑ひとつ下駄片足。殘るものとてはさゝ蟹の家ばかりにて。與左衞門が影も見えず。隣の鍛冶屋で尋ぬれば宿替てゞもござらぬが。内はさつはりと賣たてゝ二三日も戻られませぬ。取替のござるのならちと御出が遲かつたといはるゝに。憎さも憎し居所も大方合點のそんじよそこと。柳原の古手屋の裏。正面むいては這入れぬ爐次の奥幸田嘉兵衞といふ狂言師の表札も雨じみし引たて戸。こゝには人の居る體にてきしれど。あかね古敷居を。むりやりに身の

這入だけ。誰といふは與左衞門が聲。いや深川の喜介じやあいに來たと云つゝ見れど眞闇かり。たゞごそつく物音ばかり。よく〳〵すかして見れば。主の嘉兵衞は寒中に古袷。木兎なつた背中には。着物に事を柿の本。短册ばりの二枚屏風を被りて。蓬萊山のすゝみ龜。今一人は與左衞門是はいつその丸。裸せめて褌引しめて挾ばこ覆の青漆皮。鼠の喰穴。首の入るたけ切あけてそれをすこしの肩ふせぎ。獄國の圖にもない二人が姿。寒さを凌ぐ火鉢さへ付木一枚もやして鼻だけ温い稻妻の。光のうちに憂やわするゝと。こゞなりよつても仇口はやまず。是は喜介よこそ尋ねて來山伏の豐心丹。さて拙らにはいかなる寸善尺魔が付まはるやら。えら茄子の大木でかくの仕合せ。ちとありの實の判官かあらば御引合せ頼みます。此節肉米澤山のたてに預りたい。嘉兵衞御存ないかあの先生えら粹じやと粹ごかしのことはり。逆さまにしてふるふたとて鼻血の外はしたらぬていたらく。さすがの鬼も呆れはて。此寒いに馬鹿な頬げた。盜人に釣だけンど錢百文合力すべい。酒でも買つて喰つたがよいと。二人が前へころりと投出して跡をも見ずに歸りける。兩人は跳り出てかの百銅を捧げつゝ。嘉兵衞が音頭に與左衞門がめつた踊。暫し奏でて餅酒に替へ一時の機嫌上戸。ほめきの中に寢入しは。樂しみ其中になきにしも非ず。獻上鯛一枚が百兩もする花のお江戸に是ほどの落武者もあるに違ひはなかりし。心からこそ身は丸裸そこらが藝者根性と面白がるも程あるべし。此與左衞門も其後はすつきりと世間ふさがりて身に倦はてた俄坊主。こゝに一ト月かしこに十日の假寢の夢。一歳あまり暮ゆきしが。身の内の財は朽る事なしと。持て生まれた皷の音。昔の弟子方より來てそふではすまぬと打寄りて。さる御大家へ御抱への世話も付髮に借着の御目見え。さつそくの有付。始めての御能に。三番目の松風は。御扶持人の醫師石川松庵が小皷。大皷は與左衞門。太夫も噺子も其日の大出來。こゝぞとうつ皷にいつのまにやら與左衞門が付髮落ちて。坊主天窓ふりまはすを。御棧敷とても氣はつかず。松庵の後見に出し生駒新八といふうろたへた男。落ちた付髮の門たかへ松庵の頭へむりやりに引付しかど。もとより心は張弓のいつの間に髮が出來たとも。村雨と見えしも今朝見れ

ば松風ばかりや殘るらんと。擊あげて。太夫ワキより樂屋へ入れば。引續いて笛小鼓。付髮の繻子鬢にさしぬき長絹の橋がかり。大鼓は法體して緋熨斗目に長上下。棧敷々々の御目にかゝり思はずどつと鬨の聲に。二人とも心付て頭を抱へ逃こみしが。松庵はさすがに老醫とて人がらをつくり。是々與左衞門殿。古語にも聖人は桃林に冠を糺さず瓜田に沓を入ずとござれば。其元の付髮が愚老に付てござつても手前が手はかけませぬ。自身はづしてとられよといふに。與左衞門痛み入つて後に廻はりて付髮をはづしつゝ。さるにても松庵老の首筋もとの黑さよと。八島の謠ひにて笑ふて左右へ分れけり。

諸道聽耳世間猿　二之卷　終

諸道聽耳世間猿　三之卷

㊀ 器量は見るに煩惱の雨舍り

臨兵鬪者皆陳烈在前といふ眞言を唱ふれば。打かけた刀の下も潛らるゝとて。歷々の大將が旗さし物に書て出らるるは。戰に望みて死を忘るとは嘘の皮。それなればこそ一番鎗が戰場の高名頭。先へ行のは酒屋の親方ではなうて心ようはないものなり。叡山三井寺奈良法師。無理いふてもだゝけても命を捨ての腕白は。加茂川の水双六の簺。思ふやうには任せぬぞといつの帝やらのくやみごと。坊主に天窓はりまける侍。昔はたんとありしやら。一來法師が輕業。武藏坊が大工道具。皆天狗まがいの惡僧原。これを思へば町人百姓ほど昔から今に至るまでも寢覺の安きものはあらじ。いやの侍。むづかしの尼法師と思へど京の知積院には坊主のこけら鮓が漬てあり。江戸の淺草の觀音參りは町人は百歩一なり。何事も廣い事を武藏野の樣なといひならはせしは昔にて。八百餘町に建つまり。諸大名の御屋敷神社佛閣の花麗はもとより。所によりて疊一枚が金子一兩しても借屋札はらぬ大湊。大芝居大叶大小間物大蕎麥切と。何でもかでも大の字を冠りて。今は氣の大きなる事武藏野の如しといへり。兩國橋は下總の國へかゝりしかくは名付しぞと。江戸初めての見物と見えて京家の武士の小者一人に風呂敷包持て草履がけ。菅笠柄袋の外は旅めかず。橋を渡りて河水に逆のぼりゆく道の。河の流れ岸の下草までも知らぬ道の珍らしく。三圍の明神にぬかつきて。かの其角が。白雨や田もみめぐりの神ならば。と雨乞せしは此社そと。心面白く氣も隅田川の渡し場にいたり。初めて遠くも來にけるかなとそこら見とるゝ折ふし。船頭が呼かけてヲヽイ乘のならはやうござれとわめくにぞ。あはれ都女郎ならばとたはむるゝに。船頭もぬからず。なりひらにとは申さぬと漕出しぬ。梅若が塚しるしの柳にたゞずむうち

に。もし旦那どふやら曇りましたが降らぬ中にそろ〳〵お戻りなされませぬかといふにぞ。いかさま日和が落た雨具の用意はなし。濡てはなろまいと。一二丁引返すにはやぼろ〳〵と降くれば。無南三寶と主從二人走りつまづきて。漸く禪宗臭き庵を見付け。まづ雨舍りをと内へ入りて。御免なれ手前ば旅の者でござるが。俄雨に合羽を持ず難儀仕まり。暫くが内雨をやめさして下されといひ入るに。釜の前に十三四の小比丘尼の目元凛しげなるが居て返事もせず。奥より旅のお侍こちへ這入て雨をやめてござりませといひつゝ出るを見れば。年の比廿四五の尼其美しさあてやかさ。物腰けはひも賤しからず。いはふ所のあるは額面に何が出來たやらべつたりと膏藥張ってあるのは正眞の玉に疵。もし善光寺の御印文を象鼻の格で包んでおくのではあろまいかと。見惚れながら腰かくれば。小尼が汲て出す入端。はてしほらしいといひつゝ煙草四五服くゆらすうちに。雨は次第に降しきりいつあがりそうな氣色も見えねば。主從途方にくれて居るを。主の尼氣毒に思ひ。旅の空に雨具もなしにさぞ御當惑。しかしきつう降ますればござられまい。見苦しけれど庵に一宿なされて。あす天氣に成てから江戸へ御出なされませと。打とけた詞に力を得。それは有がたい仕合せ。お詞にあまへゆるりと雨をやめませう。其うちには小止もござらふ御免なれと上へあがれば。そこは端ぢかまづこちへと奥へともなひ。緣の障子を開くれば。春雨の隅田河へ降くる氣色どうもいへず。うか〳〵と咄す内に遠寺の入相。これはならぬ濡てなりともそろ〳〵と身拵らへすれば。主の尼がどれへござる事ぞ。最早日ぼ暮ますに雨もやみませねば。是非とも御宿申すつもりで茶漬をこしらへさしましたといはるゝに。それは近比の御深切。つき上つた事ながら。一宿御無心申さうかといつそ心が落付て。家來も勝手にて横にならしやれと。木枕。添ふござりますと遠慮せぬが下郎のくせ。數寄や行燈の灯心かき立て。さあお茶漬と持て出るは宗哲の夜食膳。心を籠しもてなしに。是は御馳走尼御にもと。いひつゝ箸をとりて平皿の蓋とれば小鯛の難波煮。こりやどうじやと見合すうち亭主の尼立出て。里遠き庵の事なれば何をあげまするもふつゝかな事計り。ほんの御茶漬さあお箸なされませ。

お見合せなされてござるは。もしお精進と申やうな事にや。旅なればくるしうも。ござろまいと何げなき餌付に。一ゑんよめねどまゝの皮。喰ぬは損としたゝかにとりこめば。御酒一ツと燗鍋に添て雲雀の燒鳥。溫めてあげうと火鉢引よせてあふらるゝにいよ〳〵興覺め。これはどうでも江戸中のいたづら後家。いひわけまでに剃りこぼち此淋しい所に居るは夜どほしの責念佛。隣かまはずのお好樣。しかし男の影も見えぬは今夜は寺役でこぬとのしらせ。それで我等を泊たと見える。顏の膏藥もてつきりおどもりの濕の瘡。これをしめる奴も後には鼻落瓜になりをらふ。さりながらあの美しさは又とあるまい。なんでも今夜は一盃過して醉まぎれに。宿賃をこつちへせしめてくれんと舌なめづりして。しからばお辭宜なしにたべませうと。盃取上て一ツうけて。持合せましたがあげませうか。誠に他生の緣とやらことない御馳走にあづかります。今宵は夜とゝもしつぽりと咄しませうと。少し含ませての挨拶に。さいたをさへたの數重りて成とも尼のあるまじき不身持と思しめさうが。お侍は都方とあれば一入珍らしう好もしう存じましてあられぬお賴みの筋。閉て給はるかと打笑む顏の憎てらしい程可愛らしく。臑は三ツ井の堀ぬき井戸。夢ではないかと飛立つ嬉しさ。今宵の御禮には何事によらず承はりたし。ことに武士と見てのお賴み。しんぞ命でも差上まする所存。たのまるゝ拙者は仕合せものと。膝すりよせてそろ〳〵と手をとりにかゝるを。飛しさつて身がまへし。いや油斷は仕つらぬ。命でもと仰らるゝは眞劍の勝負こゝろみんとの事か。それとても引は申さねど。尼がお賴みは竹刀の所望。御仁體の奥床しさに御上達の程も思ひはかられて。未熟の藝愧しう存じます。夜長の徒然に一手お立合下されよ。御流儀は竹の内か關口か。尼か習ひ得しは柳生流を少しの嗜み。女の義とて遠慮なく踏こんで御立合下されよ。こりや小尼。其竹刀持てこよと詞の下より持て出る皮卷の竹刀二本。十文字にさし置て灯を遠ざけ。主の後にすわり同じ身がまへ。すはといはゞの眼さし。旅人大きに驚き。私は全く武士ではござりませぬ。京都下立賣の町人柳屋權兵衞雅名は里江と申もの。此度江戸見物に御出入の御所方より帶刀を許され旅ばかりの侍。遊藝ならば何なり

ともお相手。和歌詩作茶香鞠三絃漢畫もよほど書ますれど。兵法は扨おき相撲ひとつとつた事はござらず。お目利違ひ迷惑千萬。しかしのみこまぬはこなたのお身持。尼の姿で武藝とは物好がいき過まして。思ひがけがござらぬと顕ひ顕ひ尋ぬれば。御不審は尤も。わたしは江戸永代堀難波屋何某が娘。幼少より武藝を好みまして。さる浪人衆に稽古いたし柳生流一道の印可は殘らず傳へてをります。額面の疵は前々月木挽町で競と口論いたし四五人は見せつけましたれど。相手は大勢ゆゑ此如く疵を負ひました。あはれ侍なら此疵ばかりも二百石は確なもの。其喧嘩から一家共がよりまして。無理に尼にいたしまして此庵へ隱居させましたれど好の道ゆゑ閑居の樂しみに。これに居ます小比丘尼にも一手教へ置ました。お慰みに薙刀遣ふてお目にかけよといふより早く。玉襷ひらりとかけて飛上り。長押の薙刀石突とんと鞘をはづし。左右をはらふて水車目のまふ程の早業に。でかした〳〵。御覽の如く小腕には器用にございます。私も尼になりましてから法師武者の心で。名は筒井の淨妙の淨の字に辨慶の慶を合せて淨慶と申まする。卑下なされても其方樣の御仁體で町人とは心憎し。中々無手とは見えませぬぞ僞て叩き伏んとや。お立なくば此方から竹刀おつとり立ちあがれば。のうかなしやと主從もろともに横になつて逃て出れば。春の雨夜としんの闇こけつまろびつ命から〳〵。跡よりも武士たる者の女に後ろを見するかと云聲河風に吹送り。耳つきぬける怖しさに。兩國橋もいつ渡つたやらやう〳〵と旅宿へ歸り夜は明けぬ。きのふに懲てけふは芝居へ。中村勘三が二の替り見に行しが。上桟敷にきのふの尼。役者まじくらの酒もり。扨はやつぱり人で有たか。天狗でもないさうな。

(二) 身過はあぶない輕業の口上

國に宰相とならずば儒醫となりて人を救はんとあれど。其救ふといふ事阿彌陀如來の方へゆづりて。此度は愚老も大切には存じたれど。是は全く昨夜の雨風で時氣を受けられたと見えますと。いはるゝへり口無理でなし。我力一ば

い是で愈〳〵ふと思ふた所は如何にも藥違ひでない道理。十四經難經は讀むとも脈はめつたに見えぬ物じやげな。人の手取まへて尺八籟の指つかひ其間に心では。こゝは三分藥にして來れば。陳皮獨活桔梗の類をたんと盛ねばと。胸の内の十露盤が二進も三進もゆかぬ段になりて。醫はそも藥料の官なんぞ死命の官に預からんとは。さりとはよい迷口なれど。定業といふ得心があればこそ。親の敵じや立上つて勝負せいといふてくる人もなし。近年は賣藥が繁昌して。勸學寮の錦袋圓。富山反魂丹後藤黒丸子大黒屋の地黄丸小田原外郎俵屋ふり出し。其外數も限らぬ藥店。看板の外に胴木偶あるひは熊の子に氣にもすゝまぬ棒捻させ。ねむり落る梟を撞木につきする。家を吼して人寄せの口上に往來の足を止るまでの店ざらし。飼た鳥獸に親元がなふて仕合せぞかし。これや此とよみし逢坂の關路も。今は大津八丁に立つゞきて。商家建ならびたる中に。根元本家みすや針を商ふ家多し。此店付は間口五間十間にとり放して。所がらの大津繪襖。あけたあちらは座敷でなうて。庭前のあふ坂山が行も歸るも胸づかへた家建。其中に間口も狹き藥店打身藥 勝 劣散と。松板に養拙流のふすぼりて文字も見えず。主は惣髮の老人竹田周益とて。衆方規矩だのみの庸醫。女夫さへ渴々の朝夕。子は一人ありたれど。取所なき不幸ものゆゑ家出のなりに尋ねもせず。子のない昔とあきらめて一代切の了簡なれば幸に療治もはやらず。されど仕にせの打身藥一服廿四文づつ。札の辻の雲助が。日の岡峠でふみくぢつたがあの藥でよかつたといひ觸せば。矢橋の船頭が舟がはで突腕した痛が一服で愈つたと悦ぶとり沙汰。誰いふとなくよう賣れど。老人夫婦が手ずさひなれば。賣切す事のみにて。いつ鍋釜の賑ふ事なく。目の見える蟬丸夫婦知るも知らぬも哀とや見ん暮し成けり。されば年寄と紙袋は入れにやたゝぬといふたとへ。腹淋しい事も有しにや女夫二三日隔てゝ死なれければ。家主の針屋耳介頼母しい男にて。跡年比に取をいて。家出の息子が戻つて來る事もやと。破れ道具醫書四五册我方へ取て置れぬ。去程に家出の息子三平といふは年も三十にたらぬ浮氣もの。ふと八丁の出女に思はくかありて。ないもせぬ親の着そけまで打まげて。我も内證の借錢に尻つまらず。あてど

なしの欠落。大坂の長町に知己を尋ねて落つきしが。いつ限りなきかゝり人ゆゑ。あたりの旅籠屋へ身をよせて。住吉堺への宿引口先の發明にて熊野參りを蟻のつゞく程つれて戻るゆゑ。親方の悦び。よい者を抱へて此春は道者衆が多い利口者じやとほめそやせば。三平これを鼻にかけ傍輩への我儘。海道の雲介相手に端た錢のしこり博奕に。親方の手前二三貫の仕過し。爰にも又居られぬ首尾。生れ付た口松に宿引の間にあひがしみついて。張儀蘇秦のやりばなし。舌一枚あれば世界は樂じやと。一日暮しの胴がすわりて輕業の口上に雇はれ。天王寺の彼岸中。太夫は長崎仙人鶴之介といふ一本綱の名人。小家がけ高く初日からの大入。囃叭ちやるめらに三味線を合して。三平は二挺太鼓のうちまぜ。柿の袴の肩衣ばかりにて。東西々々。扨まかり出られましたが此度の太夫。長崎仙人鶴の介と申まして。御當地はじめての御目見え。最初仕つりますが。かけわたしました一本綱の上にて式三番叟の一曲。次に花傘居合の一手。達摩大師座禪車。獅子の洞入。鶯の谷渡り。猿の木のぼり大津馬の追がらし。跡は四本綱渡天の一曲。ハリ〳〵ドウ〳〵と聲はり上てしやべりちらせば。輕業もようするが口上が上手じやと近年の評判。そこを仕舞て阿彌陀池の開帳。天滿天神の境内。京の四條河原の凉みにて。太夫仙人鶴の助。京女房の脛の白きに通を失なひ。山雀の逆おとしに落て肢暈て跡のどよみ。まづさしあたりて間に合ねば。凉みの間の大設けを取はづしてはなろまいと。俄に見世物のもくろみ。思はしい支離もなく。どうせうと思案の最中。壁隣の油屋の絞りを働く男が。盗猫を引とらへて借屋中わめきちらすを聞より。ふつと思ひ付て。其猫わしにもらはかして下されと引さげて戻るやいな。燃あがる柴火の中へほうりこめば。苦しさのあまりに飛あがるを。打こみ投こみて髭も毛もさつぱりと燒はらひ。口押割てはり木をかへば。ギヤツとばかりのなく音も出ず。それを剃金の網へ追こみてサア〳〵此度紅毛から渡つた生き麝香はこれじや。正のものを生でお目にかけるとわめきちらして。一兩十四五文の五種香をめつたにくゆらすれば。是は珍らしい生た麝香は今見はじめじや。併しとんと猫に毛のないやうな物じやと見て居る内に。口にかうたる木が拔けて。一聲

ニヤンヲと鳴しかば。見物は可笑がりて。此麝香の名は三毛とはいひませぬかと。大笑ひにてそれからは虻もたからず是ではいかぬ。大坂の長町へ下り何なりともくろんでと。翌朝畫舟に飛乘りて錢設けの工夫にこり。うか〳〵と煙管咬へて居る乘合に。五人前借切て家來一人。挾箱一荷の旅人。卑しからぬ仁體なるが。三平が顔をつく〳〵見て。貴樣は何處でござると尋ぬれば。私は京都の者急用にて大坂へ下りまするといへば。されば先程から其元の人相を見て居まするに天晴秀才出世する人なれども。只今の產業何めさるゝかしらぬが。妖怪に心神を破らるゝ相が見ゆるによりてよりお尋ね申す。天性人の下にたゝぬ身分なるに。殊の外相を損じめされたといはるゝに。三平肝をつぶし是は不思議何を隱しませうぞ。私ももとはそと致したる者の悴。心から落魄れてわるい身過を致してをります。今日は大坂の長町へ見世物のもくろみに下ります。かやうな事を致しますも不孝の罰と今思ひしりました。どうぞ人らしい身に成たうござりますか。何を致したらようござりますぞ。ついでに御覽して下さりませと賴めば。怪異に惱む所の相がそれでしれました。貴樣の相も學道がひらひてあれば。そろ〳〵醫でもめさるゝか。藥店などもようござらふといはるゝから。心つきて。大津の親元の打身藥よう賣た仕にせなりしを。今は過ゆかれしと聞けば跡はどうなりし事やら。何でも大津へ是からいて家主にたより其方剏を吟味せんと。俄に思ひ入がかはりて。船頭牧方へつけて下され寄る所があるゆゑあがりますと。人相見に一禮いふて伏見へ取て歸し。大瓶谷を大津へ出て八丁の親里針屋耳助方へ行きて。段々の不埒を申わけの嘘八百。世帶道具醫書ともに乞ひ受け。打身藥を調合して荷物立派に飾り立て。刺下の奴にかつがせて。大津より京。伏見。淀。鳥羽の端々まで。足かぎり口に任せてしら聲のひねり口上。手前家法勝劣散。功能の義は。第一打身脚氣立ぐらみ中風痲痺痲木一切不順の妙藥なり。別して產前產後には神妙の藥能。其外萬病に用ひて功を見ずと云ふ事なし。かやう申せばいづれも樣が。其やうに何病でも利く時は。世界に醫者は入らぬものかと仰せられませうが。如何にも當時町方の醫者衆が。銀口入嫁入の仲人茶屋文の屆け處。初日棧敷の使なさる

る方々の醫案の藥召上らるゝは。必竟追剝ぎ原へ。蹇狩にござる同前。しかれば手前の勝劣散は諸病本服功驗の外心を用ひず。人を救ふに他念なければお立合の方々は。藥の功能御試みの方々は。代物お持合せがござらずとお召なされて。如何にも此藥はあの者が申た通り。たちまち功を見たと思し召さば。又々藥お召なさるゝ節。其代物を遣はされませ。家傳名法勝劣散ハリ〳〵トウ〳〵と輕業の口上。拍子に間にあひは云次第。もとよりまや藥にもあらず呑で功を見るもの多く。日まし夜ましに賣ひろめて。次第に手前よろしく。古郷なれば。大津八丁朴の辻に五間口の家敷を求めて。店つき花々敷飾りたて。見世物士から引かへした出世とて。屋根に金の麝香を目印とし。諸國の出店町町の取次所。岡目からも。二三百貫目の居なしにて。純子縮緬の常服太に金拵の小脇指小坊主の僕兒つれて。石山三井の花に明くれ。此身になりても零落には長町の宿なし住居も四も八もくはぬとて。名を大津屋四茂八と改めて。世をうらやすに暮すのも。親の光りは七光り。大津八丁の勝劣散とて近年の仕出しなるよし。

㊂ 雀は百まで舞子の年寄

おそろしき物老の化粧師走の月と。近松門左衛門が筆まめ。トラヤア〳〵といふ唐音も今は昔と成けらし。されば女は髪かたちといへどよい年な後家の逆馬に入ての氣嗜み。きはめて其家には加賀の繻絆着た出頭手代があるものなり。連合の末期に泣くづをれて髪尖切て棺へ抛とみ。付てもいきたやうに歎かるゝ丙儀の。もの一年と持こたへの仕たは珍らしい物ぞ。子を思ひ家を思へば髪切とも尼になるとも。一家の差圖遺言の趣き。それをかまはずはやまるは皆徒者の癖ぞかし。去富家の後家御が六十にあまる十筋毛を。九萬里に羽織のす大鵬ほど髪出して。紅粉おしろいを皺にすりこみ。つくりすましての墓參り。和尚樣の精進料理がくひたらず。寡住の達者づくりに吸付て。花見芝居にかこつけ臍の下の岩清水をかへほせば。彼まめ男は三界のならず者にて。ある夜の出合から我内へ引込みて。今日より

女房にするからいなす事はならぬと。銀にする氣の横倒し。世取の惣領は生れたちの實體者。常々母の身持をば世間の口へ手をあてゝ案じ暮しの上なれば。猶更濟ぬと氣をもんで。手代を迎ひにやらるれど。二日三日の居つゞけに腰抜されししみたれ後家。あのやうにいふてならまだ四五日もいなれまい。息子の手前もよいやうにいふてたも。お居間にそつと囁ひて櫛笥鏡臺をおこしてたもと。どこまで白痴をつくも髪の恥しらが。漸く侘言たら〳〵で一廉のあつかひ代。竊に勸めしと思へども世間一ばいこれ沙汰。こんな母親を持し身は。實よき鎧に五枚兜を着てあるいても。突くやうでさすやうで恙虫の穴へも入りたかるべし。それとは事かはりたれど。京の智恩院の古門前に辰巳屋宇治江といふ舞子あり。ちよつと聞ては好もしい名なれど。三十年前はよい女房でもありし事か。ことし五十にあまれども心ばかりはうら若み。ねよげに見えねば是までに片付もなく。とやかくするうちに百歳の半婆となりしが。幼少より縫くゝりに疎く。今更針の蚯蚓も通らぬ年で。裸人形の服も縫ならはれず。いつまで草のうか〳〵とやはり宇治江で舞と三味線。毎日の鏡立に向ひて頭の白くなるを悔みながら。それを市宇賀の伽羅煉で。きんしやう〳〵の大吉髷のと。鰹節あんだやうに結立て。腰に梓の弓をのしきり。幅廣繻子の三重廻り。吉彌結びに金糸の房たつぷりと。塗下駄に青天井の日傘。夜目遠目にも女の外科とよりはいひやうのなき風俗。東石垣の井筒屋に山もどりの年寄客。色氣は有ても肝心の所が間に合ず。わつさりと一ツ飲ふ。どれぞ舞子をと物ずけば。お客の年には相應と。花車が差圖で宇治江を呼に走らすれば。いつても内に入りまいのわるい舞子。呼に來たかエイ〳〵と疝氣さすつて衣裳に着替。足もとがあぶないと。中風の用心に弓張提灯。おくらるゝ後ろ影のいぶせさ。座敷へ出るといな客は興さめてこりやどふぞ。今日は珍らしい三年ぶりの色遊びに。皺延しにこそ寄たれ。皺くらべにはこぬ。是なら宿へ歸つて婆と寢酒で樂しみましよと。盃さし捨にいなれける。宮川町の丹波屋で。三味線繼で本調子に合せつゝ。歌はづかしや人の恨のつもりきて。頼む物には竹の杖。泣つ笑ふつ物狂ひと。關寺小町を諷ひ出せば。客は智積院の出家達。ヨウ〳〵うたふ

てうたふて。長橋の局へ綸旨受にいたやうなとの悪口に。一人の和尚が是々老母そもじが諷ふは小町が年寄て物もらいになつた文句。こなたが彈と正眞の小町が出現したやうで氣がめいる。何ぞはんなりとした物をと望めば。宇治江少少むつとした顔。不粋な事をおつしやるお方々歌によそへて年寄をお嫌ひなされますれど。たとへ深山の朽木でも花さく春もござんした。わたしも盛りは過ましたれど。心の花がかはらねばこそ。かふしたはでな勤めを致してをります。墨に染てもお心に色香があるゆゑの米交はりなされますのではないかへと打こまれて。二人の僧起なほりて。それ地水火風空の五ツは人の體。心は變はらぬといやれども像も聲も變るからは。若いよね衆と一口に現世利益はあるまいと。疊叩いて詰かくれば。いへ〳〵それは猶不粋。すでに業平さんは。百歳に一とせたらぬとよみて。枕をかはさんしたを世の戀しりとはいふではないかへ。顔の美しいも外面如菩薩の戒めあれば。耆けたとて若いとて戀に滿ればゝ戀衣。一念發起菩提心。色も心。無常も心。いくつに成ても藝子はげい子てござんすといひまくられて。ぎつちりつまり。さあ其菩提心があるならば其年で藝子はせぬ筈じや。はでな歌をうたふより念佛の一遍も申すが順緣といふ物じや。それも逆緣なりとうかむでござんせう。そんならこちらが斯した遊びも成佛得脱するやいかに。なる程あなた方の墨染も今宵の座敷の戀衣。女郎の手簡も佛の方便と聲あらゝかに罵れば。誠に名うてのすつぱの皮。背中の兀し藝子やと。僧は天窓を掻々。あのげい子迎が來たらいなしてたもと。いはるれば。宇治江は猶も腹たてゝ。

川竹の勤なりやこそあしからめ嬶なら何かくるしかるべき

とおこりちらして歸りける。扨此宇治江が卅四五の頃。庚申の夜。祇園町の一力で大寄の雜喉寢に。鬼若の辨藏といふ幇間にくどかれて。たつた一度で其種を孕み。産み落せしは王のやうな男の子。なぜに置てはこんなだと悔みながらに育てしが。生先ことに美しく。十一二より舞と二絃を仕込て。名は石河五郎市と付て宮川町の四匁花。よい子じやと評判よく。江戸の親方が百兩に飛付て談合すれば。一人子ながら又出世の種にもと十五の春より江戸へ下しけ

るに。堺町でも見事な繁昌。傍輩の子供を賣ひしけば。親方も近年の銀箱と。朝寢してゐる尻の方へ燈明あげて。南無高野大師遍照金剛とぞ拜みける。されば庚申の夜に宿る子はと下世話にいふにちがひなく。此五郎市とかく手癖がわるく。客の寢入るを考へて涕紙袋の中を探し。一歩小玉銀に限らず。目についた物をはづしければ。寢ごきか浦の客衆も度かさなれば氣が付て。朝歸りの臺所で亭主に囁やき。子供の事なればあながち慾でもあるまいけれど。かうした事ども。段々と肝の太らぬうち親方にいはしたらよからうと。内證いふて歸らるゝに。是はけしからぬわるい病ひ捨ておかれぬ品ぞと。手紙での付屆け彼處からも此處からも何がない。かゞないと一犬吼れば百軒の噂。親方大きに驚きて五郎市が留主のうち文庫をあけて穿鑿すれば。藥入香包小柄印籠煙草入れ。小玉銀四五十壹歩二十切蓋のならぬ程おしこんであれば。あきれ果てのこは異見に當座は聞たやうなれど。目のゆきやすい閨のうち。愛想も月の手長猿。尻からはげてくるなれば。迚もなほらぬ根性と見かぎり果て長のいとま。京の親へも聞えたれば内へもどるな。勘當ぞと。涙を墨にすりまぜて。憎し〳〵のひとつ書。廣ひお江戸に住所。あらしの夜半も雪の日も布子一單寒晒し。あはれいにしへは翠帳紅閨にいとしがられし尻の穴。心からとてすぼまりし。肩身もせばき浮世やと。棒藥より辛きめにあふも此身の錆刀。往來の人に袖引て兩國橋で若衆の惣嫁。牛若ならで馬若衆。今宵で丁ど千人の情もうすきはした錢。引とめられて挑灯の明りにちらと見た顔じや。たしか堺町の五郎市と立もどりしが。氣が付て。腰の巾着あるかと見れば南無三はや仕てやられた。

諸道聽耳世間猿　三之卷　終

諸道聽耳世間猿　四之巻

㊀　兄弟は氣のあはぬ他人の始

神州五畿七道に分れてより都鄙の文言に其土地そなはりて因幡鴉に伯耆猫。伊勢人のひがごといふと詠る歌あれば。山城の人は八十宇治つくともいへり。國々郡々にてちがふ筈は。一ツ竈の物喰てさへいひごとのたへぬならはせなれば。人の心同じからざるは其面のごとしといへるもさる事なり。中にも足曳の大和の國は文字にさへ大きに和らぐと書て。土あまく山肥て四神相擁の地なれば。皇都もあまたゝびこゝに遷し給ふ。人の心すなほにて假にも僞をかざらず。上を尊とみ下を憐み。行ものは道を讓り耕すものは勞を助けあひて。花の吉野紅葉の龍田。何に不足なき上國なり。むかし〳〵の京寧樂の町に鴉飼屋伊左衞門伊兵衞とて色も香もある墨商人。軒を並べて兄弟住けり。兄伊左衞門は幼少より世渡りの心がけよく。商賣がらとて握り墨の卑吝人。親の讓りとは三挺がけの身體にして。手代十人僕兒七人家内三十人餘の大賄ひ。諸國の出店へ下し荷の世話注文の懸引。目つらもあかぬ抓みどりの繁昌。若草山に櫻が咲うが木辻に夜芝居がはじまらうが。敷居一寸外へ出ず。春日樣は慈悲萬行の御誓願なれば商人の爲にならぬ神樣と御祭りにも參つた事はなかりけり。弟の伊兵衞は兄の氣質とは若干の違ひにて。生得の廉直より。迂作つかず追從嫌ひにて身持萬事に高情を好み。兄の吝嗇を憎みて常々中よからず。春は飛火野に若菜を摘くらし。夏は佐保川の螢狩り。洞の楓樹に小鹿の鳴音を添へて秋を感じ。寒き夜のあられ酒に冬籠りして世事にかゝはらず。今春太夫につきて扇の一手より芝能に羅綾の袖をひるがへし。連歌は京の花の本に入門して風流もつぱらに修行せられぬ。此男の癖にて何事を稽古しても最初から論がつき過て。無要の事に念を入れて。金銀を積でも。傳授といふ程の事さらへて

しまはねば氣が濟ず。古今の三島三木源氏物語に三箇の傳。勢語に七箇の大事と殘りなく傳へ得て。宗祇法師の鬚に香をとめられたは連歌を案じる便りになる事にや。もし左樣ならば私が髭も延して炷しめましやうかとの執心に。花の本も返答にさしつまり。いや〳〵あれは其やうな事ではござらぬ。宗祇は歌枕に飛廻られたゆゑ。旅籠屋の蒲團のむさいから蚤虱わかすまいための用心であつたげな。以前は髭に油をもつけられしかとわたり奉公の奴めきて風流ならずと。香をとめられたるよし。宗長が書る傳書に。さだかに其よしをしるしましたとにつこらしくいはるゝを。伊兵衞甚だ感心して。珍らしい祕說を承はつた。それでよめた事がござります。町家を往來いたして見ますれば。小間物油などを商ふ店に髭油と申看板をしるしましたは。宗長の書を出書にてつけました物と初めて心が付ました。わづか小間物を商ふ者すらかゝる風流をいたすものを。我等が只今までのおこたり恥かしう存まする。其傳書も御傳へなされ下されませ。まづ書の標題は何と申まする。宗匠ぬからずされば書の名目は志賀の湖と申が。白髭の神に思ひよられしと見えますと利口せられぬ。かく風流に苦しみて寢食を忘れ。三十に餘れど未だ女房の沙汰もなく暮さるゝを。ひとりの母御が心濟ず。兄伊左衞門に談合すれば。はてほつておかしやりませ。女房持てと勸めたとてあの奢りものが又高情ぱつて。町人百姓の娘は育が賤しい公家衆の御寮人かな貰ほふといひましよ。とてもつまらぬ身上子一人持たぬ昔とあきらめて。何事も御世話は御無用と壁灰つかず取あへねば。猶更に心落附ず。弟伊兵衞を呼つけて。其方もいつまでの獨寢ぞ人の家には眞柱がなうてはつまらぬもの。彼方此方から似合の緣もいふて來れど。是までとりしめて談合も仕やらぬはどうしたおもわくぞ。一日も早う呼び迎へて初孫を抱してたも。第一母への孝行と詞を盡していはるれど。伊兵衞中々聞入ず。母には風流を遊ばさぬゆゑ御合點がまゐらぬ。妻子に足を繫れては諸道共に成就いたしがたし。古の名ある人は皆家を捨て剃髮し歌枕修行せられました。既に佐藤則淸が西行法師の類あまたある事なれば。私も兼ては歌枕の行脚の望みでござります。人は一代名は末代虎は死て皮を止むと禽獸す

ら心なきにあらず。緣邊の事は御免下さるべしと。更に得心の色目もなければ。とかく是は手廻りに美しい女を遣はさば自然箸のかゝる事もやと。京奈良中を吟味して年恰好十七八のぼつとり者。竹取の翁が百目つけて貰ふたやうな器量よしを傍近くつかはせ。朝夕の給仕寢道具のあげおろしに。思ひつかるゝやうにせよといひ含めて置るれば。此女も氣に入たら本妻になることゝ髪かたちはもとより詞遣ひ立居まで。とやかくや姫の立ち振舞に色々と心をつくせど。伊兵衞は一心ふらん机にかゝり。兼好がつれ〴〵はよう書たれど。おのれは伊賀の成仲が娘をてゝくり。又師直が艶書の下書してやりしなどあるまじき不埒者。淸原の俊蔭は一人娘を方々から貰ひに來れと。天に任せて許さぬ潔白が氣に入たと。うつぼ物語に首打振てはお妾が鼻のさきで在宮の神子見るやうに舞々すれど。首筋が白いとも帶の結び下げが可愛らしいとも思はず。何がないひよるよすかにもと山吹の薄出端を吸でさし出し。笑顏つくりて今もしは朗らかな空に徒歩も遊ばさず御氣つまりなお慰み。御歌でも御詠じ遊ばすかと寄添ば。伊兵衞目の玉をひつくりかへして。其儘煮へ茶を女が面へざんぶりと打つけ。こいつなめ過たおれが歌よまふが氣がつまろうがうぬらが知つた事か。又しても目の先を百度參りする程舞つきをるさへあるに。手代共此女郎めぼいまくれと。抱て寢る所か。生爪はかして山の薯蕷ほりそうな勢ひにとつてつかう島もなく。お母老は明暮これを苦に病で程なく過ゆかれたれば。いよいよ兄弟中疎くなり物事ひだり衽になれば。內藏の箱傳授もいつの間に明売となりて。手代共が引負も。筆先で旦那へ稻をふせ鳥にして。よい顏で障とれば。いつしか鹽尻がつまらぬやうになりて。家屋敷も賣拂ひ帳切の席より伊勢が飛鳥川の歌を吟じて。般若坂の邊に小家をかりての侘住居。三分筵の相借家にはうつぼの俊蔭に似た人があらばこそ。業平の密夫がはやりて。押へたのつゝもたせのといひ事止まず。近所隣に物いふ事もうるさく。こゝにも一二月にて三條口へ宿替すれば。博奕の盆家ねたれ者。喧嘩の相人を切たのと騷がしさを聞たびに。人外の交はりするがかなしやと。其後そこにも住かねて。世人皆濁る我ひとり淸りと。水漲たれて小うさんにさまよふを。別家の手代が

聞付けて兄伊左衞門に段々の訴訟すれば憎い奴ながら一人の弟殊に母の末期まで苦にしられたる詞。かれ是を思ふて。月に百目の合力を遣はすべし。其方達うち寄てよきに支配してやるやうにと。ありがたき兄親の慈悲伊兵衞はいよいよ癇癖强く穢らはしや聞とむなや。心のむさき兄が養ひ。首陽の蕨は喰はしと。猿澤の池に耳を洗ひてどつちへやら行方知れず。別家の者ども驚きて方々と尋ぬれど。難波で聞けば伏見とやら。大津で問へば堺にと。行く先も〴〵付合ふ人が氣に入らず。最早浮世を捨て衣。ごつそり剃て靑同心。よし野の奥に取籠りて。

屎ふむやあまりに奥の山ざくら

とむかしを悔ての獨こと。猪小屋程な。觀音堂の住居にも。まだ根濟のせぬ事が氣にかゝり。とても沙門の身の上には。極樂世界八苦の地獄がある事かない事か。此傳授が濟したいと思へども。尋ぬる知識もなきなれば。御丈二尺の木佛に夢になりとも示現あれと。斷食にて責つければ。本尊もほうど困らせ給ひ。ある夜の曉に鳩の杖もつかず着のまゝにて枕に立せ給ひ。微妙の御聲高らかに。善哉々々。牛若丸汝に兵法の奥儀を傳へん。それ地獄遠きにあらず極樂はるかなり。急げ〴〵とあやぬけのせぬ御告にいとゞ迷ひの種とぞ成ける。

㊁ 評判は黑吉の役者付あひ

笙は鳳凰の聲。笛は龍のなく音じやとは誰が聞てのたとへこと。よしそれにしてから鶯松虫のしほらしみもなし。音樂は太平の調子。皷三絃は殺伐の音なりとある學者の片意地。それもへち物好にて誠太平の遊び事は三ケの津の芝居より外あるべからず。日月は燈。江海は油。風雷は皷板。天地人は一大の戲場。堯舜は旦。湯武は末。操莽は丑淨。古今來許多の脚色とは。大淸康熙帝の殿上の柱に書ておかれたげな。天地の大芝居で堯舜は坂田大和山が溫潤。湯王。武王は小佐川柴崎がいきごみで。曹操王莽の惡人方は藤川武左衞門でなければと。唐の帝の芝居好。我日の本は神風

や出雲のお國がぼんじやり仕出し。名古屋山三が立髪風。花の都の川風に袖打振し昔より。今に四條の櫓幕。眞葛が原に染あげし顔見世の春げしき。年々の上り役者。霜さきの冷たい銀を。誰は今年廿五貫目で南側へすんだけな。北側の江戸役者は七百兩じやと口にほうばる高給銀。嘘かと思へば見ては無理ではないぞ。唐織の尻からげにそれなりの泥仕あひ。女形は所作事とて鮫蒲團より見事な襟數。くるりと廻つて一ツ脱。飛あがつては一ツ脱。繻子も緞子も踏だんだく。三保の浦へ下りた天人さへ一尺二十匁裂の伊勢講の嚊着じや。戻してさへ下さるならば尻まくつて三べん舞ふと泣たではないか。それから見れば尤もな給銀なり。其尻から思ひ出した東寺邊の生れの男。眞桑瓜程ふとつて居れば。ある名は呼ずに瓜生と名付。ぞつこんの芝居好。夕顔の宿遠からぬ宮川町に小家を借てちよつこりと座敷一間。二階も奇麗にしつらふて所からの建仁寺垣に。海老藏が發句の紙表具。打出しての茶屋ではなく。芝居眞黒の天狗共が。二の替りの趣向を三十日前からの評判。がく屋見舞の泥龜のたき所女房おりさも加茂川の水に灰汗の拔けた粹の果。役者も爰へ入り込ねば評判をわるふしらるゝがいやさに打解て念比の分。餅つきよあたり振舞よと呼あひ。女夫喧嘩の挨拶節季の拂ひの工面までの談合相手。若い立役制外の女形は清水の朝參りの戻り。役場仕舞と飛で來て。おりさを伯母さまあしらひに涼みの間の色事を呑こんでもらい。瓜生がいふことをぢり〳〵として怖がり。酒代鍋燒の取替銘々二三十匁づつ損かけなぶして。江戸大坂へすつぽぬけ。いかに野郎とて尻くらへな仕うちぞかし。入込む客は京中のわるざれ息子。天窓から足の爪先まで當世につくりすまし。鳥又の鷲さへ寒がつて出ぬ朝の間から川東を飛めぐり。此玄界谷へ陷り込て。役者の名も小太の嘉七のと。番附にない名をいふてくろとがるの油。それ程役者が尊うもなけれど。有やうは我買女郎鬱子の間夫吟味。みづから犬に入ての心づかひ。思へばやるせのなき事なり。此若衆打寄て拂ひの銀高を見せ合。どこは遣いても瓜生が方ばかりはと。銘々高歩の死一倍。女郎の櫛の無理借。此節季は仕廻しが。又來る鬼日の談合も同じせりふをいひ出せば。中から一人たつてよう思ふて見や。瓜生も同じ茶屋

じやぞやとは。一山越た理窟詰。それから無論の先生家なり。明日は北側の二の替りが出る。宵から瓜生で飲明して直にいかふと。下京での黄金佛四ツ塚屋五郎右衞門に。付添ふ幇間は我物不入とて底なしの酒如來。どや〳〵と來迎あれば。おりさ立出で。是はどなたもようお出だ。よう此間扇九からお歸りによりなんだなあ。一鳳がつけに來まアした。さあ其晩はえら酩酊で駕に乘つたもおぼえなんだ。親仁はどこへじや。いえたつた今丁子屋から呼に來ていかれました。鯉長どんの給銀のあやじやそうにござります。もう歸られます。まあ奥へいきなされと灯を點してはや持出る盃は。あいも變らぬ富十郎が江戸土産。棒鱈のこゞりで飲かける所へ。瓜生戻りていや御出。今丁子屋の親仁めに一服盛てから直に樂屋へいて稽古見て來たが。何でも今度は請たわいな。今七めがよう仕をる。しかしあの場を前の音右衞門にして。喜代三がする所を春水あやめで。團藏が役を親柳山で見たら面白かろとは。素人の評判。くろとの幕のうちさしてかはりもないものなり。四ツ塚大盡芝居咄に現を拔かし。來春は此連中で江戸の二の替り。今團十郎見に下らふじやあろまいかとそゝらるれば。瓜生大きに悦びこりやきつと行たい。柏莚や助鷹屋にかた〳〵下る約束した。又道中はさす物じやない。あの街道ばかりは始めてなら慘い目にあはしをるぞと。馬鴛のこなし自慢に。いかさま瓜生は度々下つた咄なれば。道中案内に同道しやう。そりや有がたいの薄約束が。年改りて彌生の空。四ツ塚屋の東下り。連は不入と瓜生に定め。都をば霞とともに明六ツ立ち。瓜生が出立は一番の三度笠に大津脚半。濱松の草鞋がけ五十三次一トまたげの御七里仕たて。酢でさすやうにいひちらし。出るやいな山科のどうはれ茶屋で。此げんこ取の餅はなんほぞとはたき初め。桑名の渡してはごまの灰に。秋葉御夢想の藥を金一歩で賣付られ。富士見が原では鴛の内からいつも。日和がよいとこゝから富士が見えると咄かくれば。前肩舛ている男が。旦那は度々上下なされますかして。よう知てござりますといへば。跡方の親仁が冷ら笑ひ。よう知てござる筈じや。鴛の中で道中付讀でござらしやると。ひどい所を見付られて。氣はほり弓の矢矧の橋で。向ふから馬追て來るを。右へよけて待合す。

其方へ馬ほいつけて。やい上方の白瓜野郎め。馬のよけやうさへしらずに。此海道を大手ふつて通りをるか。胴腰馬にふみをらすぞよと惡口せられて。あの馬士めも酒くらふやら左勝手へ追をると。行先々を口先で。大井河は海道一の曠軍。こゝではなんでもやつてくりよと一杯引かけて頭ごなしにいて見れど。一目見ても遣物が。京のせゝなげてさへ水が出ると騷ぐに。およそ一里の川幅に氣を呑れて。強いことといふて居る口のうちには。南無住吉大海神樣。天神樣金毘羅樣と臆病の神おろし。そこへつけこむ河童共。尻の穴まですひとられ。七十川を一人に十人前づゝ。まだしも不入は浪人ゆゑ。挨拶やらひら詫で無難に川は越えぬ。行々て駿河の國富士の山にいたりぬれば。皆々始めての見物に肝を潰し。如何樣比叡の山をはたちばかり重ねしとはよう書たぞ。聞しよりも見事な山の姿。瓜生なんと此山の裾を二三日も通る事かと問るれば。いえ〳〵此樣に見ゆれど。海道の間は富士三里とて。わづか百五十丁程でござりますと取てもつかぬ間に合せ。箱根の關は手判がなふては京へ戻ると道中双六で覺えた學文。五十三次はたきちらしておどろき虫の俄病ひ。是はと皆の介抱に京までの通し駕。肥太つた二十四貫目。宮川町のあがり口まで三枚で金七兩二歩三百文と。足元見られてもしやう事なし。瓜生の連に茄子はならぬとは此時よりのたとへとぞ聞し。

㊂ 公界はすでに三年の喪服

晉の王義之が師匠は衞夫人といふ女寺屋。此國にては上東門院の上臈達。源氏枕草紙榮花物語の作者。近くは小野のおつうが筆力どれも〳〵賢過た言がら。少々の男は尻に敷そふな嗔達。當世は傾城とても心たらはぬ方が繁昌する事は。無理いふても腹立ても言わけひとつ口說の切もり。出來ぬおぼこが覆さす涙一雫が四匁花。一粒金丹より高直な物なれど。利目のよき事又とない惚藥。亡八の親方も今にては抱の太夫に茗荷の子を喰はせけるよし。京大坂の茶屋風呂屋が布袋の土人形をまつるのも。愛敬第一にうだしうなるを顧ふゆゑとなり。世は移りかはる難波江の古言。

よしあしとはよね衆の位の事となり。新町の三筋に三ツの浦の面影殘りて。磯臭き昔とは替德な留壽楠の薫り。兎が笑へば柳があゆむ。中に茨木屋の唐土太夫とてつき出しの美人草。親はもと長崎の生れ司馬忠庵といふ儒醫。不仕合より大坂へ引越ておらんだ流の外科を仕かけしに。幾程もなく過ゆきければ。內儀は馴染なき土地にてすべきやうなく。ひとり娘のおらんといふを三年切て二十兩に公界に沈め。我は女の按摩とりに心靜に世を過しける。此おらん幼きより爺親の勤學を朝夕に聞なれ。女子には珍らしい博學。手跡も明人の筆意を得て。文徵明董其昌が骨肉を書き。名も唐土と付て全盛はすれど。いまだ親の喪中とて衣裳の物ずきも一トきはねむりめにて。上着は鼠縮緬に五岳の眞形の五ツ所紋。黃緞子に印譜の繡帶。襲は淺黃繻子に蘭亭の盃流しを肩裾のすり箔。水櫛の梳鬢は片々たる行雲に似て桂のひき眉は纖々たり。我つかふ禿の髮も鬘づらを結せて名も峨眉少女と呼び。揚屋の花車をお幸夫人と稱し。初對面の客には座敷へ出て。立ながら手を拱て中華の禮をなしけるゆゑ。客はすかさず合掌するを。もうし〳〵それは天竺の禮でござります。あなた方はやはり日本の禮を遊ばしますがようござりますといひければ。客はうろたへてモノモウといはれけるもをかし。馴染重ねて逢ふ客におまへのお字は何と申ますと問かけられ。字といふ事は知らぬが替名は歌夕といひますといふに。それは文盲なお名。歌は柯也とて枝葉に風の吹を歌ふと訓じてよみます文字。又夕は月の字の半にて月の初めに出る時は暮に西に見ゆるゆゑ。夕を半月と申ます。字義ではいつかうつゞかぬ文字でござりますと貶されて。然らば前の替名は鬼笑といふたがそれに仕ろふといふを。いえ〳〵鬼は山川の神靈なれば何をかわらひ給はん。いつかう熟字いたしませぬ。お前は生質御丈夫なれば叔雄と御付遊ばせ。兄御のあるには叔の字を御付なさるゝが字例でござります。韻鏡があらば序にかへしてあげますにと。眞言寺へいたやうなかたつまる睦言に。客は氣をつまらして。能名か知らぬが醫者殿のやうなとむづかしがりて。それぎりに尋ねもせず。機嫌のそこねた客の方へ血文誓紙は愚痴のいたりと。唐紙の二ツ切一行に。妾心正斷絕君懷那得知と筆意を振ふて書

くだし。吉野折敷ほどな印紙押ておくれば。客は何の事やらよめぬながらの負惜み。斯いふ事なら、其筈じやと機嫌なほして來るもあり。たま〳〵小學文のある客はあたまからなじるつもりで。太夫殿は日本の俗物はお嫌ひなさるゝに。やはり揚屋入は八文字じやが。あれは俗にござらぬかと打込めば。あなた方は書生さん方と見請ましたが書法に疎いおつしやりかた。わたしが道中は八文字を踏返して十六點に歩みますと答へぬ。此勤め方ゆゑ終にかあいひといふ男もなく玉照君が胡國の悲しみ。面白からぬ奉公と明暮思ひ暮しける。出入の香具商人住屋吉介といふ男。もとは京の御所近き中川沖之進といふ歌學者の一人息子。若氣のならひとて色道より親の不興をうけて大坂へ立退き。紅粉白粉の荷ひ賣。好の道とて廓へはまりこみ。化粧部屋のしやらくら商ひに。ふと唐土が高情になづみ。寢ても寤めても忘られず。折々はよそながら口說て見れど。文盲がつてとりあへねば。此儘戀に朽なんもほいなしと。心のたけを薄雪ふうのちらし文に。はづかしい事はかない事筆の命毛くど〳〵としたゝめて。誂への詩囊ぶくろへ入れてやりけるを。唐土ひらき見て口の文はよむに及ばずと。戀歌の上に下の句を付てぞ戻しける。

よし助が文に　もろこしが返事

枝たかきはなの木末も折れば折る
きんくるべいこのきうらい〳〵

唐音にて其心はよめず。次に二句詩を賦したり。

青苔匪衣岩猶寒　白雲似帶山不纏

叶ふやうにてかなはぬ返事。よし助は思ひに沈み。其詩を和して又いひやりける。

苔衣きたるいはほはかたくとも
きぬ〳〵山の帶は解なん

わりなくも戀侘て。今は玉の緒もたゆるばかりと聞えしかば。夫程までわしを思ふてかと心根がかあゆふなりて。

かへしは例のもろこし太夫。

與君相向轉相親　與君雙栖共一身

と唐詩の古語になつた口。夢現ともわきかねて。手の舞足の蹈み所を忘れ。それからこゝの逢瀨かしこの首尾。忍び忍びに契りしが。唐も倭もどこへやら。後は互の實と實いとし〳〵の外は文花もなく。傍輩の目口かはきに見咎められ。引舟遣り手が付廻しての强異見。おまへばかりはと氣を許したに。是はどうしたつまらぬ惡性。全盛出世を望む太夫さんが。香具屋に間夫があると廓中へ知れたら。お客もばた〳〵落ましやう此浮氣はやめたまへと責かけてのわりくどき。よし助も出入をとめられ。宵々ごとの逢坂も關守に見付られじと。忍ぶ程。なほ思ひはます鏡。見付た所が深い緣。どうで是なら添れぬ中。いづくの浦へも立退て一日なり共夫婦ぞと。廓を拔けて夜の雁しるべの方に假寢して。京の友達に頼りゆき。つまらぬ戀の欠落をかくまはれる氣。かくまふ氣。一月あまりは過せしが。こゝへも尋ねて來るとの噂。今は都の辰巳なる。黃檗山の門前に藁葺の一軒家。唐土が古郷の名によりて。長崎御菓子唐饅頭の燒賣して。貧しき暮しも川竹の浮節にかへての樂しみ。俳のかはらで年の積れかしと中のよいあまりの願ひごと。仙家の丹藥に不老不死の歡樂を究むべしと。妻が覺えし藥拵へ。近き桃山の流れこそ武陵の人の迷ひ道。桃源のしたゞりぞと。丹竈をひらいて服するに聾ほどもきかばこそ。夫は風の心地とてぶら〳〵と病ひつけば。月宮殿へも入る所がさしつまりての月がこひ。月に六日の勤めの中に。かあゆい男が出來たのか。男の介病に倦たのか。但しは丹藥が利いて仙人になりもしたか。八月十五日の夜。月の明かなるに家出して再び歸らず。

諸道聽耳世間猿　四之卷　終

諸道聽耳世間猿 五之巻

㊀ 昔は抹香烟たからぬ夜咄

天竺にては斑足太子の塚の神。大唐にては幽王の后。我朝にては鳥羽院の上臈と化したりしも。はては那須野の叢にかくれて殺生石となりけるとや。それには事かはりたれど人をとる事他念なき男。二條室町に店借したる川口や磯右衛門といふ町幇間。吳服所の歴々へ心安く立入て。年忘の執持茶湯の勝手を手傳ひ。酒間の落し咄に腹をよぢらす輕口。とり付引つけ迂作が上手とて川獺と異名をつけられぬ。世上は夏過て盂蘭盆もいつしか暮ゆけば。人も袷の肌にしつほりと。夜は次第に長くなりて。御靈祭りの囃子の稽古。月の夜すがら冷々と何處やらのらぬ拍子のあるも。秋風吹て白雲の飛助達さへ。今宵は氣も進まねばと。川東のしやかうもじやみて。其連中四五人磯右衛門が方へ仕かけて取〆もなき昔咄し。兵法喧嘩の仕形から狐狸の子供すかしを。かの川獺が口拍子に油を乘ての面白さに。毎夜毎夜磯右衛門が方に市をなして素咄しの夜半切。折ふしには吸物一ツ小半合酒。麪類のあばれ喰には。いか程奢ても端た錢の樂しみ。銘々涼みの仕過しを入合すつもり。氣のはらぬ遊びには内を出るにも權柄に。店仕廻ふなら挑灯持して迎ひにおこしやと家内へ響く程な聲して出らるゝ後ろ影。朱雀野の朝歸りに日がたけて内入りわるふこそ〳〵と。常着が火燵にかゝつてなふても冷たいなりに着替て。勘定場に吐息ついて居るとは勢ひの違ふものぞかし。かくして毎夜寄る程に若いも年寄も打込に。軍書の空覺えなる中老。碁將棊の强き隱居まで先から先の咄の中に。一夜もかゝさぬ新町の有德人。平野屋七左衛門とて年ばい六十過し吝親父。蠟燭の費を厭ひ暮きらぬうちから來て。去かげには人の挑灯と連立て歸らるゝ。煙草入濟紙も人のをあてに。集錢出しの夜食があれば大事の用を忘れたと逃て去れど。

振舞とさへいへば蛇の鮓でものがさず。是はよい所へ參りましたと上座にすわり。御亭主御勝手は存ぜぬが替ましやうかと。千枚張の頰の皮。憎まぬ者はなけれども。年に免じていひてもなく。銘々雪踏はき替られぬ用心のみなり。ある夜雨そぼふりて宵より風たち。誰もかれもいひ合せたやうに遊び人なく。やう〳〵衣の棚の袈裟屋墨五郎といふ男。七左衛門と只二人にて何となう打しめり。利に入た咄なかば墨五郎亭主磯右衛門に向ひ。先夜の趣向は又とない珍らしい事。どふぞ今一度見ることはなるまいかといへば。いえ〳〵あればかりは度々はなりませぬ。併珍事といふて又あのやうな錢のいらぬ面白い事はござりませぬと。二人が思ひ出しては珍らしがるを。七左衛門聞とがめ錢のいらぬ面白い事とは耳よりな。殊に又とない珍らしいとあれば。かた〳〵聞遁しにならぬ咄。どうぞ今一度の御催しに御加へ下されとめつたに羨しがれば。磯右衛門がいふはま一度見らるゝやうなら。是非あなたをと存てをりますれど。さきが武士の浪人衆ゆゑ。申たとて最早見らるゝ事は出來まいと存ますといへば。墨五郎がさあそうあらふと思ふて居る。ふと咄かけた事なれば申て聞ましやう。なれども他言は御無用。是の亭主の懇意に御出合申す。東國下野那須野邊の浪人。三浦介兵衛殿と申すが。先祖の祕傳とて狐を釣事が名人でござる事。ふと磯右衛門の咄で承り段々所望して見物いたし度よし磯右をもつて申遣はしたれば。見物とては中々叶はぬが。幸近日去貴人より賴まれて一疋釣てやらねばならぬ。其時餘所ながら見物に參れと仰こされたゆゑ。其夜亭主と二人右の浪人衆同道にて。嵯峨野の方へ參つて釣所を見ましたが。中々貞九郎藤九郎が釣狐の狂言見るやうな物ではない。正眞の伯藏主いなうやれの畜生足が人間とは又格別のとり廻し。罠にかゝるまでの面白さどふもはやいはれた物ではないと。身ぶり交りに咄さるゝを。七左衛門現をぬかし。それはけしからぬ珍らしい事。金の一歩やそこらは入れても見たい物でござる。どうぞ亭主の働きで見物さして下されと段々と賴まるゝに。磯右衛門あたまをかき。はてきつい御執心。然らばどうぞ今一度明日參つて賴んで見ま

しやうが。得心あればよふござりますがと。其夜は約束堅き石となつて犬追物の杖つき鳴し歸られぬ。扨二三日過て磯右衞門は七左衞門が方に來たり。此間の一儀段々賴みましてござりまするは何とも迷惑千萬な儀。是は手前が家の一大事の祕傳。今にもあれ玉藻の前が二度の勤にて御惱ならせられた時。安倍晴明が祈り除はめされうが生捕事は思ひもよらず。其時は拙者天晴の知行にいたすつもりで。かくの仕合ながら時節を待てまかりある。町人衆の慰みにはとち心外にござれど。段々の懇望と有ゆゑ明晩今一度釣てお目にかけ申さう。重ねてはきつとなりませぬと。きつい恩にきせられましたとしたり顏にて咄せば。七左衞門大きに悅びそれは段々の御働らき。左樣な重い事を雇ひ賃なしに見物いたすは全く其元のお影ゆゑ。然らばせめて小竹筒提重は此方から持せましやうと。人心がついてから又とない大氣な事いはるれど。心もとなく。金銀ではならぬ遊山なれは提重の御肴もちと御念入られませい。刻限は夜の八ツに御誘ひ申ましよと別れて宿に歸り。明る夜の丑みつ頃平野屋の門をほと〳〵と叩けば。內よりハイと答へて戸を明る。さあ七左衞門樣只今と三人連れ。浪人は朱鞘の大小に山岡頭巾釣罠持てひかゆれば。一人は袈裟屋墨五郎是は御苦勞樣と挨拶して。下男に用意の食物持せ跡につけば。二條通りを東へ川原の假橋を渡りて。聖護院の森を目あてに露霜を分けて。お辰稻荷の宮近き所に立どまり。いづれも是に居給へ。御兩人は先達て御案內の通り此方より呼申までござる事は御無用。祕傳を行ひますうち見えさつしやると向後の妨となりますと。堅く制して浪人は遠く隔てゝ罠をかけに行ぬ。跡に三人家來ともに。冬の夜の寒さに比叡下し烈しく只は居られず。先御酒一ツと野風呂の熱燗。提重取ちらして。さいつおさへつ待ど暮せど何の音もせねば。磯右衞門退屈して私窃かに見て參りましやうと。さし足して行しが。又是も戻らず。是は如何な事と二人も待兼てそろ〳〵と行かけしに。遙むかふの方にて何やら喧嘩の聲。そりや相圖じやと走りつまづきてかけ付れば。狐は釣らで浪人助兵衞刀の反を打て聲荒荒しく。扨は三人の者ども身が祕事にしてつゝしむ所を。磯右衞門が忍びて來りしはちんこの呪を見屆ん結構よな。

年かさの七左衞門とやらそれへ出よ。無體に望みて今宵の催しを致して此仕合せは。汝が所爲と相見ゆれば。遁すまじと詰かくるに。七左衞門大きに狼狽。なん〳〵の誓文。町人の儀なれば狐釣の傳授覺えて何にいたさん。とかく磯右衞門が早まりしゆゑと。こんくわいのたら〳〵いふて誤つた稻荷樣の三人體。浪人中々聞入ず。いや〳〵何事によらず利欲にふけるが町人のつね。身が祕傳も覺えたら銀もうけにもならんかと思ひ。某をたばかりしなり。弓矢八幡堪忍せぬとをどり上つて鳥井もこへんずいきほひを。ひらとも詫言してやう〳〵靜まりたれど。まだ眼ざしの恐ろしさに。小竹筒の酒もたべあらしたれば。墨五郎殿どこぞ貴樣方のこんいな料理やがあらば。あなたを御供したい引あはせて下されと。日頃の吝さも刀に怖れて折入て賴めば。兩人畏まつて暫し連立て祇園町の一力へなりこみ。夜の明ぬうちからの酒盛。浪人も打寬ぎて夜寒をはらふ鷄卵酒に。鍋燒よと社人のいなり喰。どうもかやうな形で晝中に宿元へも歸られず。七左殿とても御馳走に芝居を仰付られいと聲かけられて。それは御用捨といはゞ又おこりかねぬいぶり者と。いかやうにもとしぶ〳〵に藁所へいひ付て棧敷をとらせ。始まるといな。皆々見物すれば。世には似た事もある物にて。蘆屋道滿の狂言葛の葉の道行。畜生足にこり果て京より歸る與勘平のやうに小首かたげ。惡右衞門か家來の坊主にしらるゝに氣が付て。あたまを撫で見られぬもをかし。田鼠化して鶉となる。川獺て狐がつれるとはいまだ月令に見あたらず。

㊀ 祈禱はなでこむ天狗の羽箒

京の鞍馬山の僧正が谷には繞りの石悉く刀の痕あり。源の牛若が狗賓に出合て劍術をならひ得し所なりといふ。また唐土の馬鞍山といへる山の石は。試劍石とて滿山劍をあてし痕のこゝに等し。山の名も同じ文字にて同し奇石のやまと唐土にはあれど。牛若といふ唐人の若衆が有事を聞かず。しかれば鞍馬の古跡はうその皮。怪力亂神は

語らずとあれど。是も其人の紀念と思ふにぞ猶なつかしき袖の移り香。故きを慕ふ心よりこそ。戀も無常も風流もある世なれは。所詮唐土の馬鞍山も奬噲張飛などが。醉狂ひせし名所ともいふて置べし。花やこよひのあるじなるましとよみし忠度の墳は。兵庫の西須磨の濱邊駒が林の村中にあり。其片邊りに高村宮内といふ老醫。少々は讀もすれどとかく匕子が廻らぬと。近在の療治もかれ〳〵に。いつ見ても空色加賀の長羽織に。佩ふるしたる柄糸のあかづきかけて鹽はふめども。つとめ甲斐なき親方を。小平六といふ十八九の剃下。小力もある脾腑ざかり。味噌にも鹽にもつかはれて又珍らしい忠義者。何聞はつゝて覺えたやら。二君には仕へじと。いづくまでもの尻からげ。今日は二月の初午なれば摩耶參りと心ざし。主從二騎に錢二ぎ。是であらふかしら渡の和田の笠松打かぶり。花隈の城跡より生田の森を横ぎりて。いさご山にのほれば。まだ消え殘る峯々の雪より落て布引ぞと。瀧にしばらく佇立みて感にたへても酒はなく。雲内村より摩耶の裏坂をと木の根。岩稜すぢりもぢりて漸く半腹にのぼるとき。どこからやらひよつこりと旅僧一人出來りて。其方は宮内なるか。よき所にてぞ逢たり。此方へ來れといふかと思へば。忽ち干鰯くさき風起りて一山の草木を吹飛し。宮内を引たて虛空にあかれば。小平六大きに驚き。あれよ〳〵と叫ぶといへども。ついてゆく羽も持合さず。詮方つきてすご〳〵と宿へ歸り。近き隣へもありし次第を咄しけるに。天狗の所爲は是非なし又歸らるゝ事もやと。それなりに一月あまり暮にけるに。或夕暮の人顔もたそかれ時に。表の戸を盤石をもて投付るかとばかり凄まじき音のしけるに。小平六あわてゝ駈出て見れば。主人の宮内髮もかたちも茫々然として。右の手に獨鈷鈴を持ち。左に引むしれる鳥箒を持て。うつとりと立て居るを見るより。やれ旦那が歸られましたとあたり隣へわめきちらせば。宮内樣が戻らしやつたかとそこらあたりが寄て來て。先づ内へ入ましやれと手ンづもんづに抱かゝへて。御無事で怪我もなしにおめでたやと悅べど。宮内つや〳〵物もいはず。倦つかれた體なれば。先づ寢さしましたがよからふと蒲團打きせ介抱するに。それなりに打ふりかいふり。二三日は起ざりしが。四日めの朝やう〳〵人心

地付て。小平六に此程の物語り。彼僧に誘はれて諸國の靈地到らぬ所なくかけめぐり。九州にあるかと思へば奥州に遊び。北國を行かと思へば四國に渡り。あるひは樂しみあるひは怖しき事話るにつきず。彼僧のいへるは汝が長直なるゆゑに。一ツの法を授く。今此獨鈷と鳥の羽をもつて敎る所の呪文をとなふべし。人間の吉凶外傷不幸の病を治せんに必らず其驗あるべし。急ぎ家に歸りて人を救ふ善根をなし。其身も信心多事なかれと。敎へ給ふと思へば。其跡は夢のごとくにてかつて覺えず。我今日より神の敎へに從がひ。祈加持して衆生を救はんと。俄に家内を淸めて檀をもうけ。朝夕の鈴の音喧しく聞えければ。やれ駒が林の醫者殿が天狗につかまれて戻ってから。見通しの八卦を占やるげな。なんといな病ひでも愈しやるげなと。近在より日々に人をうつしける。宮内はそれ〴〵の加持人を呼出して祈禱をなし。彼鳥の羽にて頭より鼻を撫おろす事三遍にして。其人の氣質病根をさす事神のごとし。前な親仁は家業は檜物やなるべし。僞り飾りなき生れ付なれども。是までに我知らず愛宕の杉を切くだきし事あるがゆゑ。此度の病ひ杉の木の如く立煩ひをめさるゝなり。それがしが加持にて平愈は疑ひなし。次なるは船乘の女房と見ゆる。其方が夫先手難風にあひし時。金毘羅へ願立して。杉苗百本奉納せんといふて。今に奉らざる咎にての病氣なり。杉苗が大義なら杉の神箸でも百膳奉納せらるべし。跡に居る四十ばかりの男は冠付前句付の淸書屋よな。汝に神の咎あり。今世上にめくら付の前句なんどを天狗俳諧と名付てもてはやす。是筋なき事に我名を呼とて兼て怒り給ふ。向後天狗の二字を除て鳶俳諧となりと申すべし。此御詫に生酒五升持參せらるべし。是を捧げて天狗酒盛を勸め。よろしく罪をなだめ進すべし。いづれも加持人は燈明代として銀五匁づつおいてかへられよ。是は手前の德分ではない。天狗賴母子と申てすぐにあなたへ捧げるのでござると。未前過去の事ども皮肉に入しごとく占ふに。皆々恐れみ謹みて。扨も〳〵不思議な有難い事でござります。一ツ御尋ね申たい事はあなたの持てござるは炙やにあるやうな鳥箒。天狗樣に御貰ひなされましたら羽團でありそうな物。鳥箒もあなた方は御持なされます事でございますかと問へば。

宮内うなづき尤の不審。是は天狗の羽箒とてずんどかるい末の衆の持せらるゝ物。羽團はたしないゆゑ。是を貰うて來ましたとかたられぬ。ある時宮内いつ〳〵の夜は各信心深き人々をえりて。我家より讃岐の象頭山へ。暫時が内に海上を越えて參詣さすべし。しかしあまたの人は神も御苦勞なれば打よられしうち一人神前にて御闔をとり。神の御心にあがりし人を參詣さすべしと聞より。是は奇妙な事ども。どふぞ御闔にあたりたいと。頭に血の多き若者ども。それを見よとて老たる人々。其夜は暮ぬうちから宮内が方へつめかけける。さて宮内はいつ〳〵よりも壇に十二の御燈をてらし。數の供物疊々とかざり立て。先づ祕文を唱へ鈴をふり立て。既に御闔を取りけるにあたりし人は兵庫騎馬の町越中屋善次郎とてちと甘口な男なれば。もとより殼の智惠袋ふるひ〳〵出けるを。宮内手紙とりて緣の障子の外へ出して又壇に返りて祈りけるに不思議や十二の燈明一陣の風にばた〳〵と消て。障子雨戸ぐはた〳〵とすさまじく鳴響けば。皆々あつとたまきれて暮らがりに手を取あひ活た心地はなかりし。扨善次郎は障子の外に恐れながら立て居るを。灯の消たを相圖に誰とも知れず。善次郎を背に負て闇路を飛が如くに走り行。是正しく天狗殿と目を閉て心中に。南無金毘羅大權現と息をも繼ず申うちに。虚空へは飛あがらで西代村の蓮池のあたり。深田の所へ下しけるに。是は如何にと目を明て見れば天狗ではなく藥箱持の小平六なり。こりやどうじやといふ所を物もいはさず。力に任せて善次郎を深田の中へ突倒し。あがる所をふんごみ引ずり揚てたゝきこみ。目鼻の分ちなく握り拳にてはり廻しければ。やれ人殺しなるぞ助けよと大聲に泣わめけど。人家は遠し殊に深夜なれば。誰かけ付る人もなし。小平六聲をひそめて。今宵魔神こなたを象頭山へ暫時の間に參詣させ給ふ。其間は天狗道の熱鐵の苦を受る事。中々なみ大抵の苦しみならず。それゆゑ魔神來り給ふまであらこなしをしておますのぞといへば。善次郎かた息になり是が荒ごなしなら其時はさぞ苦しい事であらふ。最早息が切れるやうなれば。どふぞ此金毘羅參りは止に仕たい斷りをいふて下されと泣き詫るを。いや〳〵それでは講中へ主人の約束が違ふて一分立ず。それともに苦しくば是より歸つ

て人々には金毘羅山を拜み來りしと。よい加減に間に合すなら御詫申てくれん。それも後日に親兄弟に限り其方の口よりか樣々と語りなば。其詞の終らぬ内魔神來りて引裂給ふべし。いかにやいかにやといひつゝ頭をはりまはせば。何々の誓文人にいふ事にはあらずと段々の口がためにより。よろめきながら立あがれば又背中に負て走う歸る。内には又燈明かくやくとして祈の聲の澄渡る座敷先を。手ごろの石をとつて軒口へ打付る響に。すはやと參詣立騒ぐ所に緣の障子を明て善次郎髪も着物も泥まふれにて。よろ〳〵と立歸り。只今讃岐から戻りました。扨も〳〵有がた痛い事でござりました。どなたも參詣なされ度ば。やはり舟をかり切て御參りなされませといふを。小平六が臺所より握り拳を見せる顔が天狗よりも怖ろしく。人にはもとより寢言にもいはじとぞ心に誓ひける。誰見て居たやら此樣子を翌日より一まいに取沙汰あれば。憎い光棍めと近在の荒者どもいひ合せて暴れ込み。壇もしめも鳥箒も引むしつて捨て。宮内主從を棒ずくめにて追立ければ。所の住居もならぬしだら。ほう〳〵の體にて大坂へ立退き。齒藥の居あひ拔。あの奴めが討手まゐると主從息勢はつての思ひいれ。摩耶の天狗でしくじつたゆゑ。今まや藥と出かけるも。より所なきにしもあらず。

㊂ 浮氣は一花嵯峨野の片折戸

桑名屋の德藏といふ船頭大年の夜に舟を走らせしに。いづくの沖にてかありけん。凄まじき雪出でて浪風あらく吹しかば。船中大きに便りを失ひしを。德藏舟櫓にあがり心を用ひて下知しけるに。空中より怪しき聲していかにや德藏。今宵はいつの夜なるぞと尋ぬれば。德藏少しも恐れず年の夜にて候と答ふ。妖神又。汝世に恐るゝ物ありやなしやと問ふ。德藏重ねて世には身過ばかり恐ろしき物はなく候と申せしかば。再び聲なくして風波靜まり船も思ふ方へ走りけるとなん。行餘力ある時は文を學ぶとやら。米櫃の底さへ見ゆる山の井のともよみてをかしからず。と

かく身過が大切と拵いで見れど。諸商賣ともに先達の巧者ありて。あまい滴の垂らぬ世の中。親の代から仕にせの家業あはづの森のせいらでも知らぬ事はしゆらい倒れ。かへぬが理詰といふ事はよう知てゐながら。たゞとるやうな口事。乘がふぞるか借錢の淵およぎつかれぬ人多し。見一無體さつきやくでは。設けられぬ錢銀とは後にぞ思ひ合すなり。昔しより世を捨る身の置所とて都に近き嵯峨野の末。嵐山は名ばかりにて曉の夢も破らず。名社の瀧の音もせて。丸裸にて喰ずに居よなら。此上もなき隱れ里なれど。此處にも季日の滅鬼滅鬼があればこそ。はや瀨の鰷を追あるき腰だけ濡ても口一つ。ふさぎ兼たる膝がしらで堀やしつらん硯石の。窪い所へ水も溜らぬ店商ひ。とごへ廻つてもたゞ居てはつまらぬに究りぬ。筏士よまてこゝはんとよみし大堰川。渡月橋のわたりは嵯峨第一の風景。こんな所に能女房持て暮したらと。思ふは誰しも姉が小路の銀屎息子。大黒屋富太郎。島原の菜種の匂ひ伽羅の油が鼻の先へしみ付て。親の異見手代の忠言いふほど募る居びたれ遊び。弟もあるなればいつそまくり出して仕まふに一家衆の談合極まりて。母御の歎き。御機嫌のなほるまでは是にて何なりともして辛抱せよと。百兩餘りの枕金。袖の下から遣らるれば。勘當の富太郎此金に力を得。いつそ思案が固まりて。是で太夫が苦界を引せ。手煎じ仕たら兼々の望みの通りと。其足で島原へ駈出して桔梗屋の花野太夫。半季に足らぬ末年を。借金ごみ五十兩。賴母しづくでもらひしが女房は出來ても家がなく。脇ひら見ずに嵯峨の奥。妓王寺の邊りを借りて面白づくしの宿這入。殘る金ではそなたもわしも紙子仕立。藤色羽二重に媚茶繻子の火打。下には何を白絖の反古染。心一ぱい物好して。富太郎は名を瀧口と改め。花野が名もお笛とかへて。平家座頭に謠はれたさの風流。こゝまでは仕ならべしが。殘る金は廿兩あまり。是喰ふて仕廻ふはちつとの間と世渡りの心つき。何にても卑しからぬ手ずさみをと。いろ〳〵と工夫して。富太郎は嵯峨野の茶杓を削り。お笛には花の露をとる事を敎へて浮氣がさする夫婦の身過。入口の柴折戸に千家御茶杓四季花の露と。世尊寺樣の看板も京からまでは買にくさず。花の露の香も褪めて。茶杓はいつしか朝儘の焚つけに打くべて。

始末といふ事せねばならぬといふ事氣がついても。ちびり暮しの明くれは。名にし嵯峨野の秋の暮。壁に鳴く蛬。怨に音づる棹鹿。廣澤の月も酒がなふてもをかしからず。桂の鯖鮎も十ヲ百文にはよわりて。今ぞ不自由が身にしみじみと鉦の聲は隣の庵の御坊。まだ近付にもならねば憂を忘るゝよすがにもと。烟管提て御宿にござりますか。私は近頃となりの庵を借て參りました京の者でござります。淋しう暮しますゆゑちと御咄に參りましたといひつゝ這入ば庵主は夕暮の看經。是は〳〵よふござりました。まそつとじや仕廻ますといふ人相六尺ばかりの大入道。唐犬額の跡もするどく殊勝げのなき物ごし。扨は名ある武士の果暗君を諫兼ての桑門と一ト入賴母しく。とやかうするうちに烟草盆提て立出て。よふこそござりましたまあ是へと竹緣につくも莚。四方山の咄がしみてもどこか一ツ侍めかぬ詞づかひの卑さ。一圓よめねば。なんと御坊樣には幼少よりの御出家と見えませぬが。定めて以前は一廉の御知行でも御取なされましたといふやうな御方と見受ましたと。問かくれば。いや〳〵愚僧は武士でござらぬ。隣合せで合後念比にいたすから隱し申さぬ。おらはもと東海道を働いた無間の鐘介といふて盗人の張本でござった。手下も五十人計り有ておそらくは大名でも剝兼ぬけちぶとい性根玉ゆゑ。指さす者もなかったに三年跡の師走の廿四日の夜。江戸の店の勘定しまふて上る手代と見え。百兩餘りの小判を首にかけて供一人。夜道かけての急ぎの道中。府中と鞠子の山中で出つくはし。供めは大げさにぶち放し。すぐに親方めもしまい付ふと切かける刀を。何の苦もなふ引たくり。おらを眞二つと切付をるを逃るひやうしに谷へ轉落。命は助ったかはりに此ごとく左の腕が叶はぬゆゑ。働きもやめしらになつての同心者。しかし今に働いてをつたら笠の臺がばれるであらふ。御手前も御夫婦さうなが。こゝも不用心な所じや程になん時でもどやかしやれ。片腕でもまだひとりや二人は朝飯仕事と。聞てゐるうちから癪の上る身の上咄し。さやうなら殊更殊勝に存ます。いや又盗も捨られた商賣ではないげにござりますと。剛々挨拶して内へ戻れと肌刀さいたやうな隣同士と。うそ氣味わるく。向ひの庵主は六十有餘の浪人。見かけから實體な恰好。盗人坊主より

は念比にして大事なひ人柄。ちと御見舞申ますといひつゝ通れば。浪人はいづくも同じ秋の夕飯を。ねつ〳〵と喰ふてゐらるゝにぞ。是は御時分でござりますにと氣の毒がるを。いや〳〵苦しうござらぬ御かけなされ。ちと上られぬか。しかし京中と違ふて喰ものは不自由にござる。ひとり住は御覽なされ。冷飯がすゑりましたゆゑ。木香丸を菜にいたすとにが〳〵しき顔付に興さめ。扨はこゝもつまりし困窮。しかし心にくき住なし。腰をれの一首もよむからの嵯峨住居。是は咄せる風雅人。座敷の壁にべた〳〵と何やら張つてあるは。歌の詠草懐紙でこそあらん。所からとて定家卿の小倉色紙を學びたるはさりとはしほらしき物好と。よく〳〵見れば歌ではなく。南圓堂の足代のくさらぬ仕用帳。木津川のあさくならぬつもり書。おそろしい事の有狀。是はいかにと驚くうち。浪人楊枝つかひながら。扨貴様にちと談じ申事がある。承はれば姉が小路の大黒屋福右衞門惣領の富太郎殿とやら。傾城狂ひの不埒ゆゑ此所の住居めさるゝよし。最早本家は舍弟の名前にて。親父は隱居の身分。詫言してから傾城つれていなれぬ首尾。代の替つたは幸ひ千兩ばかり合力申てつかはされい。其使は拙者辯舌で天晴仕おふせて進ぜう。なんと思案めされぬかと。初對面からわる性根の腰をし。成程御親切のお詞とくと思案仕りて又御世話にもと。うぢ〳〵とした返答を。はて氣の弱いお人。本家の身上で千兩はわづか。拙者にさへお任せなさるゝと。後々には身上半分は取ておます事じやと。鐚ひねくつてしらじひの尖さ。是はひよんな所へ來た。どふぞいにたい物じやがと。見合せて居る所へ。先生御在宿かとずつと這入は。黑紬の小豆色。繪師とも見ゆる山水な醫者。扨此間の一休の自畫賛は驪梅よふはまつたが。芭蕉の手紙が文がうま過るといきかねる。もそつと御氣を付られひ是は其割符と金一兩渡して跡のもくろみ。様子を聞程座にたまられず。ついとはづして逃歸り。こり果た嵯峨の奥。妓王妓女より擬筆士やら。追剝やら。しばしの住居もおそろしく。我落にきと人にかたるなと。家主に口どめしてひそかに京へ立歸り。親々の詫言がすみ。お笛もろとも故郷へは錦の小路の掛屋敷を貰ひ。綿服に仕替ての商ひ形氣。槌で打出すやうな金まうけして大黒屋富太

郎が長暖簾。五日の風のそよ〳〵と。十日の雨にしつぽりと。夫婦中よく富昌豐に住るぞ目でたけれ。

諸道聽耳世間猿　五之卷　大尾

絵入

赤烏帽子都氣質

赤烏帽子都氣質

序

人己を知らざる事を患へ己人を知らざる事を患へず。但我を立る故或は藝を好み其道に半達すれば夫而已にて大海を知らず。人を詰り身を高く凡て遊藝と名付る事かやうの人より出づ。何れ藝術の源上皆治國平天下に至らしめん業なり。衣服に紋あり。人に藝ありて損なき事を思ひ。亦童蒙の徒を防ぐたよりともならむかと此質を擧て五卷とするも僕が無藝の中に只管と好む醉中のくだならんか。

作者　永井堂　友

赤烏帽子都氣質　總目錄

卷之一

八幡宮の社内をまい〳〵するのが深い樂み。賣物見世と一時に仕舞て戻る奉燈の掛行燈

附り　小野小町も及ばぬほど自慢する雨乞の發句は一六に掛て見て身體のねぢ直し▲佛法の有難事を忘れぬ富貴な酒屋に歌念佛のこぐろ節

卷之二

上手ぶるを見込に引て見る番頭の袖にすがりし戀の上首尾よう拔た言葉の理屈

附り　庚申と一時めぐりあふた節分の豆で目出たい一首の狂歌▲我子を滅多に自慢する親父の心とは眞に違ふた子息の孝心は若い人のよい手本▲不孝な息子の腸をひつくりかへした女郎のいきさつ止めて止まらぬ親父の涙

卷之三

古風な淨瑠璃の咄に乘て來た拍子聞を勤める一人の娘

附り　大な聲を自慢する中老の昔咄は二階から下へ響のするせりふの一聲▲流石は人體のよう見える謠の藝能はやしを好む借家の弟子分▲よい年をしても見そこなふは藝にかたよる心からの度立

卷之四

大坂の町宅は難波橋筋目のよい在所の噂を聞て集る近所の朋友

附り　客を見懸て手に取る書物は青表紙の學文を見せる唐樣の柱掛▲生れ付た癇癪持の咄を聞て呑込む傅醫の手拇。段々匙の廻るほど信仰をする近所の評判▲金居臺の下ケ札に太ふ書付たよい衆の名前遠くから見ても讀みようで讀めぬ所のある手跡

卷之五

唐まで聞へたよい女房持た男の自慢顏が少しうるさい髮の生際

附り　一時に出る人魂が行當て兩方へ颯と別れた丑三の夢の樣なまこと▲二度とない若い時も時なり折も用意の蜜柑饅頭を拾ふて悅ぶ近年の大當り▲料理人の手の内は見事に止めし刀のきつさき柔にあしらふた三味線の早業

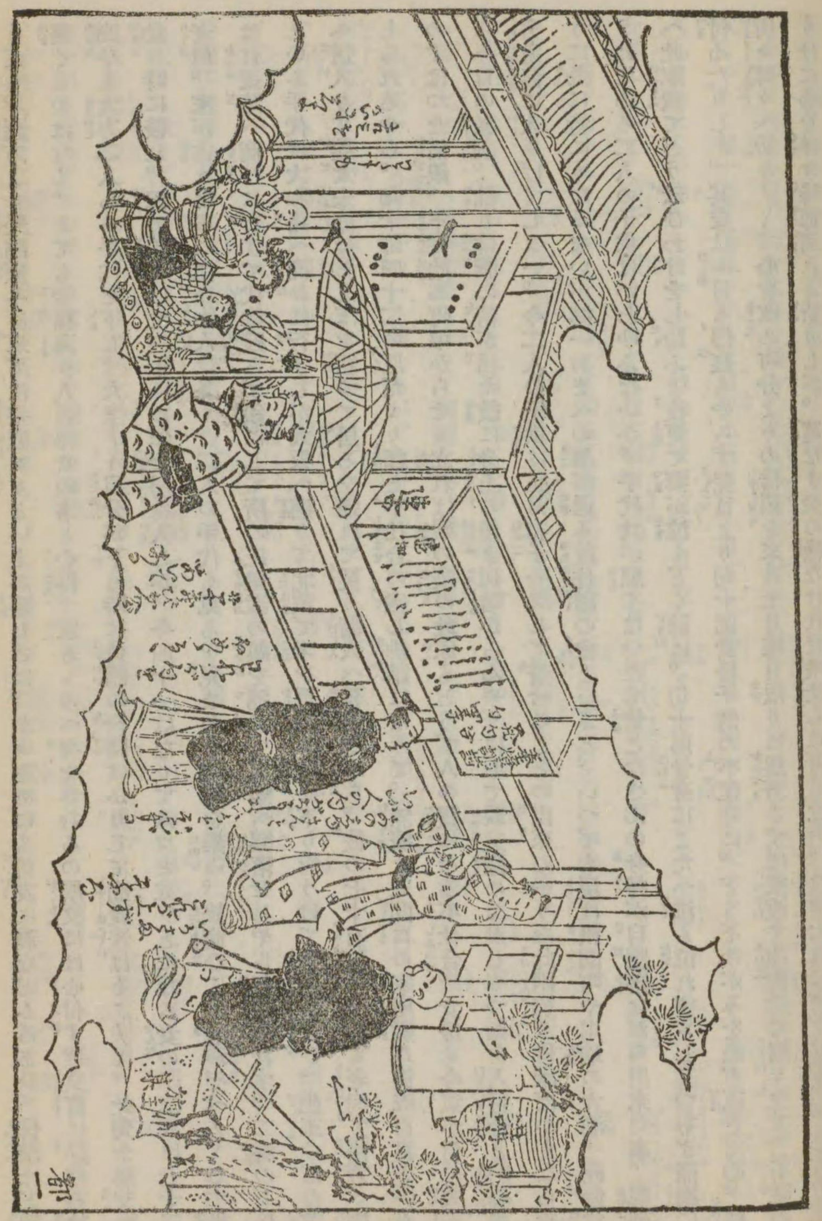
赤烏帽子都氣質　總目錄　終

赤烏帽子都氣質　卷之一

第一　八幡宮の社内をまい〳〵するのが深い樂み賣物見世と一時に仕舞て戻る奉燈の掛行燈

附り　小野小町も及ばぬほどに自慢する雨乞の發句は一六に掛て見て身代のねぢ直し

富ある時は好み習ふ所の遊藝氣を點じ鬱を散じて友だちの興あつく。若不仕合になるとも其藝能身を助くる事は名人の發句にも云ひ侍りしとかや。實に此道理に符節を合せたる物語あり。中京西洞院といふ所にて手廣く近在近國へ呉服物或は塗物道具等を商ふ新屋句十郎といふものありけるが。二十計の比より不圖俳諧に志し。上京で名高き宗匠の門人になりて手讃と俳名をつけ。所々宗匠家の月並會はどにも出席して百員歌仙の付合に卷引さげて戻る時は鬼の首取て來たやうな顔して悦び。朋友に見せて我と我手讃連中云ひ合て發句の相撲、或は御靈御所八幡藥師などの御縁日には奉燈の發句をあげ。自分の發句卷頭か軸などに出し時は日の暮を待かねて八幡藥師の縁日へ參り。人なみの參りのやうな體にて奉燈の發句を行燈の穴のあくほど詠め。參詣の人々が自分のした句をよみ上げ手讃と俳名など讃でくれる時は自節に嬉しさをひいやりとうけ。只發句行燈の邊へ賣物見世見てはまいもどり〳〵して樂むなどおかしかりき。さて一年々々豆數重なるほど好の道にこりが來て春興は勿論春夏秋冬雪月花の發句をはでなすり物にして物入構はずと知るほどの人に送り。點印を拵へて徐々樂點を押し。宗匠なりこそはせね我ほどな上手は京大坂にも希ならんと思ふから手讃といふ俳名を所々國々へ響かさんために江戸長崎までも春帳。集選みの發句に一封添へて



くだし。諸方より樂點頼みに來ては宗匠々々といふが嬉しさに。かりそめにも俳友に酒などふるまひ。俳諧ほど智を磨くものはなく。とても智惠薄き人の得せぬ事と心得。家とゝのへ身をさむるの學文には心付ず。文盲に好ける故旅商ひも大方二人ある手代を下し。たま〳〵自分が下る時は俳諧の行脚ばかりして商賣體はそこ〳〵。此句十郎父には幼き時に後れ。母の養育にて三十一の年女房を入しが。今四十一になりて八ツと五ツとになる女の子二人に七十三の老母。家が古うなるに從ひ物入は多く。二人の手代も見るを見まねと俳諧を樂み。旅商ひにも氣がぞべ〳〵して番頭は江近路へ商ひに行きて代物殘らず銀にして所の庄屋殿の娘を連れて何國へ騙落せしやら行方知れず。二番の七兵衛といふ手代は大和路へ商ひに行きしが大坂へ廻りて北濱で米を買置き急に下りをうけて代物を失ひ。生玉のぼた芝居へ這入りて義太夫節のちよぼを語つて居るを連れて戻り請人へ預けるやら。彼の七十有餘の老母も老病て西方へ旅立しられるやら。句十郎四十二の厄だゝり頓と不仕合の盡し俳諧になりて。無疵な五間口の家屋敷八貫五百目といふ印のすはつた借銀。年寄始め町中からせり立れば親の讓の此家もどうで人の寶になる不仕合。女房も今氣が付て夫へうらみ口の教訓。餘り俳諧に精が出た故に身上の傾き何暗からんやうにして親父樣のおかしやつたを人付合と明暮の參會遊參に入あげてしまい。今二人の子供に正月布子一ツして着せることの出來ぬやうな此困窮。俳諧ばかりなら此やうに急に皆にもなるまいが第一おまへの酒が過る故俳諧の會といふと。いつでも戻は祇園町や川端の大酒。此餘念なうねてゐる二人の子供はかわゆふないか。手代共が悪うなつたも皆こなさんの身持が自墮落ながら出來た事。親御達へ此家賣てどう云ひわけをし給ふと夜更て妻が泣くどく諫に。句十郎骨身にこたへ泣も泣れずさしうつむき蒲團に喰付ゐたりしが。其夜は一目も得寢もやらず翌日より句十郎女房子供の不便さに。どうぞゆがみをねぢ直さん心。願立所々神々へ祈り〳〵て心を改め町分よりの借銀を來る七月晦日限りに銀濟さずば家渡す相對にて斷り立て。不時のもうけに心を碎き時節到れと祈りしが。蔓なき金の緣なければ唯徒らに月日立ち。はや七月になりけるが。珍らしや其

年は入梅もからつゆにて虎の涙の雨さへ降らず。殊に六月の閏をこめて百日の大旱魃。水に盡せぬ都の町の井の水さへかつするくらひ。町々火事の用心に老若男女心を付け。朝夕雨を待ちけるが降るべき景色はなかりけり。偖て此旱魃につきて句十郎不圖思ひけるは最早百日といふ日でり。殊に日々所々の雨乞天のたすけお上の惠み。時節到來こゝ八九日によもや降らんといふことはあるまじ。此を目あてに銀まうけの工夫あると何思ひけん俄に旅裝束立派に整へ。女房にあらまし樣子を語り七月十八日に宿を立出て十九日に和州今井郡へ着きけるが。此郡は富貴なる百姓商人の多き所。句十郎も前々より商場にて知る人多く。所の庄屋へ行き云ひけるは。私此度當地へ下りましたも外の儀ではござりませぬが。此度の旱魃別して大和路は照嚴しく水渇して田畑日やけのよし。所を私一句の發句をのべて村の氏神へ奉納いたし。來る廿五日より三日の内に大雨を降し申さん事妙不思議の覺えあり。併し願の通りに雨降る時は京都へ歸り大社々々へ御膳御酒を捧げて御禮を申。或は御神樂をあげて諸人の參詣に餅などを撒とらせること。其外非人へ施行何かに大分金子のいる義なるが。此を私工夫いたせしは。若願成就して廿五日より三日が内に大雨降らば村中家並に一軒より銀子五分づゝ申うけて。それにて入用整へ御禮殘らず仕ますつもり。若し又千に一ツ雨降らずして祈きかぬ時は鳥目一錢も申うけず。罷下りししんどを利にして歸るつもり。先へ物を申うけずと雨降らしてから後で家並に申うける銀目五分づゝなんと思召す氣遣のない代物。村中へ只今御觸なされて下さりませぬかといへば。今井郡庄屋德介大きに悦び偖々親切によう下りてくれられし。今雨さへ降れば軒役に五分づゝは心安いこと。此照がまあ三十日續けば一向水も飲めぬ。急に村中へ觸流し仕やうといへば。句十郎は笑壺に入り發句にて雨を降らせしことは百年前も例しある義。是は江戸に昔し其角と申す名人の俳諧師が淺草の邊なる三圍の稻荷大明神へ一夜こもり。夕立や田も見めぐりの神なればと申す發句を奉納いたしたれば。忽ち天かきくもり大雨降りしこと疑ひなし。此時も後で御禮に大きに物入れて御膳を所々へ上ました。又小野小町の雨乞の歌は申さずとも御存知と辯に任せていへば。い

よいよ庄屋横手を打ち。夫より村中へ觸廻せば皆々庄屋方へ寄りての悦び。雨さへ降れば五分や一夊心安う出しますと。此庄屋より隣村へもいひ送り何れの村も承知して二日が内に二十ケ村ばかり願主出來し故句十郎が思ふほし人にいはず心に思ふは。わしがやうな發句で雨は降るものでなけれど百日餘りも照り續けばもう如何なりと降る時分。殊に所々雨乞もあり。なんでも三日の内が勝負ものじやと蛔捻るやうに思ひ。偖廿五日の朝所の氏神八幡宮の神前へ上下で上り。京の町へ鈴振て來る中臣の祓い聞覺えたほどを大音上て述べ。神前にて發句を大高の紙に認めしを見れば。雨祈る蛙は池の小町かなと不出來な發句認め。大聲上てよみければ。百姓たちは感心して如何さま池の小町とは尤な發句じやといふ内にそろ〳〵空が曇りしが百姓共顔見合せ。いよ〳〵不思議に思へば。句十郎米相場の移りに拍子の付た心。七月廿五日なる故八幡様の前で天神様を祈るやら。たわいもないもちやくちやなお經のやうなことをいふて四ツ時分までかゝつて居る内に。そろ〳〵雨がほろ付き出し。段々ながせ雨の仕出しになりて九ツ過より車軸を流す大雨。大和一國が聲上ての悦び。今井の庄屋は鼻高うして句十郎を神さまじや神さまじやと扇で仰いだり拜んだりして宿へ連れ歸り。偖て二十ケ村へ觸れ廻して伴の五分づゝを集めけるが。家數一萬千二百三軒に五分づゝ集銀が五貫六百一匁五分。又富貴な百姓は五分づゝの外に金子百疋銀五兩などの祝儀。小百姓も五分の外に十二銅などを添へ持來るものあり。都合錢も金も銀に直して拾七貫六百目といふかたい銀をもうけて七月廿九日に京へ上り。女房にも悦ばせ町借殘らず返濟して身上のゆがみを直し銀貳貫目ばかり入れて所々神々へお禮申すではないおわびを申し今は心も安堵して一世一代の句に

ぬれた手で粟つかみけり宵のあめ

此發句をしてより俳諧の附合を止め。手讃といふも取置てよい人物になり。近頃より行の餘力あると朱子の學文とやらを心がけらるゝよし實に珍らしき仕合なり。

第二　佛法の有難い事を忘れぬ富貴な酒屋に歌念佛のこぐろ節

附り　同町の一人と三年三月張合て石より堅い銘々の物好

現の禍を見て過古未來を知れと佛說文に敎化し給ふを聞し時は。今生にて禍多く貧賤なるものは。迚も後の世に生を受しとて樂しみのないことかなと捨扶持うつは大きな心得違ひ。其處でこそ精出して申ためる念佛三昧。十惡五逆の罪人も救ひとらんとお世話なさるゝ如來様の御意に入るやうに。唯六字の御名の仕込さへ强ければ。今生での惡念も薄く未來で樂しむこと疑ひなし。現世の惡きものさへ斯如くなれば今此世で仕合のよい人が心立直にして念佛に精出されたれば夫こそ未來はよき筈のこと。此うまみを此世から呑込んだ永樂屋長介といふ男下京にて隱れのない造酒屋の主人なりしが。親代々の念佛家にて其長介未だ三十五六なれど明暮念佛三昧に心を盡し。商賣用町儀の外は佛道の沙汰より他事なし。朱にまじはれば赤うなる。炭屋の男は黑うなるの道理にて此家内は女房子下男下女丁稚までがお念佛を申し。酒米蹈む歌も男共が工夫して歌念佛とこぐろ節のやうに謠へば主人の氣に入て折々褒美などととらさることあり。此やうに家内召使ふものまで歸服するは其一家の主の德ならんと自身我を讃め。念佛者の自慢氣になりて毎朝毎朝誓願寺への日參。珠數を袖の内へ入れてつまぐり歩行きても苦しかるまじき事を人の目に立つほど向へ突出し臂張てつまぐり。口に六字を唱へて道中を行く。若輩禮などに逢ふ時は川狩の好な人が魚の淵に跳るを見付たやうな顏して懇に回向し。鳥さしが雀でもさす時は人間も恥ず大聲立てしやぎり聲でお念佛を申。所々寺々の談義へ參ては近所隣へ行て說法の買出し咄し。好嫌ひの差別なしに他人に唯念佛を勸め。氏神の祭よりは十月の十四日五日を悦び。此世をしまうて未來へ行けば座敷でも建て待て居るやうに思ふて朝夕を暮し。知緣近付に往生人があると其儘かけつけて。こぢう相傳を受しありがたき物語をして死人にも是を授け。土砂とやらいふものを持行きて往生人の目鼻口耳などへ

入れ。是では佛がしやちこばらぬ。手足まで軟らかになるとて萬の事に氣を付。折々宿て眞讀念佛とやらを家内打よつてつとめ。此大會には木魚などあしらひて。いよ〳〵信心を催させるなど。さても若いには珍しい念佛の行者。少し自慢氣はあるといへども。どだいの尤もな心得おのづから殺生も出來ず。人に憐みもあれば。聊の失は誰ありていふものなく。極樂の長介殿と讃めぬものこそなかりけるが。凝に凝た念佛者故か此人の失は。惡じやれな念佛嫌ひなものを無理に佛道へ勸め入れんとしらるゝ故。金言耳に逆ふて折々は人と喧嘩しらるゝが癖。勸めかけて聞入れず少しても念佛を妨げいふものがあると氣狂のやうになつて腹を立て。又聞入れるものあれば我子よりも大切に思はるゝ生得の氣質は一かう頼もしかりき。さて此長介南すぢむかひに伊勢屋加茂兵衛とて勢州山田へ手代を下し御師方諸事入用の物を請込む商人ありけるが。家内妻子始廿人ばかり富貴なる暮し。此加茂兵衛は若輩なる時より神道を行ひ。神の國神のたねより生來て神の敎を知らぬ身ぞうきといふ去神主の和歌を日々心に忘れず。神書もよほど見て日しよきの神拜怠らず。朝夕中臣の祓をして神道口傳の拍手を打ち。清つぎを委しく吟味して。他人の火を喰合ふて來るものにも穢れたる火は廿日といもの茶烟草を飲まさず。一門の外他人は如何ほど懇意な方にても自身葬禮には行かず。名代にて萬事を仕廻ひ道中にて葬禮に行合ふと道より歸りてかかり湯をして出直すなど。扨もむづかしうきんじにきんじたる淸め行儀なる勤なりしが。同町にて富貴肩を並ぶる佛道者の永樂屋長介なれば。町儀の出合等にて度々神道者の加茂兵衛に付合ふ事なれば。神道に凝固りし加茂兵衛をいぢらしく氣の毒に思ひ。何とぞ此人を佛道へ勸め込み有難いお念佛を申されるやうに敎化したきものと。これを明暮大願に思ひ折々夜分見廻に事寄せ行きて。石のやうな神道者に佛道御法の沙汰をして。我が願ふ道へ誘引せんとしらるゝは誠に大佛殿を蟻がせゝるよりもまだるかりき。加茂兵衛は又是ほどの念佛好を神道へ勸め込むこそ神明への御奉公。日の本に住む務なると思ひ此方よりも折々長介宅へ行て神代の卷など講釋して神國の道理を述べ。聖人の誡め給ふ異端の虛無寂滅の敎を說て心を盡されけれ共。中々

馬の耳に風の吹くやうにも見へず。されど互に我好く道へ勸め込まんと思ふ故。出合て喧嘩はせねど心の内は双方敵味方のこん競べ。兩家の家内奉公人に至るまで張合になりて三年三月といふもの勸め合ひけるが。何れともかた付かず。一向近頃百日ばかりは神佛の競合止みけるが。誠に佛方便佛法不思議の世の中。或夜加茂兵衛上下着て長介かたへ來り。何日もより慇懃にして亭主に向ひ兩手をつかへいはれけるは。今晩改め貴公にお願ひ申すことあるは。我年來神道を行ひ佛道を詰りて邪見無慈に暮せしが。今四十五といふ年になりて合點ゆきしは舊來の朋友或ひは知緣近付などにも。老少不定の有爲轉變愛情離別を見ることか身根にこたへまして。急に佛道へ入りたうなりました。今夜より貴公のお弟子と思召して佛の御法の有難き事をお聞かせくだされと神妙に長介をたのみ。早口に六字の名號を唱へられければ。長介はすく〳〵立上りて悅び。加茂兵衛が背撫さすりて。扨も〳〵有難やでかされたよ。其心が付くといふも卽ち如來樣の御緣が深いの。此娑婆世界は卽ち火宅の床と佛の說示し給へば。未來を取外さぬやうが肝腎。其未來が祓ひ給へ淨め給へでは一向行きませぬこと。お念佛さへ申さるれば。外に拍手拍つの水浴るのといふやうなことも入らず。唯一心に南無阿彌陀佛々々々々々々南無阿彌陀佛々々々々々々と長介五臟より念佛搾り出し。偖夫より夜食酒など出して加茂兵衛を馳走し。其夜佛法沙汰にて夜をふかし。夜半過に加茂兵衛も退出しられけるが。二三日過ると朝の間に加茂兵衛長介方へ行き。貴公へ御無心に參たは御所持なされる土沙を少々所望致したしといはるれば。長介早合點して。扨はおしるべに往生人が出來て。此中お咄し申す通りに土砂を用ひてお世話なさるか。近頃まで神道に凝りし貴公が夫ほどまで佛道氣になり。拙者に土砂をくれよとは。はて神妙や有難い思召や。これと申も佛法の世の中故と笑を含み悅びれければ。加茂兵衛も亦嬉し氣に。土砂と申すものは死したるものゝ口目鼻へ入れる時は何ほどしやちばりかへりたる骨身も軟かになると承りましたが。いよ〳〵さやうで御座りますかなと問はるれば。長介うなづき。さうともさうとも。さだめて貴公もお近付がたが御一家衆の往生人にお用ひなさるお心であらう

なと押返し〳〵問はれけるが。加茂兵衞眞顏にて死したるものを軟かにいたすと聞きましたは幸ひ。私昨日見事な鰤を一疋買ひましたが。いかうしやちこばりて骨身のこわさうな魚故。目口腹へ其土砂を入置て料理いたし。水菜入てせんば煮にいたし。骨あらは酒の粕いりなどにして食る心で御座るといはれしが。長介は一向あきれて物をもいはず。神道者につまゝれし無念の怒りは念佛でも押へ難くぞ見えにける。加茂兵衞は氣强くも座を立さまに懷中より一首の狂歌を取出し。大黑柱に張付て宿へ走り歸りしが此狂歌を見れば

極樂は百味の食と聞きつれど出來合たべてこゝにをりたや

扨も此狂歌はこうそつな趣向じやと今に世上の噂なり。

赤烏帽子都氣質　卷之一　終

赤烏帽子都氣質　卷之二

第一　上手ぶるを見込に引て見る番頭の袖に縋りし戀の上首尾能拔けた言葉の理屈

附り　庚申と一時巡合ふた節分の豆で目出度二首の狂歌

口は是禍の門舌は是禍の根なりとは古の詞なるが。淸言淸事をいふ時は萬善の根ならんや。只朝夕愼むべきは一言にて事を壞らざらん聖人の敎を忘るゝ事なかれ。俗人の我とお寺樣の茶屋ぞめきとは扨も値の安い者じやと室町邊の吳服屋の店先で手代共が打寄ての判談。十人計取卷て居る煙草盆にあるいけ炭團の火より眞赤な猿の尻笑ひ。此吳服屋の番頭藤介といふ男も兎角諸事少々覺た遊蘭何かに我の强い氣質。主人へ帳面取引に少しも間違ひせぬ事を第一の自慢顏するさへ可笑は是奉公人の常なる事を。我ばかり直き樣に我はり聊の耳學文にて出入の職人方抔へ行ては今岡氏より買出した謠の講釋。近年狂歌を始めかけしが片意地に是を好み。他人の祝儀不祝儀共に只かりそめにも狂歌を讀て送り。朋友の出合にも酒事何かに狂歌して廣い京に我程な狂歌よみはよも有まじとの自慢顏を見込んで讚そやす者には田も畔も遣る樣な男。出入の張物屋が此穴を見付て藤介を狂歌の先生に賴み節季節季に張物代の先借を心よう聞て貰ふ計り。下の町へ見世出した魚屋の息子が狂歌の樂點を賴てよりお出入の魚屋になるやら。兎角藤介が好の道より付入て讚るとは知らず上手ぶるは藤介ばかりでもなく。總て俗人の間々ある習なりき。然し色欲の道にかく迄深くばおとましからん。既に番頭藤介より三番弟の宗介といふは生付色白に見るも利發そうなる美男なりしが。只色の道に心深く最早三十一の年に合點せずばと心得て見ても情ないは美男を戀したふ女多き故明暮色情の遣繰に暇なく

ぞ見へにける。然るに此呉服屋の主人は村田德右衞門とて江戸にも近年店を出したる富家なる故内室娘の侍女迄器量よき風俗やさかたなる女を召使ひ日々華美を盡して遊山芝居の噂のみに暮されけるが。過し九月より五年の年季きはめて奉公にすみし侍女のきぬといふ女。生得愛敬有て容儀尋常なる生れ。よしある武士の浪人の娘なりしが。父には後れ母の養育にて十六の年より此村田氏へ初めての奉公。嚴しき母の常々言聞かせし通り勤の内不奉公なきやう假にも男と小話も慎む事人の中言不義の取さた是れ女の謹大切に守るべしとの教訓を一日も忘れず。主人大事と勤めければ何怠らず家内の氣に入り。上紅白のお絹どのと異名取る程の首尾なりしが。彼宗介きぬが目見へに來りし日より早色情深く見そめこれ迄契りし女も多きがあのきぬ程の位高い風俗器量は見ず。何卒此戀こそ我が一身を込て首尾整へ二世迄も云かはして女房にせずは置くまじ。此願成就せば身一代外の女に目は付けまじと心に願立して九月の末つかたより文認めて懷中へ入れ日々の首尾を伺ひけれども。元來物がたき主人行儀正しき家風なる故臺所にて男女席を同じうする事なし。いつ文屆ける首尾合もなかりしに宗介色道に功者なる發明者いつの間にやら人しらずおきぬの手に文渡しけるが中々母の戒置きし通り返事に小學の古語を書入れての斷文。宗介はきぬが手跡の見事なと小文才ある樣子に猶いや勝る戀路の張合。俄に大和小學の書物集めて三間間半程ある文認め戀しき餘を書て書て書たくりしが。彼女も宗介が男のよいと利を柔かに書述し文通とに頓と打込み。母の教訓も打忘れて得心の返事。十月の中比に宿の法事を言立て二日主人に暇貰ふて宗介へ内通し出合の酒事に互に堅い夫婦の契約。かい是が序の糸口きぬが心も亂そめて我が方よりも折々は文にて事問ふやうになり。傍輩にも知らさず互に心を通せ奉公も大事に勤めけり。はや其の年も暮かゝり極月廿六日節分と庚申と一所の夜なりしが。富家の格式にぎはしく家内の上下祝儀をのべて年をとる。主人德右衞門始め内室娘殘らず格子の内より厄拂を聞きゐらるゝ内。おきぬ宗介裏へ出でくらがりにて互に手を取り耳語居ければ番頭の藤介は今宵抔は格別に火の廻念入るが心得事と手提燈さげて一人藏の隅へ行ける時。宗介と

侍女きぬとが手を取て小話するを出合がしらに見付けければ二人の者も是を見られてのけでん。ちと小意地の悪い番頭ゆゑ宗介二人に何とも云はず藏々の隅々を廻りけるが。直に云はぬ程猶胸苦しき二人の當惑。是ぞ大事の破口とおきぬはしくしく涙ぐみゐるを。宗介が一ツの工夫恐るゝきぬをも見やらず火の廻してゐる番頭の傍へよりてこはさうに袖を取り。迚も穩便に成され下されとは申されぬ拙者が不埒。詫たとて見脫されぬ番頭職の貴公。三十一文字の和歌にも並らぶ狂歌の上手と云はれし貴公も此二人が不義不埒はよし情を加へられても憐の狂歌などは迚も讀列らる事は出來ませぬ筈。若氣の至にて色に迷ひ狂歌に名高い貴公さへ口吟の御趣向を得なされぬやうな悪事を仕出すとはなんたる此身の因果ぞと。思へば我が身が五月蠅と泣聲小低うしやくりしが何思ひけん。番頭藤介懷中より矢卓取出し鼻紙にさら〳〵〳〵と書認めて宗介へ渡せば其儘推戴き披き見れば二首の狂歌。今宵の節分庚申と一時なるを賀してと前書ありて

年々につもれる戀は庚申見ざる開かざる人にいはざる
節分にどうてすたれる豆なれば拾ふ人とて誰がとがめん

かく二首の狂歌を宗介うれしげによみ上げければ。番頭藤助はよめぬ處をよんだ顏。エヘンと一ツ咳拂ひ高い鼻毛を宗介によまれて内へぞ入りにける。

第二　我子を滅多に自慢する親父の心とは眞に違ふた息子の孝心は若い人のよい手本

附り　不孝な息子の腸をひつくりかへした女郎のいきさつ。止めて止まらぬ親父の涙

子を見る事親に如かじとは古人の詞宜なる哉。人の親として子を育つるに敎なき時は、則親自己苦を求むるの道理なれば幼少より不敬なきを敎訓するこそ肝要なりき。經書の聖言は云ふに及ばず只幼少より虛言と物の負惜して我をたて我を是とせん事を戒め育てたきものなりしは。大坂せんばの立町筋に管笠柳行李木履下駄を手廣く商ひ近國へも仕入下し常見世賑々敷難波中の小店へも代物を卸して下駄屋といへどしつぽりと銀のばして內證ゆたかなる商人なりしが。夫婦共物事に我の强ひ氣質たゞ人に負る事の嫌にて萬に自慢氣な男なる故。近所町內でも餘り人の愛せぬ人物。商賣相應の家號も栴檀屋の喜左衞門とて無病な生付なれど近年强い疝氣が持病と成り。是さへ負惜な心から二年前迄無病なと自慢したに。お年の氣で弱りが來たものと人に云はるゝを無念がり一門より外他人には疝氣で引ゐるといふ事を嫌ひ。京へ買ものに登られしと云はせて二階に引籠りゐるやうな我もの。女房おかちは夫に星目の上强氣の勝た負をしみ。人にはいはねど此無病な親父の近頃疝氣病に成し病根といふは。今年廿三になるひとり息子の善六といふが世間に稀な惡性物にて。第一が兩親のいふ事を聞かず日々に不孝の惡戲が上り。人の女房近所の娘や下女をそなかし。遊所又は小宿などへ這入込て晝夜たんまり內にはゐず。氣隨のあり丈云て朝夕食するにも樣々の菜好み。たまたま內に寢ると朝は四ツ半迄の高鼾召使ひの若者丁稚下女迄かりそめの事も叱りこかして親に口明さぬ惡者。是が喜左衞門の屈托。此喜六生付て器量のよい奇麗なる息子故幼時より喜左衞門夫婦が我子の美童を自慢し。十五六より男になると猶々自慢氣やむ事なく。自身ほめいたはりける故人に惡性者といはれん事を無念がり。是程の野狼息子を世間の人に穩しゐる故の疝氣といふ持病。是ぞ眞に子故の闇といはんか。此喜左衞門むかひに島木綿を商ひ三尺手拭湯手拭頭巾風呂敷などをあしらひし見世を出しゐる吉兵衞といふ者ありけるが。是も夫婦共物事に負きらひの我な氣質なりしが。廿二になる吉三郎といふ息子。二親の氣性とは格別の違にて萬の事に我を立ず。器用なる生付に算筆も人に勝れ達者にて商の道にかしこく。人品柔和にて諸人愛敬あつて第一兩親へ孝行を盡す事は近頃名高い京西の

岡川島村の百姓にも劣らぬ息子なるゆゑ親吉兵衞夫婦息子の自慢して人々に孝心の話。器用なる物語を尾に鰭つけて海魚では鯛か川魚では鯉か人の息子ではこちの吉三郎かと文盲な譬事いふ吉兵衞が手ぼめ。むかひの下駄やと此木綿やとは負惜同士故年中火をする程な不和な中にて。下駄屋の息子が不孝不埒なる事を吉兵衞大に笑ひ近所町內でも噂してなんじけるが。喜左衞門は又むかひの息子が孝行なると商に精出す事を自慢する故近所の人のほめるを聞くたび每に負惜の立腹。我張な女房おかちも共に無念がりて何卒むかひの息子が惡性者になる呪はない事か。迚もこちの息子の野狼は直をらじと暮明是を工夫して暮せしが。猿の肝の黑燒と狼の糞とを極細末にして野良猫の小便にてねり。みぢんのやうな丸藥にして酒にて飲す時は何程たまかな息子でも俄に淫亂になつて癇癪いで短氣にして志惡心になるといふ妙藥を去方にて聞出し先此藥味を整へ丸藥をおかち手づから拵へけるが元來不和なるむかひの木綿や故。吉三郎に此藥用ゆる事出來ず。これに當惑してどうぞ飲せて惡性者にしたき事と思ひくらす折節。吉三郎少々鬱病にて引入ゐるよしを聞き。是幸とおかちが女心の愚痴なる工夫。近所に住ゐる俗頭の按摩けんびき現銀廿四文の家分を立し吹竹勇介といふ人の所へ夜分在宿を考へて行き。勇介へひそかにあふて賴みけるは御存じの通り私家とむかひの木綿屋とは前々より不和の中。喜左衞門互に町儀で出合はれますはほんの表向ばかり。其故私とても向の內儀とても往來は致しませぬが。さりとは向どうしにて見受ますに。しんびやうなるは息子の吉三郎。商事に精出して來るほどな人に愛しらひよく。あの頑固な親達へ日々の孝行。不和な私らでも見世先で顏見合すれば慇懃な默禮。親達は惡けれどさりとは向の息子殿は愛しう存じます。向も手前も追付嫁取て代を渡し。隱居致すは知れた事。其時は町儀でもほんの付合させ手前の息子にも親孝行をあやからせ。年よるまで友達にさせたふ存じます。私が喜左衞門殿へ隱しての下心。聞けば吉三郎殿此間は氣鬱の病氣が出ました由。たまかな人故若し長引勞咳の樣にでも成ましては私が願も成就せず。其故あなたをお賴み申は手前へも向へも御療治にお出なさるお前ゆゑのお御無心。私親里よ

り傳請けました一子相傳の妙藥氣うつ一通りは何ほど重き勞咳でも只一度のむと直り氣がいそ〳〵なります此丸藥。親里の妙方ゆゑまだ息子にも咄しませず。悴には嫁でも入れ代を渡してから傳へまする程の藥を此比製法いたしましたは。是を向の吉三郎殿へ飲せたう存じますが。不和の私なれば向へ參りたうても參られませず。又一通の所よりやりましては毒な物でも進ぜるかと親達が疑がはれますはしれた事。是をお前樣の御家傳にしてどふぞ吉三郎殿へのませて下さりませうなら忝く存じます。病氣がなほれば則お前のお手がらに成る事。藥代が參じましたらお前の方へお取なされ。私は可惜息子を病人にしとむなひ心計り又總て中直る時事によらば云立にも成りませう。いやもう向と向で中の悪いと申は氣の毒な物でござります。是と申も手前の喜左衞門殿が片意地なに。向の吉兵衞樣もかたもくろながら起りますこと。何からなれば子供の不便さから色々の事が出來ますと涙くみ。則是は此度のお世話にあづかりますお肴料と銀子一包差出して頼みけれは。少し欲氣のある勇介が早速のみ込み。さりとは御尤な思召付〻明日見廻ます時勸めて吉三殿にのませませう私の申事はよう聞かれますればお氣遣ひなされますなといふ故。おかち喜び勇介內儀へも懇ろに挨拶して勇み勇んで歸しはふできなりぬ。扨此勇介と云は辯舌よく人に取入る事の上手な愛のある男と見ゆれど。心の內はせじにすばしかきすつば。近所の息子や手代の遊里へ行く中宿にて文の取次色茶屋の拂銀を請取渡ししてやるなど親切にのら達の世話やきなる故。喜左衞門息子喜六も勇介方は寄合所。母親おかちのかへられし跡へ遊里より戻掛けて立寄りしがいつにないすめぬ顏付。內儀が樣子を問へば臺詞のある女郎をよその客が十日の揚詰。是は顏の立たぬ事と思ひしより兎角此頃氣色が悪うて少し咳が出てうそはらが立てこたへられぬ酒も醉が出ずと氣が塞がる。勇介樣何ぞ氣色の急にようなる藥があらば下さりませとあがり口にふんぞりかへりて手を出せば。勇介が幸の試み。此おかち殿の藥息子にもかくすとあれば我等が家の妙藥にして用ひて試みせんと思ひ。直に氣の轉ずる妙方ありとて三包ある丸藥を喜六に一服酒にてのませけるが。不思議なる哉暫くすると藥的中してむつくと起上り

しが。根が悪性で淫亂なるのら息子に件の妙藥を用ひたるものゆへ鐵砲の玉に帆掛ける勢。勇すのか〻衆は見る度毎に器量が上るといひ樣亭主の前ともかまはず內儀にほふど抱つき。聞てくだんせ北のしんちのかの噂した我等が相方のおいとめが私が返事が遲いとて田舍の客に十日の約束しをつたればどうも此男がたゝぬ。其土客めが座敷へふん込で臺詞せうと思ふたれど昨日から氣むつかしさに元氣が薄く其儘にして戻たが。こゝへきて勇すに丸藥を貰ひ其をのんでとろ〳〵とねたればぎやうに元氣が付てめつたに腹がたつ。こゝなかゝ衆のやうなよひ色を見ると亭主を打殺してなりと思ふ戀は遂る心と。いふに勇介肝を潰し是はどうで本性ではあるまいと叱つたり宥めたりするを喜六が面倒がり。亭主がたしなみの尺八を取て振廻せば。勇介內儀氣をもみ取さへにかゝりし所をしたゝかに打すへければ。內儀脊ぼねをおもしな叩かれ目を廻せし故。近所の人を頼んで喜六が親喜左衞門を呼に遣しが。喜左衞門來て樣子を聞てのびつくり。しばろにもたゝきふせうにも力强うて中々手にあはず。うろ〳〵してゐる中に此內の出齒庖刀を提さげ大はだぬいで北の新地さして駈出しければ。負おしみな喜左衞門もなき〳〵追駈ゆきしあとで勇介內儀もやう〳〵氣が付て脊ぼねの痛み强くうん〳〵うめく所へ。喜六母親おかち駈付け始終の事を聞て當惑せしが。身から出した錆泣詫てもかひなき恥のかきあき。されども仕合は此の新地より喜六を手籠にして若い者共が連來りし故すぐに親の內へ連歸りて町所への聞あれば俄に座敷牢を造りて喜六を押こめ。勇介內儀養生料町所への付屆に一貫目餘の物入にてやう〳〵事納まりしが。木綿屋吉三郎は病氣全快して親孝行にするを見る度毎に立腹しても叶はぬ事叶はぬ事。

赤烏帽子都氣質 卷之二 終

赤烏帽子都氣質 卷之三

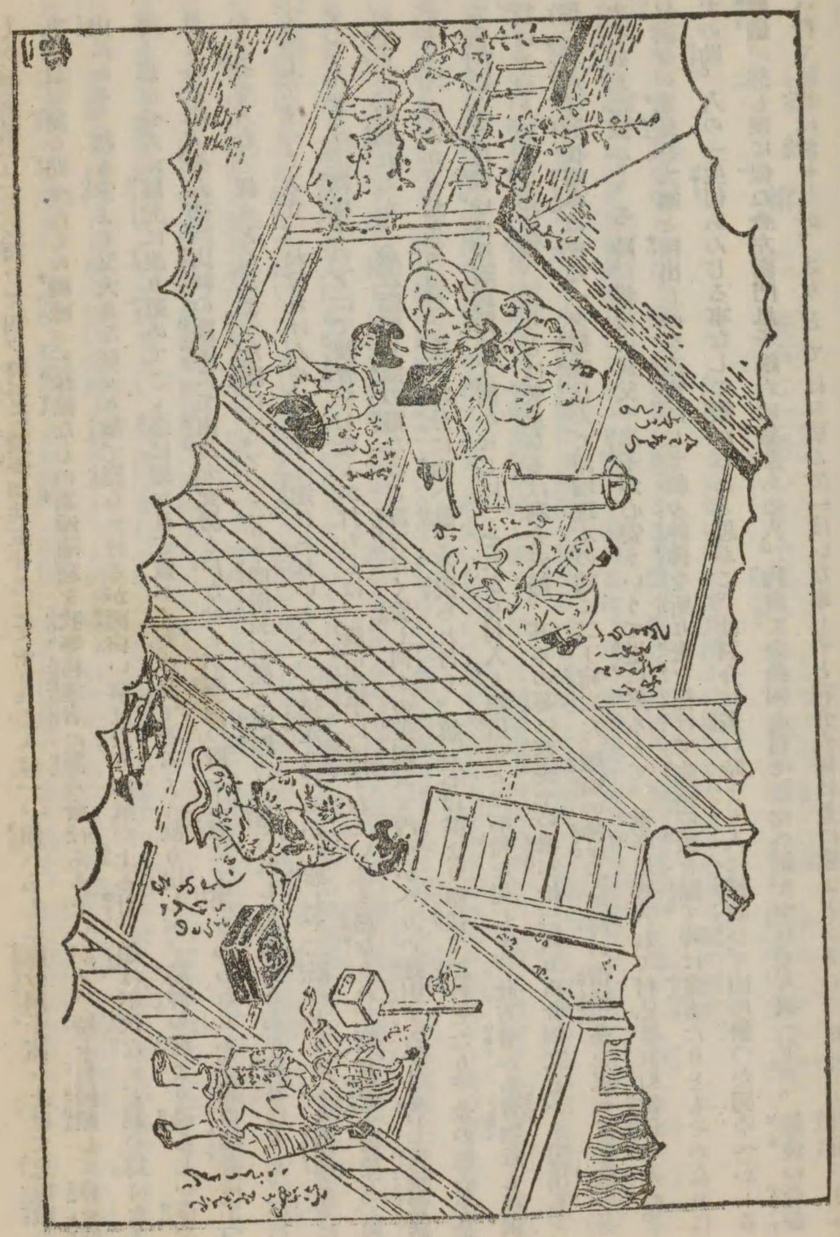
第一 古風な淨瑠理の咄に乘て來た拍子聞を勤める一人の娘

附り 大な聲を自慢する中老の昔咄は二階から下へ響のするせりふの一聲

額の長いは福人の相。頤の長いは大人の相。萬に好嫌ひのある人は貧者に少く。多く福貴なる人にあるものならん。是古の詞に見へ侍れば。私は何嫌ひと申す事なく。少々は蛇の鮓でも喰ますなどといふも。餘りよからさらんものかやと。思ふに付て。虛なき噂を慥に聞き侍りしは都町人の有德なる暮し兩替と米問屋との二見世米錢屋の金左衞門といふは五十有餘の人物なりしが泉州堺より若い時登り身一代に稼出しかく迄手廣う身上仕上たる男。銀六といふ廿一になる息子に同商賣の銀持より嫁を取舅姑嫁子の中睦じく。手代下人多く抱へて繁昌に暮されけるが。此金左衞門萬に好嫌の多い男。別して嫌の第一が先遊藝にては謠と茶の湯。食物にては酒と川魚。偖好物といふは第一が義太夫節の淨瑠理と角力。食物では蕃椒と麵類。身一代に銀延せしほどあつて萬に吝嗇が好なりしが唯若き時分より稼の中にて淨瑠理を稽古し樂とせしかど聲が餘り大過て頓と甘味美し味のない音聲。殊に間と拍子の惡い癖な生得なれど其身は天晴れ義太夫節の上手顏。十八の年より大坂の政太夫が弟子になり其後京でも名ある太夫に稽古して三十八九の年迄十八九年の修行なる故節とこつと聲のうづらとは飲込切てゐればこそ今五十の餘に成て息子共に隱して折々馴染の朋友方などにて所望しられかたるに。まだ聲が落ませぬなどと。心安う咄合ふ所へ行ては。かりそめにも自慢交りの滑稽咄。只しつほりと思ふまゝに聲張上かたつて見たうても。今は親旦那樣の御隱居樣のと內外のもの或は近所借屋のもの迄に尊敬しらるゝ身分にて町參會の東山行とても此五六年はむざと一節もかたら

れず。何卒人目にたゝぬ世間で噂してくれぬ淨瑠理聞たがる方があらばかたり聞かせ樂しみ度ものと明暮これのみ心掛ゐるこそ可笑かりき。金左衞門樂の身故毎日近所心安き方へ咄にまはりける。道二町下の町の煙草入屋へ行き堺の親類中へ進物に遣はす煙草入を五ツ六ツ調へけるが。此袋物屋の利助といふは三十二三なる利發者。女房は一ツ二ツおい女房と見へて目から鼻へぬけそうな辯舌のよい笑顏よし。十三四な娘の子おいしといふは少し此節不快のやうす。金左衞門煙草入代銀拂ひ茶を持出る娘を見て色惡く不快らしき樣子を尋ねければ。少々虫氣に久々勝れざるとの噂はて器量よい子なるがいとしやとて。灸治あるひは聞おぼへし妙藥の咄などして煙草二三ぶく吸ゐられければ近所でおとにきゝし米問屋の親旦那。是がえんになるも商の手筋と思ひ夫婦が出てお旦那樣あしらひ。お有難いのお結構なのと追從を大白の砂糖揑廻はし。歸らるゝ時は利介夫婦が跳で門送りするに金左衞門も心よう思はれ折々通り序には利介方へ立寄り少しの物など誂へては。ゆるりと咄などして廿日許にかい百年も馴染だやうになり夜分も咄に行て利介が夜などの仕事先にて昔の若太夫播磨さては政太夫が元はざこ場の十兵衞錦太夫が俗名は綿武といふた事迄知つた自慢の淨瑠理咄。利介が淨瑠理は得かたらねと耳功者聞く事の好な噂に女房お品が心からそこへ義太夫節の好な口上。金左衞門笑壺に入て手前らが若い時稽古した最中とは違ふて今時の若い者は淨瑠理の解語うみ字の吟味をせぬゆへ節が只いやらしい。廿六年前に四條の今筑後が芝居で盛衰記の淨瑠理政太夫の重兵衞が二切で源太が勘當場。昔の島太夫が三段目の笹引。死だ紋太夫か四段目の鐘の段。いや又此時の樣な面白い聞事はなかつた。其時代を見ては今時の淨瑠理はかたるといふ名計。こちらは其廿四五年前の太夫に稽古した節故聞く人が聞くと甘味が知れると涎流して話されければ利介夫婦は感心して喜び何んと旦那樣御內々で近夜かたつてお聞かせ下されまいか。手前の二階の奧座敷でおかたりなされば表へは聞へませぬ。何程大きなお聲成されましても兩隣へ聞へます計り。北隣は只今明屋。南隣は女夫對の職人二人ながら義太夫好。幸ひ裏が一所の借屋宵から聞人に呼で置き外の聞ては私家內親子三

人何卒お願ひ申ますといへば。金左衞門願ふてもない心嬉しさ。先づ其夜口明じやとて北條時賴記の雪の段をかたられしが。さりとはむしやうに大きなとんきよう聲にて其くせ拍子の悪い淨瑠理なれど。利介夫婦がお前追從小首傾け感心して耳を側て聞きゐるを。金左衞門はいよ〳〵自身の節聲をよいと思ひ。夫より折々利介方にてかたられける。扨ある時利介女房に云ひけるはその方もしる通り近年こちの不仕合。一人の娘は虫氣にて長々の物入。去年以來工夫した山事も皆中途にぐれたれば急に出來た内證の大借金。迚も煙草入縫ふて賣る位で大金はもうからず。それ故一ツの才覺は。上の町の米問屋の親旦那。不可淨瑠理を譖て聞くを喜び度々かたりに來ることそ幸い。よう取入て銀の無心を云掛る積なれば娘も氣六ケ敷とおもしろさうに見せ掛て聞ていよ。其代に病氣養生氣儘にさせ。よい小袖拵へて取らそうと女房子に熟談すれば。實に尤よい心付とて淨瑠理の譖やう聞きやう迄工夫して云合せ。扨何ぞ馳走せんと思ひしが麵類が好なる由を聞きし故。蕎麥切を先近日の會には振舞ふ積。どうで元入せねば金にはならぬとて近所の蕎麥屋へ行き度々蕎麥切調へる事相談〳〵置き。金左衞門咄に見へると蕎麥或は饂飩を振廻ふて淨瑠理をかたらせ〳〵十會ばかりもして後彼大金の無心云出す心なりしが。九會目の夜分は隣家の聞人も入れず不快な娘に云含め金左樣の淨瑠理聞きとむなくとも。しんぼうして今夜は側で聞てゐよ。爺が仕合のようなる事じやといへば。蟲積より氣鬱の症なる娘故おとなしう飲込。利介夫婦悦で今夜は何でも淨瑠理一二段濟み蕎麥切しんぜてから彼一件を願ふ下心。暮前より座敷を出來待掛ゐけるが。程なく金左衞門も見へ直に二階へ上りてはや自慢の顏付。今日は去方にて蕃椒を饗應はれ亭主が自慢の辛き蕃椒なれど拙者好物故何の子細もなう二百計ふた茶碗に煮てあるをむざ〳〵と喰たれば亭主もあきれて其やうに蕃椒を上りましたらお聲も出ますまいと云し故。菅原の三段目を大きな聲で一段語て聞せたれば家内の者我をり。今二三段語り聞かせよといふたれど。今宵はこれの娘が病氣の鬱散に聞たがられる由のお頼にて無理に斷いふて此方へ參りしと恩にきせし挨拶。利介は何でも有難いごかしにて親子三人金左が膝元へ倚りて聞き



しが。景事道行二三段語りて四ツ時分に蕎麥切共五ぜんしてやり。こゝは一ツ腹へらしに隨分調子高う上げて忠臣藏の九段目を語り聞せんとの機嫌。三味線なしの素淨瑠理を我等程達者に語る者はあるまいがと。時々自慢顔して鼻を仰山にかみ。扨も常より又大きなびゞり聲で語られけるが面白い事はなうて氣が上る計。娘は不快なれど親の爲になる事と思ひ金左が膝元に坐り勤めてこゝ迄は聞たれど氣がくたびれてそろ〳〵眠り出しが。精神の疲より恐ろしい夢を見てゐる時。金左衞門山科の隱家にて由良介女房と戸なせとが臺詞の所を大聲にて語りゐられしが。詞の論義にずつかり身を入れ。扨もとんきような聲にて。フンこりや聞所お石樣と乘懸つて語られしを。娘のお石が寢耳に入り。びつくりしてすつくと立。ねほれけんや。どうに迷ひあれいといふて逃走りけるが。悲しや二階の上り口より眞逆さまにずでんどう。箱梯子の下にて腰骨をしたゝか打ちしは。眞に瘦子にはすねといふも愚なりぬ。利介驚きあわて。娘の介抱に取紛れしが。金左衞門も氣の毒なれど詮方なく暫し何かの差圖云て內へかへりの延引すると。若し格別世話でもかゝらんかと是をあんじ。夜半時分に宿へ脫てぞ戻られけり。娘お石は其より腰拔て膝行となり。金の無心を金左衞門にいへば賴ゆへ淨瑠理語つて聞かせしに。それから付入り銀借せとは不埒な男じや。此方昔から質物なしの素貸はせぬといふての立腹。さりとは笑止なるは利介夫婦。其年の暮に蕎麥やの拂が拾三貫五百廿四文といふ書出し。職商の手間仕事冬の夜なべを每晩休んで淨瑠理本の前に二丁宛立た。蠟燭の拂まで不時の借錢。是を思へば手前の身上不如意に成かゝる時。銀持の親父や息子が心安ういて遊に來るとて。減多に物入れて付込まれぬ當世の人心。只其身の家業を大事と精出し心を直實にして朝夕神佛を祈り奢を卻けて生質の美を顯す時は貧者たりともそのなりに天の助。人の一生何あんじる事なしに樂からんと思ふに。此利介は若い時より人に媚諛ひて山に掛つた男ゆへかゝる難儀。然し親に似ぬ金左衞門息子銀六は慈悲ある人。內證で金拾兩心付せしゆへ娘をつれて大坂へ下り。難波の骨接ハ行て腰拔は治りしが。さりとては口喰ふて一ぱいな事じやと利介夫婦は是に懲よどうさい。ほうど溜息つぎに

けり。

第二　流石は仁體のよふ見える謠の藝能囃を好む借家の弟子分

附り　よい年に成ても見損ふは藝にかたよる心から俄の腹立

偏ならざる是を中といひ。變らざる是を庸といふと敎へ賜ひしは古人の詞。此語を引て噂するも恐入る程の愚なる偏屈な物語なれども目前見聞したるまゝの實錄を書侍るは。かの淨瑠理好金左衞門居宅の上の町に所持の抱屋敷ありけるが表の家數十軒ばかりの小借屋。裏には長屋を建ならべし借屋にて諸商賣の小體なるもの多かりし內に。伊介といふものは繪草紙道行本の類取賣の小商見世を出し置て。伊介は淨瑠理の指南太夫といふ程にはなけれ共。素人の分ては功者な淨瑠理。近所小息子。手代すんま。心安いを幸いに數十人稽古に行きけるゆへ。每夜々々夜の深るまで三味線の音も聞へけり。此長屋の向にて一二といふ身上がら金左衞門商賣の米と是は質とを家業にする萬屋七右衞門といふ男ありけるが。扨も珍しい程な謠好。幼少より謠をならひ今四十に餘る迄日々の稽古謠の口傳神文して殘らずゆるしをうけ。慰みがてら人にもをしへる位になりて。いよ〳〵面白さ彌增し。朝から晩迄謠のみを心に思ひ。稽古の外道歩行にも口の內にてぼい〳〵〳〵と謠を謠ひ。我程な謠の上手はあるまじと自身己を讚て諸藝の上といちづに喜び。淨瑠理小歌など謠ふ者は人外のやうに思ふて一向付合もせず。町儀の參會などにて年ばいな人が謠得うたはぬを見ると。さすがは俄分限者丁稚奉公煙草盆の掃除よりへあがりし悲しさは小謠一ばんさつはりと得うたはずまし。くさくさして居る體。さりとはあさましい不便な者じやなどと宿へ歸ると女房子に云聞かせて人を三文もせぬやうにじり。夜道あるけばねり物の樣に雪踏をしやり〳〵と引ずり。口元に八の字なりな皺をよせ。武藏坊辨慶のやうな顏付して謠をうたひ樂まれけるが。彼町の金左衞門が借屋にゐる淨瑠理やを甚だ腹立。始は草双紙商ひと思ひしが近頃

より淨瑠璃指南を渡世にするよし。水さして宿換させんと度々町で噂すれど。此町の年寄大腹中で仁心ある人ゆへ頓と取上て沙汰しられず。七右衞門齒癢く思ひあらるゝこそ理り共云はんが。此淨瑠璃かたり。伊介が南隣にゐる仲七といふは。うつし物あるひは香包扇の繪をかく職なりしが。是も謠を好き萬屋七右衞門を先生に頼み毎夜稽古に行きしが。ある夜七右衞門方にて仲七咄しけるは。御存じの通り私となりの淨瑠璃や。近頃は段々弟子共がふへまして。夜分は八ツ半迄も躁ぎ扨々やかましうて困ります。夜前も私妻が用事ありて隣の淨瑠璃やへちよと參り。女の事なら暫聞てをりました時。かたり仕廻ふて伊介は先生顏にて弟子の若い衆に向ひ。此九兵衞樣は久しう稽古に見へぬがどうじや。病氣でも出はせぬかと云たれば弟子の内より八兵衞といふ男が申すは。いやもう九兵衞は義太夫を止めるつもりそうな。なぜになれば近い頃から國太夫節を面白がり。跡月より綱太夫が所へ弟子入して國太夫へ打込んでゐますといへば。伊介が義太夫の先生顏で。音曲事のうちで國太夫節程下作なものはないに。九兵衞樣は變つた物好。國太夫けいこしやうよりは謠ならふたかたがましじやにといふたれば。並ゐる義太夫節すき共が如何樣これは先生の尤な氣の付け所じやと云ひましたげな。妻もこれ聞てかへり私へのはなし。如何に文盲なとて國太夫節とうたいとを同じ位に思ひ。已がすきの義太夫節ほど上品なものはないと心得たが可笑うござりますと。何氣なく七右衞門に噂すれば七右衞門赤面して大きに腹を立て。扨もそれはにくひ事をぬかしをる。能はやしにしては御上の御祝義になくて叶はず。神をいさめて則ち御神樂。御大名は申すに及ばず町人百性の祝義事に謠なうては勤まらず。淨瑠璃小歌はなうても濟むもの。其至り〳〵た醫を國太夫と一ツにぬかすは聞くも無念けがらはし。此事を云立にし二ツには近所の野良息子のら手代共が夜更るまでさはぐ事を失に取り。急に家換させて見せませう。伊介も貴公も金左衞門が借屋なれば。貴樣が噂した故伊介の難儀と心得。淨瑠璃好の金左衞門なれば貴樣も家換云付るは知れた事。其時こそ幸ひ横町にある手前の借屋十六疊敷の格子作り。今日からでも貴樣に貸します。とも〳〵に尻もたしやれと端的

に町の宿老へ行き樣々とわらたきしが。近所子息子手代の夜ふかしを宿老も氣の毒に思はれ。家主金左衞門を呼びよせ急に家がへを云付られしが。金左衞門淨瑠璃好故いろ〳〵取繕ひ云て見ても叶はず。伊介を又外の町にある我が借屋へ宿換させ。仲七が水さしてより起りし事其上謠好が氣に入らぬとて急に又仲七へ家明けを云付れば。仲七は兼ての合點萬屋七右衞門借屋へ早々家換して双方事納まりしが。五十日斗り立つと謠好の七右衞門方へ心安う來るもの小聲に成て咄しけるは。こなたのお借屋にゐる仲七といふもの。見かけは柔和な人品なれど大な山者の大騙りなるよし。元は西國方にて武士の浪人じやと云ふげなが。頓と出所の知れぬ者じやといふが定說。七八年前長崎で有德な町家に二三年奉公して居たる時。主人の金三百兩と主人の妾とを盜んで京へ上り。則ち今仲七が女房といふは其妾で是も志の惡い女。亭主に呑込ませて密夫さへ三四度もして大まいの銀を取た由。此方の借屋へ來てゐる事を彼長崎の町人が耳へ入れ。近日尋に參ると申す事を去方にて承りし故。御心得の爲め御咄申し置くと云ふを聞て。七右衞門大に驚き。何卒今日中にうけ人へ渡し度とあせらるゝ中に。はや彼長崎の主人より付屆け是より段々六ツケ敷成て事濟むまで三年餘り程かゝつて家主の物入が此間に銀で九貫三百匁といふ入用。扨も存じの外なる謠うたふたと七右衞門はあたまかゝられしが。淨瑠璃語の伊介は金左衞門借屋へ行てよりよい弟子が段々付き。勝手よふなりし上に室町邊の去旦那が贔負をうけ。三貫五百匁で家買ふて貰ひ。繪草紙の本見世をにぎやかにして下女の一人も使ふやうになりし故。家主の金左衞門は頭さすつて悅ばれしを見聞した事疑なし。扨も世の中の事は面白可笑い油斷のならぬ物ぞかし。

赤烏帽子都氣質　卷之三　終

赤烏帽子都氣質 卷之四

第一 大坂の町宅は難波橋筋目の能在所の噂を聞て集る近所の朋友

附り 客を見顯て手に取る書物は青表紙の學文を見せる唐樣の柱掛

詩に曰 白圭之玷 尙可磨也。斯言之玷不可爲といへり。しかれば白圭の玉は玷ても磨けばなをるべきが言葉の玷たるは直る事なし。故に人々言ことを謹しみ儉約を守りて表向の義理ある禮式の音信にしわん坊の名目を取らず。只慈直を專とすること萬民の知德ならんや。しかるに自身己を讚て我鼻高といふ面部の病症を顯す。人のふり見て我がふりなをせと昔より云ひ侍りし世俗のたとへを今こゝに。大坂難波橋筋へ近頃より奇麗なる小座敷を借宅して。已讚多高右衞門と名乘り何渡世のやうすも見へねど夫婦ながら常に絹物を着し暮されしが。とくと噂を聞けば生國は讚州丸龜の人にて筋目よき歷々なるよし。二人の中に九ツになる娘の子一人。十四五なる下女に十三になる丁稚を召使ひ。其身は惣髮にて文才ありげに常に唐の書籍を手に觸れ。かりそめ人に挨拶するにも漢語を遣ひ。醫書は大方見盡し何時醫を行ふとまゝなれど療治にかゝれば貴賤に交はらねばならず是が面倒なるゆへ未だ此業を施さぬなどと立入る人への噂。儒學を第一に怠らぬ拙者なれば儉約を專にいたすと。是をいひ立にして隣家近所の俗人を集め酒事を集錢出しにして終に一度振舞ふことはせず。唯我在所にて大銀持の一門一家多く筋目のよきこと。儒學に達し廣見したる事をかりそめにも酒のうへにて咄し。樣々の手柄をせし物語り詩文書など是まで所々にて作りしを文庫より取出し見せけるが。是を聞く近所隣の人は職人商人なれば一向詩などはよめず。平仄韻字が如何した譯やら知らざる故何を見ても六ケしきことばかり。如何さま物識の筋目よき有德者と感じ入ぬ。然るに此高右衞門筋向ひに如才無庵

とて儒醫ありけるが見掛よりは甚だ文才ある人にて醫學は勿論儒道神道の書も暗からず詩文も達者なれど是は近年知らぬ顏。生得酒を好み惡き癖のなき上戸なれど兎角來る人毎に酒をふるまひ。其身も日毎に三度といふ酒はかゝさず飲ば人に諂ひなく物ごとに慈悲を思ふ氣性故とんとあればあるだけの暮し。療治も巧者にて病家は儒醫に稀なるほど多く評判よき人なれど。此ありたけ暮にて僕の一人も未だ召使はれず。夫婦かけ向ひにて節季々々は一杯調度の身代なりしが根が正直なる仁故近所隣の噂に彼の高右衞門が文才何かの咄を聞き奥ゆかしう思ひ萬事に手を置く町内といひ殊に向ひどうしなれど。物ごとに遠慮をし。折々顏を見合ひ目禮するにもうやまひ尊敬しられけるが。高右衞門は無庵儒醫なる故文才薄く我が醫學の噂を聞て萬事に手を置き斟酌の尊敬ならんと早や無庵を我が胸中へ入れ。或日無庵宅へ行て心よう挨拶し。少し學文自慢をして餘は一向宗の祖母かゝを道場寺のお住持が愛しらはるゝやうに云て夜分御閑暇にはお咄に御出なされ。承はれば貴公もお酒が御好物のよしを南隣の紙屋十兵衞殿に承りました。拙者も甚だ好物。折々は十兵衞殿や北向ひの古手屋喜兵衞殿など打寄て樂みますが古人も儉以養性。靜以修身とあれば。とかく學を好むものは儉約を專といたすが一ツの道を行ふなれば互に驕を愼み酒事なども集錢出しにいたし今宵は三人寄て一升に仕つらうと存ずる時は。八錢や十錢が酒を八九軒ほどの酒屋へ手前の小丁稚めに調へさせに遣しますが。殊の外烏目の數に合せて見れば酒の升目が多ござりまするなどゝ笑ひければ。いよ〳〵無庵手を置れ如何さま聞しにまさる奥ゆかしき人。今いはれし人聖人の詞をまじへてのおどけ咄。物にようもなれたる仁ならんと。一人心の內にて高右衞門を讚め。夫より盃など出して內儀とも近付にし。お町內へ先々月御變宅にてお出なされしより緩々お意得るは今日が始て。自今お心安うお互ひにと挨拶。暮かたは手前へお出下されまいかと高右衞門尋ねられければ無庵も如何さま今日より御懇意を結びますため夕方私も參上仕りませう。夫は忝けなし。しからば後刻と一禮述べてぞ歸られける。七ツ時分より無庵入來を待ちうけるとて書物などしなじな取出して机の傍に列べ置き。扨て俄に

奉書の紙を取出し傷寒論講釋月並三八の日難經講釋一六日といふ書付をして格子の間の鴨居に張り。床に墨跡の一軸を掛て唐樣の柱掛をいくらもあしらひて待かけるが。暮方に及び無庵入來の咳ばらひを聞くと丁稚に表の間を明けさせ其身は史記といふ書物の序卷を開き。見さしたる體にて挨拶しけるが無庵座に付て席のやうすを見られ。殊に醫書講釋までもしらるゝ仁。誠に賴母しく思はるゝも直なりき。高右衞門も今日は何日にない氣を張り酒を振廻はれけるが又詩經のはしくれを少し述て儉約をいひたて順慶町の夜見世へ八文で鯖を一疋とゝのへにやり是を鉢肴の第一にしての酒事。高右衞門内儀おたつ中々一げんにて俗人には逢はず。僅か三間ほどの内なれど出て逢はぬ見識なるが醫者だけにてか九ツになる娘のおかねを連れて出ての挨拶。高右衞門は無庵が兼て謹み居らるゝ體を見込んでの我常癖。存分筋目よき出生と學文自慢と在所によき一門あるの咄。拙者なども國元に居ればたいまいの家督なれど田舍者になるも殘念に存じ先々月より思ひたち先づ當地まで出ましたが。此上の望は京都へ上りて一向醫業にても行ふか。願はくは御歷々方へ仕官の望み。少々金子も用意御座れば當分はこれを去方へ預置きました故此足物にて家内五六人は何案じなう暮します。初て御入來下されし貴公へ斯樣な打付咄は如何と思召されうが向後朋友になりますからは信を以てお出合ひ申す心底故内外の御物語りと誰に初て逢ても我身を上たくお定の口上。直なる醫師無庵何の氣も付ず尤に聞き一禮懇に述て其夜は歸られける。或日高右衞門隣の紙屋十兵衞古手屋喜兵衞を呼で集錢出して酒事せしが。此二人は高右衞門がお首尾を見て歩合心易くて借出し能元手にせん下心。お前さまのお學文が無庵さまに半分やりたいとても療治で世を渡らねばならぬお人。せめて下男の一人も使はれるやうにして進ぜたけれど一はいに行きかねる身代。又あなたのやうな節季々々にお案事のない結構なお暮しで御療治なされいでもすむ御身分はお醫者のお學文まで委しくお講釋までなさるゝほどのこと。去りとは世界は意地の惡ひものとの追從。高右衞門の所では集錢出しの酒を飲て我が所へ吸物の五ツもして呼び入れ。未だ錢三文貰はぬに向よりは殿付しられて此方よりは極上の樣付を

し。京の若狹宿へ賴でやり蒸王餘魚と若狹小鯛を駄賃共金一歩て五枚づゝ調へ高右衞門が宅へ持行て大切な金銀を出しながら京の一家中より二十枚貰ひました内少しなれどおすそわけ旦那にお上げ下されませとて藁苞にして走りの扨子かけにさげて置。ため紙のかはりに附木の一把も得取て戻らぬうへに。是は珍看直にお持せにて一猷仕らうまいかと又集錢出し。一人前に四十八文づゝの割付を出さるゝは笑止なりき。頃は極月廿六日のことなりしが紙屋十兵衞も古手屋喜兵衞も根が小元手にて仕廣げし身代故大三十日の首尾心遣ひ。女房が氣を付て北わきに奉公して居る時見覺えた金線魚の杉板燒の肴して臭てもほつこりと酒も和せず顔を顰めて咽を通し腹中へ入て少し心のしつかりとなるをよしとする茶碗酒無理呑をして居る所へ。高右衞門方よりの使ちよつと唯今お目に掛りたし喜兵衞も無庵老もたゞ今お出なされてとの口上。十兵衞も來春はほぞを見て調達ことの相談も仕かける下心。早速使と同道にて行けるが。早や無庵も喜兵衞も座に付き十兵衞とも三人揃ひければ高右衞門盃を自身持出で。今日各方をお招き申すこと別の義にても御座らぬが。拙者方少々悅ばしき筋の常々御入魂にいたす朋友方なれば先づお三人へ早速お咄し申すが信の朋友同士。共にお悅び下されへば。御存の通り北わきに名高き大銀持町人なれども筋目よきことは大坂は云に及ばず。京江戸までも隱なき寶盛傳藏方へ拙者娘お金を養子に遣しました。身代柄で申さば傳藏が身代と拙者とは誠に挑灯と釣鐘一向釣合ひませねども慮外ながら又筋目はまけぬ拙者。兩親は死なれたれど祖母や伯父や兄弟共が軒を並べ國元で指折の家筋。郡侍なれば帶刀はいたす。傳藏が家よりはまさるほどの筋目。則ち傳藏方支配人が國元の者ゆゑ手前から申さいでも向に能知り。如何娘御を申し受度との賴。あまり人に人を入れての所望故然らば進上は申さうが今四五年は傳藏殿とお出合は申さぬ約束にいたし度と申せば。向よりいふは其日より御緣家にいたし度存ずれど四五年は不通お出合なしとのお好みなれば仰の通りに如何やうとも仕ませうと只管の願ひ。其處で俄の相談いたして昨日傳藏方へ養子に遣はしましたが。娘は仕合でござる直に傍にて伽する小侍女。十一になると十六十七の女をお金が召使のため

この頃三人抱へしやうす。昨日も手代が來て云ふには何方へ連れまして參りますとてお歩行かせ申すことはいたしませぬ。お乘物に召させまするは主人の家風。此間中にお金さまのお小袖二三百色ほど早や用意いたされましたなどと申します。格別町家へ遣して悦と申でもござらねど先づ娘は仕合もの。拙者と違ふて暮の大きなと金銀の澤山なが重寶のみ是を御朋友かたへ隱しても不實と存じ則ち今日其方より到來いたせし祝義の一樽唯今開封して各方へお振舞ひ申し共にお悦び下さるやうにと存じてお招き申せし事。然し何もお看のない譯は此樽に鰹節を添へ餘は拙者無人故勝手をさつし吳しか外に此品御覽じ下されとて白木の目錄臺に金二千疋すへて寶盛傳藏といふ下げ札の付たるを三人に見せ。蒲鉾一枚を薄う切たる取肴にて酒をすゝめけるが大坂中に隱なき有德者の傳藏殿なる故十兵衞喜兵衞もがをり。無庵老何と思召す結構な所へ御養子にお出なされたではござりませぬか。高右衞門さまお浦山しう存じます我々共も大銀持樣から參つた御酒あやかりませうと肴のない酒を數盃飲けるが喜兵衞が才覺らしき顏付にて。高右衞門樣はお學文の上にて儉約を第一となさる故拙者が存じ付ますは此御祝義を三人して如何で致しませねばならぬ所をせず唯今御祝義さし上る心で三人中間より一ツおすい物をしては何とあらうといへば。是は一段よろしからうとて十兵衞同道にて魚屋へ走り鯛の味噌吸物に品々取肴を云ひつけ歸りてのしたり顏。やがて魚屋持參すれば是を肴にての酒盛。無庵も根が酒好なれど餘り肴のないにこまり少々割付の出るはいとはず心よう今三ツ四ツは呑まれ魚屋にも聞させて酒事にひれが付き高右衞門吸物をふるまはれて亭主より客へ御馳走と禮をいひ。下女丁稚に給仕させて何れもよい機嫌になりけるが無庵下女丁稚を醉て見違へられしが。高右衞門娘や息子のやうに挨拶しられければ。亭主少し角立たる聲にて兩人の者共は拙者召使ひの奉公人でござると云はれければ十兵衞喜兵衞は大望の願下地。特に大銀持の一家は出來る何なりといふて氣に入らんと。無庵老それは貴公に似合はぬ御口上。娘御は歴々へ御養子にお出なされた其御親義を申して居る中でお召使の奉公人衆を御娘御樣の御子息樣がのとはきついお目違ひお醫者がさう見そこなうては

手前の妻が血塊と云お見立も矢張懷胎では御座りますまいかなといへば。高右衞門せゝら笑ふて無庵老も如才のない見へたむきなお人じやが慮外ながらおぬかりは有まいが傷寒論を隨分よくお飲込みなされ。醫書多き中でも傷寒論を能取廻さぬ醫者は何の役にもたちませぬ。得ては天窓付きと着物とは天晴お醫者で銀持のたいこにして重寶記ばかりな療治人があるものと醉まぎれに我ぶられしが。喜兵衞が傍から是の先生のお學文はゑらい物じやといへば。常に文才を面に見せぬ無庵老も酒の上むつとして色眼をかへ。一言いはんとしられし所へ宿よりのつかひ。無庵樣唯今お歸りなされませ久太郎町の搗米屋から急に呼に參りましたとの口上。療治用はのべがたく何もいはずと恨をかくし座を立てぞ歸られける。

第二　產れ付た癇癪持の咄を聞て呑込む傭醫の手拵段々

匙の廻るほど信仰をする近所の評判

附り　金居臺の下札に太う書附た能衆の名前は遠くから見ても讀讀めぬ所の

ある手跡

御代も泰に猛き寅は早や千里の戴入してまた目出たう返り新參ぬらりと出勤しられし卯辰の初春。長閑に注連も明て正月下旬になりけるが無庵老は舊冬高右衞門が不禮の大言。紙屋十兵衞古手屋喜兵衞が不興にせし高右衞門へのお前ついしやう。一杯飲まるゝと思ひ出しての腹立。節季師走の人々相應に諸拂何か不埒せまいため心勞して居るものを呼よせ己が自慢と萬事工面のよいと大坂で名高い寶盛一とうの内へ娘を養子に遣りしをひけらかさんとて朋友は信を以てお出合申すが道なる故外の人へは咄さぬが各方ばかりへ先早〳〵お噂申し必ず他の人へ御沙汰は御無用などとぬかして肴もない酒を振舞ひ客の方から吸物こしらへて吸はすやうなあほうらしい事があるものかと一人立腹して

居らるゝ所へ。高右衞門北隣へ七日跡の廿一日に宿かへて見へし干物を商ふ駿河屋七兵衞といふ男來り無庵老に逢て持病の癇癪あることを語りお町内へ參りてやう〳〵五七日になる私お馴々しう存じますれど何時お療治お賴み申しませうも知れぬ病身もの故先やうすをお咄し申上置きます。人樣の事にても隨分なるべきお世話などは致しまして心は如在なう存じます私なれど唯癇癪故か少しの事が苦になりまして扨かりそめにも腹が立ましてどうもなりませぬ。癇の起りかゝります時など頭高い我ぶる奴やなどに逢ひますと。そいつめが生面を横槌ではりいがめたうなりますといへば。無庵老も舊冬の事を思ひ出して小腹の立てある所故。なるほど貴公の癇癪も餘程强う見へます。總て其やうなもの貴公其御持病には惡しい所へ宿をかへてお出なされたは。お隣の己讃多高右衞門扨も大ものつきのぜい言第一人を見下す男と。いひも終らぬ内に七兵衞氣を急き聲をかんばりにして。さう仰せられますればお咄が申されます。私は又あなた樣も高右衞門めと御懇意のやうに承りました故。さし控へて居りました。御存じの通りお町内へ變宅いたして參りましてやう〳〵八日になりますが。もう高右衞門と物いひが出來さうになりました。南隣の十兵衞殿は家主が違ふてござりますが私と高右衞門は合借屋殊に裏は一所の住居。も高いきにうせおつて答へられませぬ自慢咄。宿がへしてさんじまする日挨拶致しましたれば貴樣は何を商ふと尋ねました故干物を商ひますと申しましたれば。鰹節はあるかと問ひます故土佐の上節が御座ります御用なら上ませうかと申しましたれば。今では此方にもよい鰹節を所持いたして居る。これ見られよとて五六本取出し。此節はよいはづじや北の寶盛傳藏方より到來せしと申します故。アノお前樣寶盛へお出なされますかといへば。行くくらいか拙者が娘を舊冬段々所望故養子に遣したとぬかして。それから樣々の大ものをつき其身を高ぶり居ります。時に私が女房の妹聟は寶盛の手代。中年で暇を貰ひ親の跡相續の願ひ主人聞屆けられ今に出入もいたしますれば寶盛一統のことは何によらず委しう承ります。傳藏樣の方に娘子は二人あるに如何いふことで高右衞門が娘を貰はれしやらと存じ。幸ひ家見廻に參りし故尋ねて見ましたれば中々それは曖

もないこと。何の不自由らしい高右衞門とやらが娘を所望して貰はれませうぞ。娘子養子したいと思はれますれば寶盛一統の旦那方に娘の子達はお妾腹の子共樣よせれば八十人の上もあり。一かう他から養子は致されず。殊に去年の冬寶盛一統旦那樣の妾に出來た子共樣の向は皆々お銘〳〵の本家へ取よせられ。妾宅は子達なしになりしが傳藏樣のお妾は今橋の北横町に居らるゝお幸といふは生れ付ての我ものにて昨日まで守育てし主人の娘子を本家へ取られ跡がさびしさに養子がしたいと行くほどな人に賴まるゝよし。若し其ことか何分旦那の名が出ては聞ながしにもならぬといふて其日は歸り又翌日參りて申しますは。いよ〳〵此妾の所へ高右衞門が娘を養子にせしよし違ひなし。此節方々へ高右衞門があまり娘を寶盛傳藏が所望する故養子に遣したといふよしと貴樣のお咄で聞しがどふも聞すてにもならず。則ち寶盛の番頭へ噂したれば外からも廻り〳〵て昨日旦那のお耳へ入りし故直に妾宅へ人が行き急に其養ふた子を不緣にせばよし。さもなくば妾ともに暇を出すとのいひ付け。彼の氣儘な妾も面目を失ひ其日娘の世話人を呼び何の子細も云はず不緣を云たて。今日お金をお戻し申し度といへば仲人聞て先其樣子を高右衞門方へ行て云聞せしが大きに立腹して仲人とつれだちて妾宅へ行き理屈をこねまはしたれば又妾の方からも一理屈。その樣におねだれなされば此方よりも申さねばなりませぬ。元此の子を戻しますことは旦那傳藏樣よりの云付でござります。其のわけと申すは此お金を手前へ貰ひました明る日五升樽に鰹節。不通の貰ひ切と申す約束に金子二千疋遣はしましたれば其の進物を御近所のお衆を呼んでお見せなされ。寶盛傳藏が拙者筋目よき事を聞きどふぞ娘お金を養子にくれいと人に人を以て御近所のお衆を呼んでお見せなされ。寶盛傳藏が拙者筋目よき事を聞きどふぞ娘お金を養子にくれいと人に人を以て の所望。傳藏は大坂一番の有德者なれど筋目は此方が百倍まさる故遣すことも餘りすかねど段々手を入れて賴む故ぜひなく遣したと仰られ。私からへぎにのせて上ました二千疋の金子を白木の臺にお乘せなされ下札に旦那樣のお名を書付け人々にひけらかして御酒をお振舞なされましたとのよし。其時御近所の魚屋へ吸物を仰付られましたげなが其魚屋も御酒のお合などしてお咄を聞旦那の名札も見て歸た樣子。則ち此魚屋の娘が本家の暖簾内に奉公して居られま

す故。此正月の藪入に宿へいてお前様の事を聞て戻られて噂しられましたが。つい曖昧中宿持手代衆の耳へ這入。且那様へも聞へて大きに御立腹。急に養子娘を暇やれ。のび〳〵にして置くと私までも追出すと嚴い仰付。さうすると出入の衆が方々で聞て見へましてばつと成ました故斯様な首尾の悪さ申さばお前の方から不縁をお好みなさるやうなもの。なぜ其やうな嘘をおつきなされますと世話人の聞くまへでずつかりといひけるが。高右衛門は顔を赤め一言の答へも得せず娘を連て夕べ歸つたに違ひなし。扨本家へ年々禮に上る讃岐の問屋が昨日來て高右衛門がやうす問ふたれば此男が委しう知て居て話し。其高右衛門と申すものは丸龜にて質屋をいたし居ました作兵衛と申すもの。今年三十五六になりませうが廿三四より學文を心がけましたが子供の時からうそつきのたんくわもの。其くせしわい欲の勝た奴にて所中での悪みもの。兩親の無事な間はそうもなかりしが六年前の七月に親父が死。五年前の霜月に母親が死てから一向所中云合せて付合せず。高右衛門一家一門に相應な暮しの商人共あれど只小學文を鼻にかけて利口ぶると片意地なとにあぐみはて。一門一家も他人同然内證は義絶して寄付けず。論語讀の論語知らずといふて讃岐一國に悪まぬものもないくらいになり。誰も質置に行かぬやうになりて段々の不仕合。二人の手代も見限り奉公を引て是非なく家屋敷を賣拂ふてよほどの借金を分散して金五十兩殘し是を所持して女房と三人の子供をつれ京へ上り。去お醫者の所へ五十兩もつて相續に入しが下地少し小學文もある故彼のお醫者方にて傷寒論の書物など少し小半分ばかり覺えて講釋も四五度は聞たよし。夫から又至りもせぬに醫學の自慢を仕出し。只人々に高う行て萬に負惜みをする故。此お醫者殿の風に合はず。我も度々喧嘩して五十兩の持參金入用何角に不足して三十兩取返し。去年の秋大坂へ下りて難波橋筋に小座敷を借て居るよし。則ち慥な事を承りました。今下女といふて使ふて居る十四五な女は高右衛門が惣領娘。丁稚といふは次男の息子。九ツになる今度妾の所へ養子にゐてもどつたは妹娘。此妹ばかり高右衛門が娘と見せて殘りの子供は奉公人に仕込み。三十兩の金を又何か入用に欠を立。殘りて廿兩の金で親子五人が居喰そろ〳〵高右

衛門も貯の薄なつたに負惜み。うそをいひ覺へしとぜいを人に聞かせて我身を高ぶるとを幸ひの元手にして大きな築山を趣向する下ごしらへ。近頃は近所隣の町家の衆を呼びよせて集錢出しの酒事をして例の大言鐵炮の上手な自慢して人をふづくるそうに御座りますと問屋が委しい咄を仕ましたと。私女房共の妹聟が申されましたと。七兵衛息もつがず語りしが無庵も始終を聞かれて横手を打ち。とんとそれでよめました。下女めも丁稚めも高右衛門が顔にように似たと存じた。元それからおこつて舊冬も少々云分が出來ました。扨て其時金子二百疋乘せた白木の臺の下札。寶盛傳藏といふ名前をば遠くよりも人の目に懸るやうに文字大きう太う書て御座つた故。拙者愚案に存ずるは寶盛一統などは町人なれ共筋目よきもの。殊にお大名方屋敷々々の進物何か格式も存じゐれば。なんぼう同輩といへど彼のやうに名札を大きうは書かぬもの。とんと開帳か萬日の下札見るやうに書付しは如何なること。定めて祐筆なども抱へありつらんと不思議に思ひしが扨は高右衛門めが手跡ならん。拙者が不思議うつとも知らず只人の目に能見へるをよしと思ふて文字を大きう書きをつたは。あれほどな虚言いふことの名人めでも一ツの穴。ハテ委しいお咄を承つて拙者も少し腹がゐましたと種々看調へて七兵衛に酒をすゝめ居られしが。高右衛門合口の紙屋十兵衛女房あわたゞしう無庵老所へ走り來り。只今急にお見廻ひ下されませ。十兵衛殿が目をまはされましたと云て歸りしが。氣にくわぬ十兵衛なれと療治は別のことゝて早々見廻はれければ。齒を嚙みしめてふんぞり反りとんと正氣なし。無庵心に思はるは去年少し申分せし故療治そまつにせしと云はれては醫業の仁心すめず。遺恨はゐこん療治は療治とするが仁術の道とて。格別に心を盡し鍼藥など施されし故か。三時ばかりして正氣付きけるが。無庵老は其夜十兵衛方に一宿しての療治。十兵衛夫婦醫師の親切なるを感じ入りぬ。病根をおせば心氣の痛みと勤酒の内損より出し事にて甚だむつかしきやうすなるが。無庵老の見立よく服藥的中して三十日ばかりで過半全快に向ひけるが。無庵養生の心得に事よせて彼高右衛門が不實なる咄。干物や七兵衛親類に寶盛の手代ありてみさいに聞きしこと共を咄されければ。十兵衛も

思ひ合せる事ある故初て氣が付き。古手屋喜兵衞を早々よびにやり。無庵老に聞た委細を咄しければ。喜兵衞も赤面。十兵衞と顔見合せておはづかしいは無庵樣への手前。舊冬も高右衞門が所でお前樣をなんじてうそつきめが氣に入つたさの追從輕薄。誠に未練な町人根性と嘸其時もお笑ひなされつらん。おわびのため何もかも白狀仕ますとて喜兵衞が語りけるは。去年の九月に高右衞門めが當町へ參りましたが。御存じの通り私は北筋向ひ是の十兵衞殿は南隣。今干物屋の居られる高右衞門が北隣は其時分は明家の時。或夜十兵衞殿が私に咄されますは。こちの隣へ宿かへて見へた人と折々咄し見るに扨歷々で筋目もよい人。生國は讃岐の丸龜邊で銀持の鄕侍なれど田舍を嫌ふて大坂の侘ずまゐ。國から持て見へたあり銀を廻し其利足でゆつくりと遊び暮し。したが儉約はきつうする人じや。總て銀持はあんなもの。餘ほど貸付のあるやうすを見屆けしは十月の晦日にふと我等を呼にくして酒を振廻れ。何かと咄の跡で少々錢を買ひたいが此近所で兩替屋は何れがよからうと尋ねられし故。兩替ならば私がいつも取引いたします堺筋の萬屋へ仰付られませ。なんなら只今私が參り錢を持てこよと申して參りませうといふたれば。然らば三兩か錢をおかい下されと云て金五拾兩ばかりの封を切り。拙者へ三兩渡され し故。是はよろしい物を澤山に御所持でござりますと挨拶したれば。去方へ此度少々貸付ました金子。六ケ月の利足をとりましたが是ほどござると云はれし故。六ケ月に五拾兩といふ利足はあらまし一分の日合にして見れば千兩といふ貸付。今は斯儉約にして居れど末にては望もあるといはるゝは聞へたこと。常きぬものに下女丁稚を使ふて遊びくらされても氣遣ひない身上。學文を好ておびたゞしう物を入れたといはるゝもこれなれば尤とおもふ內に心付きしは。一口に千兩も貸付る位なれば外にもまだ貸付があるであらう。しわいで慾々銀持といふ段が見へたと。是の十兵衞殿が私への咄。扨此一二年十兵衞殿と相組で銀もうけの趣談を工夫いたし居りますは。京の川東に唯今幸御座ります一町四方ばかりな新地を買ひ。數多借屋を建て貸し。其內にて場所よきかまへを間口三十間に奧行五十間ばかりの家を立派に建。門口は十間づゝ三ツにして水引暖簾は一所に續け。

色酒戈といふ三字を横に大きう書付て。一軒は女郎三百人ほど抱へて藝子素人の廻し見世。中の一軒は大杉林をつりての造り酒や。殘る一軒は金銀山の如くに積みし兩替見世。三軒內は一所にして色酒戈屋喜十郎と二人の名を一ツにして一ぱいあてますつもりの相談最中。何を云ても二三人銀主がなければ出來ぬ仕事。先此高右衞門殿を一人の銀主に取込む積り。こんゐ厚うして置き。春は早々云出して賴む相談を去年霜月の朔日から十兵衞殿としめし合せ。扨二人が高右衞門方へ行き。しわい合點で付合ひ。いつても集錢出しの酒を飲んで是のうちや私の方へ呼ぶと吸物の二十もこしらへての馳走。酒の上で聞くほど田舍に大銀持の一家一門ある噂。彌々面白う思ひまして俄に我が方もこゝな內も疊の表がへ小普請などして入らぬ諸道具を買ひ。內證の體をよく見せかけて高右衞門を新町へ連行て振廻ひ。夫といはずに銀振廻しを噂して見れば。來春は貴公方へ御內談も申して見る能筋があるなどの首尾。冬中いろ〳〵と物を入れて付合ましたが二人の仲間で三貫八百匁の借銀。當年になつてそろ〳〵一件を賴みかけうと思ふ內是の十兵衞どの病氣。寶盛傳藏殿方へ養子に遣た娘が戻つたといふ近所の噂。どれぞへ預けてあるか內には居ぬといふ人もあり。どうやら樣子の心元ない。若しつまゝれはせぬかと申しましたれば。十兵衞殿はそれ聞かれてより不快に二三日暮されしあげくに先月俄の眩暈。今日貴公樣のお咄で何もかも注文が合ひます。そんならばとて今是ぞといふて高右衞門めをねだりやうもなし。とんと我等は月夜に釜鱗の高奴に引拔かれしと。二人が眼に角立て頭をかくこそ道理なりき。無庵も今は氣の毒に思はれ。兎角仕覺へられた商ひ一道に掛つて御座れば斯樣な無念もなけれど。色酒戈など云ふやうな大きな思ひ付をしらるゝ故高右衞門等につまゝれめさる。其上病氣を出し是が全快に向ふたでこそあれ。死やなどすればほんの犬に喰殺されたやうなもの。向後高奴がこと思ひ忘れられよ。君子は己を惡んで其人を罪せずとあれば。此後銘々萬事を愼まれよと誠に文才ある無庵老の意見を受け。二人共發起し。十兵衞が大病も愈て後とんと大きな願望も止みけるが少し止みかぬるは高右衞門が是までの虛言を思ひ出すと立つ腹。切てもの意趣返しとて十兵衞

本復振廻に事寄せ無庵老を上客にして高右衞門。扨干物屋六兵衞など其外向ひ隣の人を招き。いろ〳〵馳走の上、喜兵衞が高右衞門に云ひけるは。六兵衞樣のお咄承れば其もと娘御寶盛妾の自分養子に遣されしが。貴公の口から。不緣のやうすを聞きましたが。又何所ぞへ遣されましたか。是から何れへ遣されふとも人には有體に咄しをなされ。なんぼう廣い大坂でも虛言があるとかいばけが現はれますといへば。六兵衞がいふは讃岐から登られた問屋の忠兵衞殿に承りますれば。貴樣は質屋の果じやげに御座ります。今下女じやといふてお使ひなさるは貴公のお娘御。丁稚殿も誠は御子息じやと申して居られました。如何さま質屋をなされたほどありて感の深い御工夫といへば。無庵老が貴公は先年京都で醫者方へお內義も三人の子供衆も連れて養子にお出なされた時。一二年醫學を勵まれたとの咄しを去方で承りましたが。一年や二年のお學文で傷寒論講釋などといふ札は能うもお張なされました。去りとは御器用なこと共と三人心を合せて難じけるが。高右衞門が鼻はひつしやり頸窩の見ゆるほどさし俯き居られしが。此體を見て各々腹をゐ。喜兵衞十兵衞小聲になりて去年からしたゝかつまゝれた恨を彝すに又美味料理喰せるとは。扨も珍な事かなと一向笑ふて興を催ふしけり。

赤烏帽子都氣質　卷之四　終

赤烏帽子都氣質　卷之五

第一　唐まで聞えたよい女房持た男の自慢顏が少し五月蠅髮の生際

附り　一時に出る人魂が行當りて兩方へ颯と別れた丑三の夢の樣なまこと

古語にも男子は外を云。女は內を治むるとあれば。人の身代も夫婦中能こそ宜なる哉。近頃評判のある都五條邊に能子屋六兵衞とて刻煙草やなりしが。宿ばいりかり五年目に少々內證の手組よふして近在の小百姓より廿一になる女房を呼迎へけるが。丁稚一人使ふて家內三人睦まじき暮。此女房おたか嫁入して來た當座半年計は在所の土氣退かず人目にもかゝらざりしが。地が色白にて顏の道具そろいすらりとしたおし立にて髮長うして黑き事漆の如く。總身に愛敬深き生れ付き。京の水がしゆむ込むほど日々に色白く土氣はなれ。二年計立つと仰山に云ふ時は廣い日本國にまこそ仕合者。よい女房を見ん爲に煙草の賣れる事は朝から暮まで物買の絕る間なく門前に市をなしてめきり〳〵銀をのばし勝手ゆるりと暮けるが。亭主六兵衞は我等が女房のやうなよい器量は世に二人とあるまじ。何程の有德者も是程の仕合はまねもならぬ事と明暮女房自慢顏するも尤なりき。此六兵衞眞向ひに鬢付油元結萬小間物を商ふ黑田屋嘉兵衞といふ者ありしが。亭主嘉兵衞は町人にしては惜い程なよい男。色白にて中じゝ品のよい事は十日湯をつかはひでもさつぱりとした奇麗なる產付なるが。扨も緣は異なものにて此嘉兵衞が女房は珍しい程色の黑いつゝら短い肥りじゝ。顏の工面の惡ひ事ぶ形な樂燒の茶碗の如し。女房は世に男も多いが我程なよい男を持ちし仕合者は廣い日本に二人と有まじと明暮自慢するもことわりなりけり。かほど不器量なる女房なれど緣なるか我が目にはさほどにも

思はず不便を掛けるが。向の煙草や六兵衞が女房一二年此方日切と器量を仕あげ。京中評判に立つほどの風俗にて往來の貴賤此女房を讃めぬものとてはなく。煙草商も繁昌して身上も仕上げける故。變り易きは川の瀨と男の心。いつの頃より嘉兵衞不圖思ふやうは。さりとては向の女房は美しい女。毎日々々向ひ同士で見れば見る程見ざめのせぬよい女房。六兵衞は大きな仕合もの。いやまた一生つれそふ一人の女房あのやうな美しい往來の者まで見とれる器量よしを持たらば嘸うれしかりそうな者と。羨ましきより我が女房の色の黑いがもう二目と見られぬやうに成り。明暮是をしんきに思ひ暮しけるが。思ひうちにある時は色外に顯はれ。日々夫の顏付あしく不興になる上。往來の荷かち持などが煙草屋が門にて孰も杖をして六兵衞女房を譽め。又北むいて嘉兵衞が女房を見てはくつ〳〵笑ひ。北側は黑し南側は白し。これは此町は晝夜町とは云はぬかなどと惡口云ければ。嘉兵衞女房おすが無念の涙に可惜月日を怨みて暮し。夫の心水臭うなりしも向のおたかが器量よく京中で評判する故我が身の難儀うらめしや〳〵と思ふ女の一念こり。おたかを咒咀心になりけるが。扨も世の中はさま〴〵。六兵衞女房おたかは我器量よく。往來のもの迄が毎日毎日立止り老人或はお侍衆などは道に人がら故立止まり見もならず。歩行き〳〵煙草屋の見世を穴のあくほど眺め通るゆへ。れき〳〵のお侍が石に。けつまづきこけらるゝこと鏡に向ふ度毎人の見る度に我ほど器量よう生れたものはあるまじ。二親がもちつと嫁入を待たるゝか。よい世話人を賴まれたら刻煙草や位でなく共富貴な。吳服屋か銀がしなどの妻にもなられそうなものと。不圖心付きしより夫六兵衞が顏の薄痘斑と髮の薄いと少しの出齒とが五月蠅う目につき。向の嘉兵衞が人品よく立派な男振を見ては心を迷はせ。身代はともあれせめて向の嘉兵衞どののやうな男を持たば嬉しからん物と。明暮是をしんきう思ひ。朝夕顏見合せ時分の挨拶するにも。近き頃よりしなつこらしう少し思ひの色に見へけるゆへ。嘉兵衞女房愈〳〵立腹して折節おたかが來て物もいはざりければ。おたかは又嘉兵衞女房が恪氣ゆゑ我がようなるよい器量なもの〻行くのを五月蠅がると思ひしは女の惡心。あのおすがゝなくば嘉兵衞殿

と密々にて契を込め我が夫六兵衞殿も大切にして心のうちは嘉兵衞殿を本の男。六兵衞殿は手かけの男の心でゐればすむことと思へど。あのおすがめが有ては出來ず。不器量な癖にのふずな女子め。何卒あいつをつき殺してこまし度ものと愚痴な女の一念。日に〳〵まさりけるが。或夜しきりに怨增し一向我が魂嘉兵衞殿女房につき。暫時なりと男に持て見たきと思ひ〳〵其夜寢にけるが。女の念力おそろしや夜半過に魂ぬけ出て。火の玉に成て向の方へ行かんとせし時も時とて。嘉兵衞女房はおたかを日々積る怨み。付き殺して思ひを晴さんと思ふて寢けるが。不思議や是も魂火の玉になりてぬけ出て。煙草屋さして行かんとする大屋根の上にて。おたかゞ魂の火の玉とおすがが魂の火の玉とべつたり行合ひ何かは知らず。暫時擦合ひ揉合ひして兩家へ颯と別れて入りけるが。おすがゝ魂はおたかが寢身へ這入りおたかが魂はおすがゝ寢身へ入り互に付殺さんと思ふに。双方脫殼の所へ工面よう這入りし魂なるゆへ。付苦める主人なければ罪も怨もなし。おたか心に思ふは我が身體はおすがの形となりたれども魂は矢張わし。一向これで一生嘉兵衞殿にそふてゐれば思ふ男を不義ものと云はれずに我が夫にするといふもの。若又こゝへおすかの魂が戻つて來たら取殺すばかりの事。最前屋根にておすがゝ魂の火を見た所が。大方わしが脫け出し身體の內へ這入りたに違はあるまじ。こゝへおすがゝ魂戻らば取殺してそひ遂る。我身體は脫殼なればおたかは死んだと六兵衞どのが悲しがらるゝ計の事と。工夫廻らし喜びゐるうち。はや夜も明れば何喰はぬ顏して起き。見世の掃除などすれば。向の煙草屋の見世も明き。おすがはよい女房の姿をかり珍しそうに顏をなで〳〵見世へ出しが。はや往來の人が眺め讃めて通る故心面白く。おたかめは嘉兵衞殿をねとりをつたは憎けれど迚も水臭い夫嘉兵衞。此美しい身體になるにはかへられず。今こゝからわしが元の身體を見れば見る程色の黑いきたない顏形。扨も五月蠅やのういやゝ。今日より鏡見る度の罪は造らじと心の內にて大きに悅び。見世より向のおたかが顏を見付舌出してにつと笑へば。おたかもおすがの顏を見。くつ〳〵と笑ひ互に云はず。語らずと怨晴らして夫を大事に勤めけるが。煙草屋の六兵衞は何の氣も付

かず女房の聲の變りしを不思議々々と思ふて暮せしが。おたかは互に思ひ思はれし嘉兵衛故。或夜私に樣子を語りきたない顏になるもお前を思ふ故と話しければ嘉兵衛も嬉うはあれど。おたかが元の容義にてこそ戀も色もありたるもの。下地の黑い女房の形でゐてくれてはさりとは嬉し迷惑な事とて明暮頭搔でゐるよし。餘り珍しき僞りなき物語なる故。鶴友が廻らぬ辯を加へ世にある人に噂するも。少しは雨中の徒然の慰にもならんかと思ふのみ。

第二　二度とない若い時も時なり折も用意の蜜柑饅頭を拾ふて悅ぶ近年の大當り

附り　料理人の手の內は見事に止めし刀のきつさき柔に

あしらふた三味線の早業

四季折々と四方の風景春の花夏の涼み秋の月とわたるうちの雪の景色。まつ前かた九月下旬神無月とうつり變るは山々のてり葉紅葉の色染めて老若貴賤のうつ〳〵まで拂ひ給ふや參詣の身も淸めたる吉田山にひきもちぎらぬ遊山の諸人。其處此處に幕うち廻し石の竈にうす鍋のわびたる手前しほらしき料理好ぞ樂しける。女中まじりの長歌や娘子供の流行歌遊になんなき神山の影に。一群幕打て趣向も深く樂しみゐるは京中の若息子。十人計の一連中。めん〳〵粹と心得し遊藝じまんのうてんつ群。一際目だつ裝ひなり。美形の藝子三人入てさいつ抑へつの酒事大さはぎになる前はお定りの櫻づくし。猛き心は虎の尾を履むより危い若人の元氣。邊に樂しむ內義娘侍女下女が見る事の嬉しさ。たまらぬ〳〵かんまへて沙汰なしにと平假名の千鳥が臺詞を久米太郎で次へ渡せば。源太が所作を三五郎で身をして見せるが餘念なき秋の錦ぞ色々なり。此連中の二三間上の山手に席を取りしは上京の若人一群。負ず劣らぬ十人連美なる舞子三人入れ琴三味線尺八にて長歌の掛合。酒事しつほりとして樂み居けるが彼中京の連中は上もなき粹自慢。さ

はぎは恐らく山の大將と思へども見物の貴賤老若今は上京連中の舞子がしつぽりとした琴三味線尺八の音にほだされて是聞事とて口々に詞にも述べ面白げに此一群へ立よりしが。中京の若手負惜の立腹。今は一向滅多に譟ぎ隣の邪魔して樂しまんと三味線を太鼓にして茶わんと酒注を打叩きて壬生の狂言。器量自慢の若息子が身ぶりよを桶取の女形。ちやり自慢の一人息子が半道化の相手になるやら。中で身輕な猿息子が松の木へ登りての輕業。是には見物の女子供は云ふに及ばず。年配な人までが面白がり。中京群の幕際へよりて讚しが。今は幕もはづして是見よがしの大さはぎ。上京の連中も皆氣の高い負惜にて見て樂の散たを無念がり。連中互に耳語合てさはぎの趣向只上びたがる此一組。幸藝に精い三人の舞子共に云付て花やかに狂言。千本櫻で忠信の狐の段を三人が掛合にて勤め。淨瑠理自慢と三味線自慢の息子共が舞の地をして聲のよく面白うしつぽりと語り出せば。是は又格別の見物事とて。此度は中京のさはぎを見入たる人々が。根ごきに殘らず上京連中の幕の邊へ立よりし故。是も幕高くしぽり上て見てくれの自慢。中京一群少しせきが來て色々と工夫すれど。上京にて名ある上手の舞子三人が狂言して見せし所へ。迚も藝子の舞も出されず。樣々心を碎きてよふ〳〵趣向せしは四季の樂遊びと半紙に書付て松の枝にさげ。最初が正月とてをどけ萬歲の所作を春の部に取組。扨御こしはらひの心にてにわかを幾らも思ひ付て夏の趣向。秋の所は格別の大當は。藝子三人連彈にて伊勢音頭。さては大坂島の內色茶屋掛行燈の家名寄などを謠はせ。連中殘らず立て雀跳。是にて又見物集まりけるが多の所の趣向は扨もとんだ思ひ付。此間に用意せしが杉ばしの新らしきを二三百ぜん持出て四角に高く積み。是に火を付てお火焚の心。連中殘らず打寄て藝子交りに三味と合せて大聲あげ。たけ〳〵お火焚のふ山の神のお火焚けのふといふたれば。見物の子供が同じ樣に蜜柑饅頭ほしやのふといふて喜ぶと酒機嫌の若い者共が拍子に掛つて囃せば吉田山中に樂みゐるよい機嫌な衆が珍しゝと駈付けてお火焚けのふ〳〵といふて喜びけるが。いつのまに整へ置きしや靑蜜柑と饅頭を夥しう取出して蒔散らしければ。子供大供の差別なく。我も〳〵と競合ひかち合ひ拾ひ

けるが。是にてあたりのさはぎを打消し。中京連中山の大將して愈々調子に乘り。數百の蜜柑饅頭蒔散らしてきれゝゆへ。山の麓へ買に人ばしかけて柿を二三百蒔きけるが。折節向を通るお侍浪人體のなり風俗黑羽二重の小袖に黑縮緬の羽織。目計出る頭巾を引かぶり。朱鞘の大小さしこなし行く人の左の頰べたへ柿を物むごう打當ければ。彼侍大に腹を立てあたりの者に樣子を尋ねらるれは。遊山の人がお火焚のまねをして遊ばるゝといふ故。愈々の立腹其儘中京連中の傍へ行て頭巾着ながら大に目をむき。につくき素町人めうぬらが遊びほたへんとて吉田へ參詣の身共に澁柿を打付る。法外の驕者め不禮とやいはん不義非道なる大馬鹿めら。一人も其座は立さぬ。柿打付けた不禮ものめを身が目通りへ出しあがれ。大げさに打はなすと。刀のそり打こい口くつろげ。にがりきつてねめ廻せば。上京連中は是を見て扨もよいきみ。餘り負惜してこちらがさわぎを打消さんと物入て急りをる故あのやうな大難義と。酒事止めて見物すれば。數多の人が喧嘩よ〳〵と推合て我先にとの見物。辨當持に雇はれし忠介と云若い者少し腕に覺ある力强の元氣もの故。彼侍の前へ出て兩手をつき頭を土に摺付けて。恐ながら只今柿をお顏へ打ち付けましたは則私。遊の興にいたせし事がそさうにて思はぬ御不禮。畢竟御相人に足らぬ町人でも下男の拙者め。重々誤り奉りますればお免し下され。御慈悲に命をお助け下されなば有難う存じますとしとやかに詫けれ共。中々侍合點せず。何了簡とは憎き一言。武士の面に疵付けられ許してかへれば刀の手前も云譯濟まず。覺悟ひろげと羽織ひんぬき刀するりと拔きはなし忠介に切掛くれば。匹夫なれ共ぬからぬ忠介。傍に有合ふ三味線にて氷の刀をはつしとうけ。沈んで拂ふさそくの早業。打合々々互に祕術を盡せしが。手ごはく打たる侍が刀に三味線切落され。人々是はと驚く內に連中のだんびら物取。ぬく手も見せず侍に。胸打一ツ眉間へあてしが。うんと斗に息たゆれば。なみゐる諸人一時に色を變じて驚きしは理とこそ見へにける。是程の事になりしに何思ひけん藝子共が二上りを引出せしが。最前源太の身振をせし物まね自慢の一人の息子が中村吉右衞門が身振物まねにて。ヤア〳〵兩人の藝者共。申付た通の仕組狂言けがな

ふ出來て滿足々々。是にてとんと此連中吉田山の御大將。ホヽウ目出たし〳〵。いざお侍役の大津や若八殿同大津や玄吉殿も御酒一ツ。是へ〳〵といへば。件の侍頭巾を取り。是は旦那お有難いお盃まづ頂戴といふと。辨當持役勤めし太皷持の玄吉が。さりとは若八の仕うちは甘い物じや。いや貴丈もさるものじやと連中打より是を今日の大はねにしての酒事。上京群の若息子共も山中貴賤の見物もとんと我をりて。辨當もつかはず一日珍しい樂み。はや秋の日の暮前なれば大方段々山より下りしが。此連中は夜に入るまで酒盡して初夜に吉田山を立ち。野道各々つれぶし謠ふて京へ歸りしは。罪も報も後の世も忘れ果たる面白さ。若い元氣は益々と吉田戻りや一興を、辰の初日の讀本に綴りて僕も又。亭主の好な赤烏帽子。自慢盡しを取組て。世に有る人に見せ侍るは。恐入りしと闘を。いふのもけつく自慢氣質にならんや。いづれに是は許し給へ〳〵。

赤烏帽子都氣質　卷之五　大尾

西山物語

西山物語

序

今同レ古者。人情也。古異レ今者。語言也。語言何以異也。蓋世有二汚隆一。人分二雅俗一也。是以學者通二古語一也。戛戛乎難哉。雖下稱二能通一者上。大率如二隔レ靴爬レ痒。豈愉快哉。倘能以レ古御レ今。卽レ俗爲レ雅者。業之成也。東都綾太理。博レ古知レ今。卽レ俗爲レ雅。嘗唱二國風復古之學一。交以二片歌一。樹二赤幟于詞壇一。夫片歌之於二國風一也。猶如二唐詩有二絕句一。但裁二其句一。具レ體而微耳。其調則高。其辭則雅。而其出二古書一。不二一而足一。其名尤彰明者。安部安丸。奉二清御原天王勅所撰古事記也。輓近乃響二彫其字法一。寫二俚言卑辭一。杜撰呫嗶。以爲二俳諧一者陋矣。雖レ然下里巴人。屬而和者多。可レ歎哉。綾太理嘗悲二流俗固陋一。能繼二千古墜緒一。欲レ播二片歌於天下後世一。忘レ躬爲レ道。孳孳不レ休。然二歎其落々難レ合。余謂曰。勉乎哉。有レ志者事竟成也。客歲遊二于平安一。下レ帷講授。戶外履滿。則是欲レ俾二從學士一。曉二以レ古御レ今。卽レ俗爲レ雅之術一。乃記二時事一。以爲二三卷一。題曰二西山物語一。苟志二國風及片歌一者。能朝二習夕積之一。則置二身於莊嶽間一之術矣。余有二古雅之癖且方外之誼一。今受二其請一。故爲二之序一。

明和五戊子春二月

金龍敬雄老杜多撰

西山物語總目錄

上

第一 こがねの卷
第二 かへの卷
第三 太刀の卷

中

第一 あやしの卷
第二 琴の卷
第三 文の卷
第四 わかれの卷

下

第一 露の卷
第二 よみの卷
第三 ほきの卷

西山物語總目錄終

西山物語卷之上

綾太理つくる

第一 こがねの卷

山背の國乙訓の郡松の尾といふ所に。大森七郎といふ武士はらから（一母同胞 日本紀）三人まで住けり。妹の名はかへといひ。その次なるは惣次となむいひける。妻は早く死亡なりて。老たる母の御坐するを。家は貧しけれど。三人の子して兎に角にも傅き（竹取物語 大切に仕ふるなり）參らせける。また同里に。同じ氏の家にて八郎といふ者あり。是もやむをにて（夫 名和抄）亡せし妻の遺留に殘しけるまなご（愛子 万葉）のあるが。その名を宇須美といひける。是も同じ貧しさにて。世のわたらひごと（伊勢物語 渡世なり）もなきまゝに。太刀をあはする（古事記 日本紀 劍術なり）術なむよくしければ。是を人に教へて。幽けき（便 万葉）たづき（万葉）とはなしける。七郎はまた一際其わざに勝れて。これは弓を射馬に乘る事迄も善しけり。身の丈は六尺二寸ばかりにて。太刀も殊更長きをぞ佩たりける。又此七郎なりける男は。（日本紀）大森彦七といひし武士のはつこ（裔 古事紀 日本紀 子孫なり）にて。八郎とはうか（從 万葉）にてなむ有ける。扨七郎がはける太刀は。楠正成のぬし。津の國湊川にて軍破れて亡たまひし時。血つきたるつるぎの太刀（古事記につむがりの太刀つむかの太刀とあり 太刀は斷の義）の侍りしを。彦七取歸りて。我家に殘し置けるが。その裔なれば。今この家いへに留まりて。世にふたつなき劔なりとぞ言傳へける。然れども。楠のぬし惜む心や殘したまひけむ。是につきてはくさ〳〵（種々 祝詞）くしき（日本紀 奇なり）事どもの侍りしことを。世々に言傳へける間。七代ばかり先の七郎なりけるもの。此太刀をさる山寺に納め奉りけるより。さるけち（古語けちどもゝ 反き也）聞えず家も富榮えて。ある大宅（長臣 万葉）のいへのこ（臣万 葉）となりてとき

めきけるよしなり。しかるに今たから滅び。家も貧しくなりぬる事のよしは。此七郎ぞ武士の道を麿きて。今の世のますらを（日本紀古事記万葉大丈夫也）と。人にも稱へ（古事記日本紀）らるゝ男にてなむあれば。熟々思ふに。我が家の寶とするは。唯彼の太刀一振なり。さるをめゝしく（源氏物語女らしくなり）甲斐なく。はづかの事に恐れて。山寺に納めつるこそ口惜けれ。（源氏物語朽惜しきなり）たとへ家は貧しくなるとも。また祥（日本紀古事紀世に云告なり）事の出來るとも。何條ことかあらむ。（伊勢物語何と云事かあらむなり）其太刀取り返さでは。七種のたからも（万葉七寶なり）我においてはようなしと。日比思ひをりしが。黄金いほひら（五百枚日本紀）調へ（由）たてゝ。彼七代さきの親納置つる御寺にまうてゝ。已こそ大森彦七が裔にて候へ。今黄金五百枚を。此御寺へ納奉らむ。扨ぞまつり置りし太刀は。我に返し與へ給へとぞねぎ（願）ける。院の主さは能ことこそ出來つれと。心には思へども。さる氣色もせで。こはうべ（万葉世に云尤なり）ならぬ事こそ承はれ。劔は正成ぬしの佩給へる太刀なり。此人ぞ天が下武士の龜鑑とは申ならずや。さる人の佩かせ給へる物なれば。くさなぎの劔（古事記以御刀之前刺而見者在都弁刈之太刀是草那藝之太刀也云々）にもたくふべく此主人は思ひをれり。黄金は又何ぞや。たとへ千枚にもせよ。淵（渕）河になげ打捨よと。我佛は說置給へり。さるけ（毓）からへある物をもて來て。遠祖の納置給へるものすらあるに。天か下の寶と替へもて往むとは。此あるじをおぞき（愚万葉）ものとや見給ひつる。ほりする（欲万葉）心深き者とや貶しめ給ふと。すが〳〵（清々日本紀）しきおもゝちして。（源氏物語今云顔付なり）ころもて（袖）古語を掻合せ。珠を爪繰りて御坐しける。七郎素より心とき（利）男にて。心の裏を宣給ふ事を逸早く（伊勢物語）知りぬれば。こはかしこき（恐古語）ことを憚らで申しつる事よ。然れど此黄金は御寺に納むとてこそ持て來つれば。いかでか持て歸らむ。今御教をうけ給はるに。（渕）ふち河に捨べき物これなり。わくらはに（泉万葉）御前（奉）にいづみこそ候へとて。ふむじ（封）たる黄金を解き。（三十枚）みそひらい（五十枚）そひらの數もいはず。汀の山吹の散りかゝる如抛ちしかば。主人立騒ぎて。こは物狂はし。たてくはへたる石に中らば。寶や碎けなむ。あれころ〳〵（古事記）と物にあたる音すなりと。頭を掻き足を爪立。頤（おとがひ）を垂れ。唯水底を打守りつゝ。現心なく見えける樣を見るより。七郎つとたちて。彼太刀を籠置たりし金戸（万葉錠）したる戸を破り。袋ながら引出して。素より是は我寶なり。

今こそ持返るなれとて。（遠）とき足を出して（字つほ物語）逃出けるに。主人心得貌にて。こは大盜人かな。（竹取に大ぬす人のやつかとも書けり）人やあらざる。能盜人參りてあるぞ。いたくな追ひそ。捕へてにぎりうたむは（捕益批之字）佛の戒なりと。唯みなそこを打守りて。微笑てなむ御坐しけるとぞ。

第二かへの卷

七郎なりけるも八郎なりけるも。太刀あはせて必ず勝べきわざ（術）をなむ論（こと）をりければ。是を學もの（古事記万葉）我大人と稱へ奉りて。遠近つど（集）ひ來（古語）然るに七郎は志高く。人にくだらざるさが（性古語）にてある間。術は類なく聞え渡りしかど。八郎が人ざまのやを（和）ら（源氏物語）なるかたに引れて多くは此方にのみ集勝りけり。されど七郎は物嫉の心は。更になき男にて。八郎とは交（まじはり）唯水と魚なして。（如泉）互に頼母しく貧しさも救合けり。さてあるほどに。ひとりの母怪しきまで痛（著）いたつき（万葉病也）いできぬるまゝに。兄弟みたりまくらべ（枕方）あとべ（足方古事記）に事へて。ある限扶參らすれども。日にけに（晃）（万葉日々なり）心ぼそく聞れば。兄し弟も。妹がまさか（万葉今爰はの時と云がごとし）の時と。たくはへおける單（正）の衣までも。藥に代へ。米にかへなどして。春より秋ばかりまでは彼をしゆる術もせで。是にかゝづらひける（源氏物語これはまさしに藥）彼太刀を取返したる故に。けちどもの出くるはしなりなど。人々いひあひける。此母人となり。萬いやめき（微）（伊勢物語世に云かたき方）たりしかば。日頃まじらひ（交）薄く。同じあは（間）ひのおふな（老女古語）達すらかゝる時にも寄來ず。八郎が妻なりけるものは。此母の萬心を加て物しやりければ。いきてなむあらばと。八郎夜晝たぢふるま（迷止）ひ（紀日本）て此事をぞ悔みいひ出ける。素より八郎はともがら（徒）愛には弟子をさしていふ）もおほく集寄につけて。寶もわきみちぬれば。得難き唐國のかのにげくさ（人参和）或は虎とふ神（万葉とふは虎のきも又報）眞珠（万葉）樣の物も容易く買求つゝ親の如くになむ仕へければ。七郎兄弟なみだおとして。かゝるむくひはいつの時にかせむとぞをろがみ（拜）（紀日本）にける。かくして冬の初まで病て。漸々をこたりてはてければ。（源氏物語愛には快氣にあて霍亂）はらからのもの

八郎親子も。唯荒たる多の庭に老木の櫻の咲出たる心地して。いと珍らかにもよろこぼひ伊勢物語をりける。大凡此母のいたづきをとりみ万葉看病なりける日月。ふたほかまり廿日ばかりになむありければ。兄弟のみにてはいと困からむとて。八郎がわくご若子万葉の宇須美を。七郎許夜も宿らせて附添せまいらせけり。彼のすみ顔形きよらにて。みやび風流万葉ごとを好み。歌よみ文かくわざは。明直をさ〳〵日本紀長々の義まさるひともなく。年は廿歳餘ひとつになむなりける。又七郎がいもとなるは。十餘八つになりて。是こもまた顔姿きら〳〵しく。日本紀風流の道は此母なむ幼より教へたて。類なかりし上に琴ひくわざは。俊蔭がむすめ娘もの語にもけおされ押さるゝ也源氏物語氣兄弟打寢るすげき透万葉には。みそかに密古語および指和名抄なべて指をいふして思ふ事を書交しなどするを。母はおほに万葉おほかたなりさ諭ぬれど能聞なれどとなむ思ひをりける。時雨うち降りて。庭の紅葉漸々移ろひ行に。仕渡したる眞垣も此處彼處打倒れて。荒たる宿なれば。何を慰に見るべきはなけれど。近は小倉山。遠きは高尾愛宕おたぎの山の。吹はらふ嵐につきて。白き雲間より濃き薄き紅葉たる中に。松柏の綠なるが。染出せるばかりなりとて。紙格さうじ源氏物語すこし押開きて彼れ見給へ源氏物語とて。かへが褥なむしかまへたるに。漸々いざり出て。源氏物語這ひ出る樣也宇須美も爰に御坐せ。かへも其處に侍はして。いま此嫗が古物語するをなむ聞給へ。是より次万葉卷一昔大津の宮に天が下知らすすめらみこと。天智天皇長歌をとりていふ藤原の鎌足の君に春山の萬の花の匂。秋山の千々の紅葉の色。孰れか勝ると詔ありしとき。額田の女おほきみ。天武の夫人也御か側たへに御坐しけるが。歌を詠て言譯たまふ。其歌の中に。春の花はいとおもしろけれど。草深ければ入ても執ず。又秋の葉は折ても忍び。万葉また青きをば置てぞなげく。嘆万葉なげくは長息の義しかは秋こそめでまされと聞え給也。さる事にはきこゆれど。此嫗がひがこゝろ心源氏物語には。春の櫻は散易く。秋の紅葉は移ろひやすし。いづれか誠の心とせむ。人は姿形の物にあらず。彼れ見給へ向樂むかつを万葉の群紅葉は。譬ていはむには。面に白き赤きをつくり。身には黃なる紫なるを飾て。ひと時の盛を見するがごとし。是に愛で迷ふ人は。誠の色好には侍らず。此嫗が目には群紅葉に。立並た

る。松柏こそ。唯まこゝろ万葉のをとこをみな語古なれさるは唐文の中にも。松と柏の雪のうちに立ても。其色は變ずとなむ侍と聞け。我せこ古事記日本紀夫をいふの翁。御身のうまれ出たまひし時。唐の文にはさる事こそ書置たれ。此娘が名は松と、や呼む。かへとや呼むと。自からに問ひ給ひし故に。此嫗おもへらく。松は千歳といへど。雪嵐に負て。打れ倒たるをば幾わたりも見き。かへといふ木は。千歳經るなど。詠たる事も聞かねど。雪霜にもか負ず万葉いと堅物とおもえば。此子をばかへと告るべしと申せし也。宇須美にもいと若き人にておはす。娘もしかなれば。生先はいか計の事侍とも。花紅葉の色にな愛で給ひそ今此嫗がいへる如。雪霜にも變らねてふこそ。うまひとの万葉心なれ。しか覺されよとあれば。二人は唯應答もなくてなむありけるとぞ。

第三太刀の巻

西の國にしるところ所古語もたる長ひとこの見かみ日本紀坐けり。此守つはもの兵〻道を好坐す御心ふかし。さるよりぞ。弓射。馬乘り。鉾を突き。太刀を合する術の世に越たりと聞く人をば。多くの米を給はりて。家の仕人となむし給ひける。爰に七郎八郎あることを聞給ひて。侍士おもと人日本紀を遣し彼ふたりが太刀合するを試し見よ。いづれにまれ。勝たる方を家臣いへの子と語せよと仰ありければ。嫐て先此事を。先立てしるべしける程に。友がらなるものども。こは氏の神の引給ふ能き祥なり。此方や勝給はむ。彼方や勝給はんと。取々その寄方にはとよめき万葉鳴さはくなりぬれど。世の聞えは必七郎ぞ。過ずして勝めとこそ。言合りけれ。扨豫じめ万葉おほたちあはせよそなり其太刀合の日も定りしに。八郎密に七郎が許へ行きていひけるやうは。此度の事家の榮譽とはいへど。同じ腕をもて同じ力を爭ふごとく。假令優劣あるも。其けぢめ伊勢物語分めなりをいかにせむ。唯苦しき時になむ當れり。是につきて頼聞え參らせ度ことあり。其處の御術は殊外てきてなり万葉取わ我れに勝り給へば。我は必らず討るべし。さる時は我徒疎て。ひとりだも隨ふべからず。しからば我此後。朝夕の糧

にも迫なむ。身ひとつにて候はゞ。小鋪は蜘の巣編葉ともも。脈の褥に雪を樂み。人はあらじとほころぶ万葉べきが。誰ひとり子にて侍るものゝ。憂へさまよふ万葉を見るに堪じと。今より是を忍兼つる。いよゝさるときになりくたち古語降つはくだるなり なば。宇須美をそこの御いろとも日本紀古事記弟思し。由縁あるひとの娘を迎て。早く初孫をも見せしめ給はゞ。此上の御ひかり源氏物語世に云盛光何か侍らむ。必此事御心にしめ万葉標おきてたうべ催馬樂唱よと聞ゆるに。七郎打合點き。こは此方よりぞ申べき事なり。其處は常に御徒を集給ひて。此術に怠給ふ事なければ。已如きに太刀合給はむは。とかまをもて茂きがもとを打ち拂ひ祝給ふよりも。最易くおぼすべし。知召ごと如古語春より母の疾病を看とりて。心闇み力盡き。骨も撓り筋も弛まりて侍れば。なほに古語打負奉るべし。さる時はなほさら世のたゞずまひなく。日月は明といへど。我爲には照らし給ふまじ。万葉さるときは母弟らも侍り。そこの御威光に當ては。誰か育み万葉賜べき。近すゞ〳〵も是等の事。御胸に籠おき給ひてよと。慾ねもごろ万葉に聞ゆるに。否我れこそ賴奉るべけれ。こは恐こし。此方こそ聞え參らするなれと。互身にまめ〳〵しく古語契いひちぎらひてなむ別ける。時は師走望の日。大井の川の邊なるおほ野万葉にとばり打廻して。彼西より上來たりし侍士人。解部令市中の事を正す役やうのものまで。猥に入來る人を拂ひて。ひをりの伊勢物語守外にもり居けれども。此事都のうちにも隱なかりしかば。かゝる術心得ぬ民商人までも。時を違へず集ひ來て。野づかさつかさといふ万葉高き所を に登り峰づかさに登り木にものぼり居つゝ。その太刀合の差別をなむ見ける。かくて八郎は。布肩衣万葉袴樣の物までも。黃金のあるに任て。縫ひ仕立たれば。人の柄も彌優り。振舞しとやかに立出つゝ。西の方のあぐらの日本紀爰には床机なとにあて言けりうへに腰うちかけて。むかもゝを古事記日本紀向脛なり蹴出してなむ待居ける。七郎は貧しきが上に。彼母のいたづきにつけて。殘れる物をさへ失ひつれば。荒々しき布肩衣に。袴の裾はみるのごと万葉搔垂梅松たるに。ゆふもて織つる衣の。まよひにまよひ万葉破たるを着て。東の方より立出ければ。見る人。こは貧しの神や。人にかゝりて日本紀辛目な見せ給ひそと笑ひける。されど丈高き男の目は大久米の命古事記日本紀此命眼利にも勝ぬべく。鼻は猿太彦古事記日本紀此命鼻高し

にしては。少し卑からむと見ゆるばかりなる。誠にをゝしき万葉武士也ければ。太刀合するにも及ばず。七郎こそ勝むなれと。侍士人は思居ける。さて太刀はしらかしもて造りたるきたちにてそありける。白樺木刀かたみに能ならはしおきたるを持出で。やと聲を合せて打合せけるに。八郎か打太刀を。七郎受止るとみえしが。その太刀段々きだ〳〵に折れて。柄のみ殘れり。よて八郎は辛目も見ずうち勝にけり。さて八郎七郎に向ひていひけるやうは。其處の太刀たわやすく古語折れるうへにて勝てるは。誠の勝にあらず。今一渡太刀を改めて。出給へとなむ聞えければ。七郎答へける樣は。さる事にあらず。勝と負くるは唯。天の神のなし給ふ也。眞劍まだち日本紀も折るれば折る時あり。今日の差別。私ならずとおもへはそこの勝給ふには紛なし。我かゝるには長居古語せむは面なしと万葉面目なきなりいひつゝ。折れたる太刀を拾あつめて。足を早み逃げ出てければ。見所もなき太刀合にぞ有けるとて。來し人も本意なげになむあかれ古語散りけり。後にしてひとのいふを聞けば。七郎が持たるは。藜にて造れる太刀なりしとぞ。さて八郎は多の米を興へられ。御仕人となしたまふべき。おしてぶみ日本紀をそ給はりける今の證文。又來むとしの卯月ばかりは。ひとこのかみ東へ古事記日本紀下り給ふべきあひだ。御供つかふまつれ。夫までは爰にとゞまり居て。徒にも數へを傳。餘念をも惜めよとなむ。仰くだされしとぞきこえし。

西山物語　卷之上　終

西山物語卷之中

第一 あやしの卷

今日の太刀合には。容易く八郎に勝えて。守の御稱にあづからむと。神〳〵にもいはひべ（万葉神酒の陶なり）奉り。直魚（古語まうけなどして。七郎か歸をぞ待ける。然るにふた太刀もあはせで。みそみそ逃出けるよし。さきたちて人のいひ聞せぬるに。悲しく朽惜いひ甲斐なく思かゞまりて。神にも御うらみを聞奉りしが。さるにても人はたがごと（日本紀 言）いふ物なればと思ばかりを空頼にて。（源氏物語）門にはかへ兄弟をつけ置て。かへりを待ける間に。七郎かへり來れば。けふの始終いかにか侍つる。早く語り聞せよとなむ。いきまき（息巻 日本紀）荒く責たまへば。七郎うけ給はり。たとへ八郎なるものごときは。前後にむかふとも。唯一太刀にうちはらふべきを。如何なる天の祥なりけむ。唯一太刀あはせたるが。太刀はみきた（三段 日本紀）に折れて容易く打負き。たゞ是時なれば私ならずと。おもひ晴けて（古語はらす也）なむ。退り歸りぬと聞ゆるに。さては人の誣言ならざりし。さる事の出來るも。かの太刀をとり返したる祟なり（古語）とおもふなり。殊におほくの寶を亡失て。貧しきをを見る事も。能事とは申まじ。直に御寺に行て。その太刀を奉返してむやと聞え給へば。七郎聞て。こは己が母にしては。甲斐なき事をの給ひけることよ。七郎かくやさしみ（万葉今此詞轉して愛る方に云ふ）を受しうへに。又しかのたまふ如くせば。愈、（万葉）人々の蔑視を重ぬるなり。己れ思旨あれば。必（大変）な悔たまひそとておほまりに（古事記）酒をもり。（古語）引受々々心よげに飲む。母もさるものにて。想旨こそあるらめとさとしぬれば。少心も晴けて。ともに酒をもりて遊をりけるに。怪事こそ出來にけれ。側に置つる刺鍋（万葉）自と躍上て屋の梁につく。こはいかにと母も兄弟もうち驚くに。まだ寔なるに。きつ（古語）の鳴く聲頻にきこゆ。かへは魂消して。（源氏物語）母に緊と寄添をれば。物次

に杖をとりて。彼刺鍋を打落さむとするに。なか〳〵漆もてつけたるごとく。抉じて（古事記）放なさむとすれどもかい放ず杖をもてうてば。此鍋きつの（狐）聲を出して鳴り渡りける。生憎や。いかなるけちにかあるともて騒ぐに。七郎は唯見やりしばかりにて驚かず。母呆れて刺鍋（和名抄 銚子）に湯沸せ子ども狐にあむさむとによひける（万葉さしなべに湯わかせ子どもいちひづの檜橋より來む狐にあむさむ○吟は）ごく事しば〳〵にて。寔すら靜なれば。火桶陶物の類。（金椀 古語）かなまり（柄ご 古語）ひさご（催馬樂）樣のものも己と躍出で打合などし。ときあらひ衣（万葉洗 潔物也）あゆひ（脚結 万葉今云脚半股引の類）袴樣の物も。竿に懸りながら。人の行ごとく空に駈歩き。夜はしも殊に奇しき鬼どもの集り來て。鳴り響動ます事更に止ず。七郎も母も。こは事有にて。狢（日本紀今云狢むじななり）樣の物の戯遊なり。貧しき家にはかゝる例。昔よりある事なれば。よき俳優（日本紀今云役者やうのもの）どもを据て。慰なりと思へば。いと〳〵面白き事ならずや。何條（伊勢物語 かなるの意）ものも。かゝる手術の逸早きことは振舞じ。彼見よ目の三ツある物ぞ彼處にたてり。（是）こを見よ。首は糸のごとくて。物に纏歩く女ぞ彼處よりく（來）。扨も俳優なるかなとて。萬常のごとくなれば。此勢に引て。惣治も初の如は驚き騒がず。素より人にも語るべき事ならねば。先しかして目を經る程に。或夜雪高く降りて。（物語）廿日餘六日の夜の月清らかに冱渡りけるに。七郎西の都（朱雀道より西をいふ）に行て。夜更けて桂河を渡りて。家にかへり來る道に。（木蔭）こたれたる松（万葉）の侍るその上に。體は一にて頭の七つあることひ牛（負事）に（万葉）鼻繩はげて（万葉）しづくら（万葉）うち置。身には白き糸もて縫たるかわら（甲 日本紀）を着たる武士の。そびら（向背 古語）に白きはた（幡）をなむ挿たり。そを見るに。流れ出たる水に散り浮たる菊の花を。縹色に染出せしが。月に映りて澄にぞ見えたる七郎心に思けるは。此程怪しげなる鬼ともの。躍歩つるは珍らしからざりし。此鬼ぞいと心憎き奴なれ。さまれ彼家の印（堅）をさしたるは心得ず。汝が名のらさね（万葉のるは告る也さねの反せ也）己れ是にて聞べしと。袴の端折て高く帶にかいにはさみ。かたには（庭 日本紀）踏鳴し。太刀の尻（万葉）空樣にかへして。捲手に（古語）うつかつかをいふを握り。いで聞べしやとぞ大聲（土佐日記）に迫ける。かの鬼かや〳〵とうち笑ひて。なれは大森彦七が裔

にてあるか。已は汝が遠祖に。太刀を奪はれし楠正成にてなむあるぞ。汝が遠祖の彦七常にその太刀をはきたりしを憎みて。我輩入かはり立かはり。是を奪はんとたばかり伊勢物語しに。彼彦七をさすをば苦しめたりしかども。さる祈りどもせしに打負けて。終にとりかへさで數多の月日を經しが。種々さとしこと。是にまけてや。汝まで七代が間は。我すむ山に置たりしなり。然るに汝又黄金を持來て。山の主の心を蕩し。再びとりかへせしぞ心やすからね。又此程まで汝か母を惱ませしも。我わざにて。その後のさとし事も。外よりなら來る事にあらず。今唯今直にその太刀を我に返さば。此後さいはひ來らむこと。掌をかへすごとくならむ。かくても否まば。汝が兄弟の間に祟出來て。此太刀になむ刺て死ぬべし。心を直に勢を覆へして。我いふにことに隨へときこゆるに。七郎ほゝゑみて。こは能き敵を得ざる物かな。我遠祖は。湊河の軍に勝て。そこの頭を賜はりし時。側に侍りける太刀を。かく捨置て。くさ〳〵のえせつはもの雑兵どもの佩物となさむは。朽惜しき事なりと思し故に。持返りて家の寶とし。その裔僕にいたるまでも。敬ひ尊むは。天が下に武士のうしと聞えし。そこの勢を尊ならずや。さるを此太刀に心を殘し。鬼となりて再びあれ出たるは果敢なしや。心卑しやかゝる鬼等を太刀もてきらむは。やいばにくそを古事記日本紀万葉糞がごとし。唯面に唾を吐掛てなやむ追ひやらむずると。ほざきに古語發言なりほざいてのりしかば否武士の道はさることにあらず。我屍に頭のなきは。いくさのならひなれば。さるにてもいはず。武士のからだに暫も佩る太刀のなかりしと。人のいひつらむ。其恥骨に徹り。その怒あらたまに染て。今又鬼となりて來たれるも唯これなり。しか聞も返すまじや。否さ。承とも返すまじ。いな返せ。いな返すまじといひあがりてをたけぶ古事記日本紀ほどに。畦がたになりやしぬらむ。河鵠啼どよむに。月の光はきら〳〵として。新古今曉になりやしぬらむ月影のきよき河原にちとりなくなり東白の空いと明くなり行に見れば。松のうへに白き鷺の宿り居てありけるのみなり。さても怪しかりし夜の有樣なりと今ぞあさましく古語怖ましの意也なりて身を震はかしつゝ。家にかへりけるとなむ。

第二琴の巻

八郎は太刀合に打勝てより。その名よもやもに日本紀四方八表高く。世の敬ひも日に月に万葉勝りぬれば。自から疾に幸をなむ重ねし程に。夜晝となく。日は七日よるは七夜てふ間。人を集めて打ゑらぐ樂古事記聲。里もとゞろ万葉に聞え渡りける。けふは七郎親子。弟達も。賓客實伊勢物語さねは眞也今いふおもの意なりとなして。迎奉らむと申入けるに。母も七郎も心に染ざりしかば。風にあたり頭痛となむきこえて。弟の惣次かへ二人ばかりをぞ遣はしける。さて何くれとなく源氏物語今何かと云義あるじぶり古語今云發應して。夜にも入れば。かへに琴の一手をなむ望まひける。反みかへ謂らく知召如。春より母刀自は稱號古語とじのいたはりを看病てをり候に。琴とてもちり塵掻拂ふばかりになむ。掻遣置し。そが上に此歳月。こゝろゆかぬ事共のみうち重なりて侍るに。少し習得たる手業も皆忘にけり。仰に候ば。なま〳〵古事記すゝも彈くべけれと。差當ては掻合ばかりも。覺束なくてなむと聞ゆるに。そはあだし人の申ことなり。かゝる中に何の御隔心か侍らむ。唯一手遊ばして聞え給へと。かの宇須美なる若人も。側へに出てすさめける古語なぐさむる也まに〳〵。万葉今云まゝに也最幼かるべしといひながら。峰の猿もより來べくなむ。引ならしける。もの語さて聲は。佛の御國にあるてふ鳥の。伽陵頻哥をきゝさしていふ囀り出たらむばかりに打上て。

いかにあらむ日の時にかも聲知らむ人のひざのへ我まつらせむ万葉

とうち返へし歌ひながら。目は細て。宇須美が顔をなむ打見守ける。宇須美は聲よくて。豫て今樣を歌けるが。取敢ず。

こと問はぬ木にはありとも麗しき君が手馴の琴にしあるべし万葉たなれは手馴なり

と。扇をうち鳴らして歌合ける。集合ける賓客たちは。夢にもかゝる事は聞取ざる。えみしども古語なりしかば。

唯よき聲なりとたゝへて。引受々々呑む事のみす。中に醉ひなき万葉する男。泣聲に聲張上て。

あな醜くさかしらをすと酒のまぬ人をよく見れば猿にかも似る万葉

と歌たるに。傍に酒はえ呑まで。魚をのみ掴てうち食らふ男。こはやすからぬ歌を謠ひ給ふ物かな。さらば己れらも謠舞はむとて。

あな見にく。酒うち呑みて眞赤なる。人の顔こそ。猿とかもみめ。猿よ〳〵何ぞの猿。嵐の山の猿ならば。顔を嵐に吹かれて。色の赤きはうべなり。おのがかくれの赤きは。さゝぐりを折る時。谷風や吹あげし。つるばみ万葉を拾とき。かりばねや万葉木萱の茎株なり つきたる。猿よ〳〵赤猿

となむ舞納ければ。此おぢが顔を猿とばしのたまひつる。朽惜や腹惡や。いかにせむとぞ泣ける。かくうたけ古歌

喜ほどに。皆ひと醉ふして。閉すべき戸も明様なりしかば。風は吹入れて。燈火はきえつ。下様の男女も。此ほど夜

壹と立騒ぎて。疲勞ふしぬれば。唯二人なむ。天の河原に行合たる心地して。此程心の外に隔りし事ども。末の契を

さへ。神にうけひて日本紀古事記 語らひつゝ。なへたる袋には著馴れたるをいふ衣を引被ぎ。源氏物語 琴を枕として臥けるとなむ源氏の詞をとり用ゆ

第三文の巻

さて後は是後につけて。七郎八郎が中ぞ。少疎成にける。是につきては。二人も今までの如。互に立入ず。唯もの〻便に。書交す筆のすさみを。逢ふに代伊勢物語おもふにはしのふる事ぞまけつゝ過すに。春にもなりにけり。ことだつ日伊勢物語むつき親族あつまりていほふ日をいふ なれど。互に出入て。酒のみする語事もせずなむなり行に。いと苦しくのみ覺ける。さるは琴を枕としける瞰を。己が後朝とは詠るなるべしと。古今集しのゝめのほからゝと明行はおのかきぬゝに成そかなしき 今將思ふなりけり。吻の便あれば。小さきたゝむ紙に書てたゝみ紙也哥集にしが書り遣しけるは

たちかへる年の麗けさに。溢る涙は解やらねば。梅に來啼く鶯の。思ひも無氣なるを見るすら。羨みおもひたまへらるれ。古今集雪のうちに春は來にけり鶯のこほれるなみだ今やとくらむ さてそも蘆まの鴛鴦のたち離たるばかりに。住ひてなむ侍事を早くも知らば。去年の春秋同じ住居に候し時は。ありのすさみにて仇にや契まいらせし。古今六帖ある時はありのすさみにかたりはて繼しきものと別れてぞしる伊勢おもふかひなき世なりけりとし月をあたにちきりて我やすまひし あすは松の尾の御神に。母刀自にあとひて万葉あとひての義 參詣ことの侍る。知ぬ顔に詣て給ふまじや。人まの万葉人居らぬ間をいふ侍りてかくなむ。

君にこひ明日を逢はむと松の尾の神に頼てけふを暮しつ

また

世の中の苦しきものにありけらし逢ずは戀に我や死ぬべき古今六帖

とあるを男いと左見右見嬉しく。とみかうみ伊勢物語するに。人もあらざりしかば。軈てかい認めて。女の童に傳て返しける。

春來ぬと人はいへども鶯の。啼ぬ限はと思ひをりしに。いと珍なる初音なりけるさらば啼つる花は折らでや待參らすべき。古今集春來ぬと人はいへとも鶯の啼ぬかぎりはあらじとぞ思ふ同待人も來ぬ物語ろ鶯の鳴つる花を折てけるかな

うけ給はる如。去年にも似ぬ御隔かな。しかすがに万葉今云さりながら也 故かくては止なむや。さるは明日なむ。此く御神に參詣なば。露の紛にも夢ばかりの逢瀬はべらむと

うけ給はるぞ。こは是神のしたまふなりと。喜ぼひに堪ねばとみに答へまゐらするなり。

朝靄たちなかくしそ松の尾の森の下路妹や來まさむ

また

戀しきに詫びてたましひ出ていなばむなしきからのなにや殘らむ古今六帖

唯此頃はからのやうに源氏物語空虛なりて夜も日もわいだめず。日本紀辨別 をりさむらふ

となむ書留ける。睦月八日になれば。宇須美は常する神參詣にかこちて語辨 つとめて語晨 出行ける。さむるにても母な

む。今日はこゝち悪しく覺るなれば。得參るまじと聞ゆるに。娘は胸潰れて。源氏物語人こそ先に往て坐さめと思に。立ても居てもあられず。天地にたちませる神々達。自が命を一時につゞめ給ひても。今日ばかり母の痛着をなむ。愈らしてたび給へと。心ひとつにこひのみ講所萬葉ける程に。神もめぐし日本紀とや覺けむ。漸々午過る晝過なりばかりにこゝち晴けて。誠に日も躑らけし。古語今よりや詣でむと聞ゆるに。いと嬉しけれど。時の移りぬれば。人や歸り給ひけむと。又顧慮く古語うしろ見たく也心もとなき也も思ひつゝなむ出ける。さて松の尾に參りつれど。大方にも得拜で。爰にや彼處にやと見れども。人の坐さぬに。さてこそと悔しく悲しくて。涙のさと溢るゝ源氏物語を。母見咎めて。何をか心弱物し給ふぞ。爰には付無事なれど。人の縁は神のしたまふことにて。因よりし中もかゝる因離に云共に万葉ことあり。離れしも又よろ事あり。さるよりぞ嬉しさも悲しさも世の有樣も。唯これが常なればと。心をやらむ古語今云心はらしなりより外はなし。かくこそいへ自も。生れながらのおばにもあらねば。老女若人〳〵の心をさとし知らぬにも侍らず。さな思沈たまひそ。如何にもして思ふ如。計ひて參らせむ今日なむかく詣で來しも。外の祈にもあらず。ひとのよわみには。病などこそかゝり來るものなれば。心を取直して。此嫗が。逢せむといふ時をなむ待たまへ。いざ歸るべしと聞ゆるに。よし〳〵しくもよしみしくの義したしくの意なりのたまふ物かなと。聞ゐたり。源氏物語さて出來る道の側の松に。彼男の筆にて。歌を書て付け置たり見れは片歌古事記にて

待しとは松に問はさね木のものとに

とあるを見よりぞ。又悲しくて泣ける。

第四 わかれの巻

かねて卯月ばかりは。東へくだり給まふべしと聞え給ふひとこのかみの。俄なることに。如月末か。彌生初には。

西の國より上り來給ふべし。然ば八郎も御供に參るべき。こゝろがまへ源氏物語心支度也急ぎ物せよと。仰下されたるに。父は勇しげなれど。宇須美は。人知れず悲しくなむなりける。かへが許へかう〳〵伊勢物語事迫ぬ。いかに成はつべきと聞え斯々なり事やりけるに。詮術なく万葉今云せんかたなくなりて。此うへは夜の紛にも忍出てて末はかたゐ食樣のものとも成果べきか。又いかなる淵河にも紛亡なむや。御心だに違給はずは。自はしかせむより。外の願は候はずと聞えけるに。男も唯ひとつ心に思定めける。母は此程打續きて。怪しき夢どもを見るにつけて。娘が痩せ衰へつゝ。物思ふ氣色の。たゞならず怪しくのみ思ひしかば。兄弟のあらける暇に。近く招きて言樣。などて何とてか此程は。いひも參らず。髮なども打亂して。只管に痩せ細り給ふぞ。こゝろひとつに籠めて。思迫ることには。よからぬ迷こそ。出來るものなれ。かゝる事の募には。親にも哀きめ古語めはむねといふ言なりを見せ。兄弟にも背き果る例どもは。數々の物語どもを讀ても。さとしたまふべきなり。若し思迫給ひしことあらば。死ぬに勝さりて重き事は。人の上には侍ず。親兄弟もかくてあれば。如何樣の事ありとも。悪しくは計給ふまじ。心にある事は包まで。此親に聞え給へと。懇にの給ふにぞ。眞袖万葉用袖なりを顔にあてゝ俯しに伏て。聲たつばかりに泣入つゝ。答古語あらへはあへなりも聞えぬを。母なほ心元ながりて。語何どての給はぬぞ。何事にまれ。親に隔給ふ事やはある。そも唐國の事は知ず。此大和の國に。神の生み播給ひしひとの數。さるもの將これ。已が世々伊勢物語參に自分ないふにて。所を異にし。家を異にして住むぞかし。かく多なかに。此嫗が娘とては。御身ひとりならずや。そこの親とては此嫗のみならずや。さる劣しき万葉親子の中も。幾千世かけて住べき此世にはあらず。殊に親と子は一世の契とこそ。佛ものたまひつれ。また世の中の常なき事は。若きも仇し野の草葉の露と消え老たるが又高砂墨のえの松と。世に榮え殘るならひも侍れば。此程の有樣を見るにつけて。何事も心がゝりにて。朝夕願奉る御佛に向ひては。ひと日も早く老の身を。佛の御國に迎給はれかしと願參らすなり。かゝる心弱さも世の味

氣無を。（万葉無味の字意にて口にいはれぬ義なり）身ひとつにせめおもふなりけりと。うち泣き〳〵聞え給ふにぞ。如何なる物の報かに。かゝる絆にかゝりて。（伊勢物語）親の御心を苦しめ參らする事よと思ふに。胸のみ迫て。いひ出む言葉もなくてあるに。兄の七郎家に歸り來て。こは何事にか親子泣きそぼち（日本紀そぼちは濡るゝ義なり）てや坐す。爰に七郎が申事を聞給へ。豫て宇須美とかれが中は。我も能く知りて侍り。八郎も亦よく知りて侍るを。態と知らぬ顏にて。今は世に榮え誇心募て。武士の道をも忘れ。已れに一度報ふべき事あれども。それをも掻遣。彼をも打投りて。ひと時も早く此處を立去む心構する事は。已れ赤心をもて（日本紀）なむ見おきつ。犬じもの（万葉犬の如きといふ意）八郎を。妹が親と敬はせむは。朽惜きことなれど。又若き者も思合たるを。情なく掻離さむも心なきに似たれば。已れ先になか人（媒）（借馬樂）をもて。云々聞え置けり。そが返言を待ての上にやつがれ（下官）（日本紀）又思定ぬる事あり。かへるも武士の家の娘なり。（遊行女婦）さふる子（万葉）樣の男見たらむ如。仇になる思はなれたまひそ。此家兄かくある間に。恥はえこそ興ふまじけれ。涙も押拭。髮も梳りて。（古語）氣色能母君に事奉れとぞ聞えける。さて八郎は仲人をもて聞えつるまゝに。態とすゞろげ（伊勢物語不應の意）なる顏して。こは思ひ依らぬ事をこそ承はれ。もとより七郎とは仇し間にもあらねば。彼が母をば我親と思ひ。我子をば初孫とも弟とも思ひ給はりて。是までは過しつれど。已は去年の師走。（万葉としはつるの略語知りたまふ如。七郎が太刀合に打勝。今は公の御いへの子となむなり）し上に。家もかく富榮つ。彼はたけむべ（武家）（日本紀）にこそあれ。頼參らする君もなく。飯ぼ（日本紀飯粒也）ひとつ我物とて持たるしりところもなし。しかは野伏山伏の（拾遺集山伏も野ふしもかくてこゝろ）みつ今はとねりのねやそゆかしき）類なり。さるを彼が妹を。我子のむかへめ（嫡女）（日本紀よめ也）とせむは。千曳の（磐石）いはと（日本紀）瓢をかけて。いづれか重きと測らむがごとし。たとへ天地は倒になすとも。（源氏物語）此事においてはうけひくまじ。歸りて七郎にしかのたまへとぞ。言放ける。仲人もさるものなりしかば。こは易からぬ事をうけ給はろ。何條事なき事を。おしてかく聞え參らせむ。御まなご（愛子）宇須美ぬしと。七郎の妹かへ未通女とは。去年より。密かにいひ契らひて。神に誓て。違はじと。書交し給へる事ともは聞しめさずや。先愛子の君を爰に召して。（万葉）いか

なるぞと御心をねぎし（古事記今たまへ）云吟味也給へといふに。八郎もだし（默止）もやらず。（万葉爰には今云もた）宇須美を呼び出し。汝七郎が妹と祈誓つるか。猶に申さずむば。此父が名の恥も出來べきと責けるまゝに。さる事けのする（奇）（末日本紀）ばかりも違はず。唯父の御哀みには。彼未通女を。我嫡女（しかたくにあたる）としてたうべよと詫ける。八郎大に怒りて。憎ものゝ業かな。己ひとり子（古語）にあらずは。はたぞち（殺）（若）（祝詞）せむずるものなり。さらば今速かに。離果べき文認ためて。かの許へ遣はすべし。さる心なくは。父また遠き國にも追遣む。（日本紀）いて〳〵。父と離る。妻とや離る。直に答へせよと責ける程に。父の詞の。いと恐ければ。悲とは思へど。祈誓たる印文を。爰には起請（なくまこの文にあつる）泣々卷込て。長く離果べしてふ文を。父が目のあたり（古語目前なり）に戰慄き〳〵搔認めて。奥に

みつあひによりてつけたる下紐の絶むと更に結ばざりしを（三ツ合の糸は三ツ組の糸なり田所万葉）

とあるを。此うへは詞なしとて。仲人は。そを懷中にして。退出けるとぞ。

西山物語卷之中終

西山物語卷之下

第一露の卷

仲人は彼の文を懐中にして。七郎親子が前に來り。覺し廻らすことまで。をさ〳〵打臭して源氏物語聞しかど。中々承引ず。そが上に云々のり誘りて。聞え給ふ故に。二人の君だちの。密に古語祈誓て坐する事どもを。申出て候ば。わご古語を呼出し。押てかくなむ書せて。祈誓文までも卷込させて。おこしたまひける。此上は下官も申言葉なければ。退出て候ふと語るに。母も七郎も氣色を變ければ。かへは次の一間に聞ゐて。やと聲をたてゝ泣伏ける。七郎妹を呼出して。これ見給へかゝる際には思迷て。甲斐なく朽惜き名をも。後の世に殘すものなり。心を一に極めて、親兄にも恥なかけ給そ。已れも思締て候ふ事の侍りと聞ゆるに。母も。男女の中は。因も離るゝも。ある習なれば。言む方なし。唯八郎が匂誇りて。貶めたるこそ堪え難う思給へらるれとて。胸痛くし給ふさま。七郎見て。しか思す旨は。刀自よりも下官こそ勝りて候へ。此事に於ては下官此程計おける事あり。如何計の事ありとも。必その際に至りて。驚き思召べからず。いかさまにも恥をとらざる樣に。計らひ仕らむとてしぞきぬ。源氏物語退さて俄に。湯あみ所を掃清め薬万豫てかくと調ひ置しにや。湯帷子和名抄今云ゆかた樣の物までも。新に縫ひ仕立たるを出し。妹に湯あみさせ。髮あげさせ。万葉髮あくるは男みる時の例さて白き絹の衣五ツをなむ着せて。上にひれなす木綿を被ぶらせ。領巾は上代女の冠り物今の綿帽子にあつる惣次夕飯にはゆふげ。酒などの事よく設よとなむ宣て。妹が手をとりかみくらに上坐紀日本誘据て。希人實まらうどざねとし。母に對て言ふ樣。知しめすごと家貧しくなりて後は。傳へ持ちたる杯。陶物語古文卷物の類までも。米黄金に替べきほどのものは。皆失ひ果にけり。唯韓鞍一具よろひ。延喜式唐席ふたひら。韓竈四具そなへ。珠の椀形三くち。延喜式椀こは父の惜み給

へる物よと思ひて。是迄は貯持て候しが。妹が一代の際の祝事に日本紀謀兼て此種々古語を母にも聞え參せて。此程代となしつるに。三十枚みそひらばかりの黄金を得て候ふまに〳〵。かゝる祝事に着むずる衣。くはへ持べき器樣の物までも。心構へし置り。さて申の刻ばかりにならば。七郎彼を跡追て。八郎が推て參るべしさる上にも否まは。再度此世にて此子が面。見給ふべしとな思給ひそといふを聞て。かへも家兄が心深きを押拜み祝詞て。かたじけなしと泣ける。さてしか宣給ふ如。心も清に定めてをり候へば。朽惜き振舞は見せ參らすまじといひつゝ。只今詠置たりしとみえて。一くさ書たるを。懐中より取出けるを見れば。源氏物語取出す也

色かはることの葉草にたまのをもいづれが露ときえであるべき

とあるを。母熟々と見て。涙をおさへながら。側なるふむでをとりて。筆

もしも世におくれて住まは露の身をいづれの草におきやたのまむ

と書付て。老の繰言には侍れど。我兄子ののたまひしごと。此子が名を松となむ告らざりしことの。今にては悔しく思なりと。のたまひながら

名をせめて松としよばゝ老の身も千とせの蔭にあえなむものをあえはあやかる。なり出所万葉

かくいふも心細は唯老の癖なり。さはいふものゝ。そこの跡追ておはさむからは。八郎も又。岩木にはあらじとなむ覺ゆれば。心強おぼせ。何とてさるかなしきめをば見せ參らせむ。今日は殊更吉日なりと。うらべ古部語の人も來て申せし。時も移るべき間早く祝事まうけたまへと切に伊勢物語聞え給ふに。惣治設たる夕飯を。いや饌日本紀正しく持出て備まいらせける。さて酒は三わたり度古語進參らせて。時にもなれば。七郎忙したてゝ。車にかき乘せけるに。よぼろ日丁本紀髮には。つごや樣の物迄も。それ〳〵偏古語置ぬれば。嫐て押立て出むとす。母送出て。門邊にしばし立居つゝ。とはかしのものに用う時計源氏物語眺出して。その儘戸の閾に打伏して。泣入給けるを。こはかゝる祝事に。いま〳〵しき忌々源氏物語御涙かなと。勵た

てゝ。惣治が肩にかけて掻入れ參らせける。さて八郎は己が心のまに〳〵。離り文（袋には去は書せしかと。かくて置かば。顧慮とや思ひけむ。東の京朱雀遣よに從弟のありけるが許へ。人ふたり添て。さきに早や遣しける。七郎はかかりしとも知らず。日頃に變たる立出して。つとすのこ（簀子）に登に八郎大に驚き。こは何條事かし構たまふ。よも此方へまうで給にてはあらじ。かゝる姿はめとり（裹）宮の祝事（語）にて侍らむ。何方の嫡女となりて坐するや。扨も俄の事なりと。佗し振てよそがま聞ゆるに。七郎聞て。いなこは。是の若子の嫡女に。參らせむとてこそ。跡追來つれといふ。こは思寄ね。さきに中だちの人に聞え參らせしを。如何にとか聞取り給ふ。殊更宇須美も從兄許つかはしたれば。今はこれにもあらず。そはさまれ夫はさも（然）心得もなきに。押て斯く物し給ふこそ最憎けれ。此方とあらば。幾度宣給ふとも。しか答參らするより。外はなしと聞ゆるに。七郎いや正しくして言ひける樣は。宣給ふ如。理なきにもあらねど。既に妹なるかへ。其處の愛子と。知給ふごと祈誓たり。何條事無に。押して父の御心をもて。返し給ひつる。先かへが罪承はらむずる迄は。此文は得こそ。受引まじけれとて。袖より取出て投返したるに。八郎氣色を變て謂へらく。既に父母の心に背ける妻を離は。太夫の道なりてふことは。知り給はずやと聞ゆるに。七郎。假令さあるも。一日も此家に住て。其處には事參らせず。何の御つかへを見て。心に叶はずとは宣給ふなりと應ふに。八郎言む言葉なく。兎へば角いふとはそこの事なり。何にまれ受引まじ。早く跡追て返へり給へと聞ゆるに。七郎色を變て。斯く道理に當事も否みたまふからは。何の耳に何の口をもて。辨別聞え申さむ。そこと既に確守參らせし事あり。よも忘れ給はじ。又我太刀のゆくりなく（意の義）日本紀不折たりし事をば。何とか見給ひき。そは言ふ可からず。殊更宇須美ぬしは一子に坐せり。かへ亦我一人の妹なり。生とし生るもの。憐みの心無らむや。此上は假令理なき事なりとも。恤と思ふ心ひとつをもて。萬受引給べかし。七郎斯く腰折りて申からは。此上は一言の御答によりて。かへも生ては返らふまじけれ。さる騷（蕪）万も出來ば。そこの御爲にも良からじ。心を潛て答給へ。承はらむと聞ゆるに。八郎頭を打振りて己先に何事

を聞え置つるか。事の繁に打忘侍る。あな囂（しましし）のことや。何時迄宣給ふとも受引まじと言捨て。其席を起むとするを見て。かへも今はと思氣色見えければいでや八郎よ。其處にありて此丈夫が振舞事を見給へやと。男健に叫ながら。かへが衣の襟緊と（蕪万）掴み。引寄つゝ仰様（竹取物語）に押へ。太刀を拔きてたか胸先を刺す。（古事記）八郎驚き起て。然計とは思はざりしとて。その柄を止とす。七郎背をかへし八郎を睥み（古語）て謂へらく。汝が犬じもの心をもてかく果敢なき目を見するなり。此太刀の乾かざる間に。はたゝち捨む事はいと易かれど。我母長痛着にかゝりし時。汝。人の心をもて看病くれつる禮に。命は汝が物となして。退歸らむするよと言つゝ。二度三度刺ほどに。ほそちなして（熟瓜如。古事記瓜の蔓はなれのごとく也）死にいりぬ。形はころぶす（臥倒）万まゝに捨置て。此うへは始終うたえの（謡）御庭に申さむとて出ける八郎起を遲みとかへが空しき屍を抱て涙はふりおちて（落後）（古事記）暫時ありて謂らく。扨も敢なかりける事よ。此八郎を鬼とな思召しつらむ。獸となる事は。始より知つ。素より能間なり。殊更七郎には。一度物の報すべき事の侍れば希に迎奉り母君をば親と。思召しつらめ。魂もし體を放給はずは。八郎が申事を。耳に止めて十が一も。恨を晴け給へよ。御身宇須美と氣色あ崇まへ參らせむと思ひ居つるに。不意なくゆふうら（夕占）万葉（者なり）の者入來りしにそこと宇須美が間。占なはせ候ふに。熟々陰陽の相をかうがへみて。言るは。此間大いに良からず。若し逢ときは。二人ともに命あらず。又離てすら。何か片片の命は極たり。是迄。多くの人の間を考がへ見つれども。かゝる奇しき惡き御中は侍らず。早く避離給はずは。禍來るべしと。言教侍に。驚き。然にても。思設けし事なれば。天地に祈り返しても。添參らせたく。その後四度まで占を問ふに。皆初聞つる詞の如し。さるは力なし。如何に離るべき術あらむと。心を苦しめ。夜に日に思廻らせしかど。隙間なき間（源氏物語御中をしかけり）と見つれば心の外にそこの家と。我先離べき振舞を見せけるなり。こは心なき業なれど。人として子を思ふは夜の鶴にも劣めや。まして鹿子じもの一人子（万葉鹿は子ひとつをうむ物故に冠らすことゝす）にてなむあれば。宇須美が身に報來たらむ事を思ひ恐て忘るゝ時なかりしに。かゝる事に成行しは。御身その占の祥に當り給ふとな

む。思ひ晴け給ひてよ。又此事を打明して聞ゆべうも思ひしかど。七郎中々はふりこ祝部主なり万葉神様の詞を。聞得べき人に非ず。しかは我しれもの愚者万葉なりと。冒笑むも面なしと思ひて。態と心なく振舞てし。猶此上にもかゝりしてふ斯々ありしことは。我ならで知る人もあらねば。愈々万葉今いよ〳〵也母君兄君とは疎もなり果む。然して此騒を慎めて後。亡後をば懇切に吊ひて参らせむ。唯返す〴〵も今はの際に。心なしと思召締給ひつらむが。面なく悲しきとて。聲を放て泣けり。さるあひだに。人騒ぎ立て。入來る音するに。さらぬ振舞に持成て。亡後を搔繕ひつゝ。一間に休らひ居けり。時しも今日は西山の僧都を迎へて。月並の祈を。申させてありつるときなるに。此僧都仁王經を讀止て。事の始終あはやと聞居しが。七郎が振舞を見るより。膽魂を失なひ。御經をば火桶のなかに搔落。己れは沓も穿で。其處此處となく逃出しが。西山の此方彼方を。日の暮るゝ際。万葉いゆきもとほりて。万葉行戻る也漸く心地づきて。院に歸りしを見れば。深くしもとはら原日本紀しもとはにや紛入けむ。裳の裾もころもでも。唯まよひにまよはし。脚にはくそひぢりこ泥祝詞などを踏付けて。目は白目勝になり竹取物語顔は唯さあを青万葉になりて。その後四日五日。物も得食で。病臥給ひけるとぞいひし。

第二よみの巻

かくて。公の御諚事果て。如月にもなりけり。

さきだたぬくひの八千度かなしきは流るゝ水のかへり來ぬなり古今六帖机恠の詞を掛合ふてよめるなり

これはその頃。母の詠ける歌とて。人の物語らひける。扨八郎は嬾て。守の御供にて退下るべくしけるに。宇須美その後は頭も上で煩つゝ。身は朝かげ万葉翌たるをたとへていふの如になむなるに。遠き國にみちたち日本紀旅せむことも顧慮ければ。愈果までは。此家に殘し置べしと心構しけり。されど此家に起臥ては。種々思ひ出る事も多く侍り。如何なる

山里にも立離れたる所に。靜にてあらむは。此上の願になむ侍と聞ゆるに。兎も角も迚。さるべきくすし古語又よく扶け見とるべきおふなどもを。三人四人つけて。紀伊の郡深草の里に。靜なる庵購て。引移しけり。さて彌生にもなれば。八郎は東へ下にけり。宇須美は唯果敢なく敢なかりし。別をのみ忘るゝ時なく。奥床に万葉ひとはしら日本紀一體といふ義の御佛を据奉り。さて亡人の法の名を。その佛の御胸に書付て。朝夕花を奉り水を奉り。今は一時も早く。天路にまれ。万葉黄泉にまれ。万葉坐さむ所へ参りて。ひとつ蓮の臺とやらむに。住はてむ願をのみぞ立ける。家は野邊近き古今集野邊ちかく家居しをれは鶯の啼なる聲を朝な〳〵きく處にて。水の音も清く。心もすみ渡るに。細小叢竹吹風も。万葉我宿のいさゝむら竹ふく風の音のかそけき此夕かも○いさゝは小也柄最物哀なり。庭の面は搔拂はねば。春の草漸生出て。それと知らぬ花どもの綻出たるに。水せき入し岸根には。山吹咲萎て。妻こひそむる蛙の聲などもいと近し。万葉かはづなく神なひ河に影みえていまやさくらむやまふきのはな集古今花いけに挿て。古今集露打などして送けるを。床の前に据置りて。入相の鐘の聲の遠く響來るも。ありし西山の寺〴〵にやあるらむなど。思出るさへ墓なく。いと悲し。とばかり庭に立出て見れば。煙あへる森のうちに。鶯の啼けるを。

春の野に霞棚びきうらがなし此夕ぐれにうぐひす啼くもうらかなしは心かなしなし万葉

晝はまだいと長閑くて。春の光はやぶし分ずさし渡れど古今集春のひかりやぶしわかねば石何の心もなければ。唯青き雲に打向ひて。ひねもす終日伊勢物語空眺するに。

うら〳〵と照れる春日にひばりあがりこゝろかなしもひとりしおもへばうら〳〵は今云万葉

とも思ひ居りける。友垣語古のもとより初櫻の枝をはなかめ瓶今いふ花いけに挿て。古今集露打などして送けるを。床の前に据置て。熟々と見るにさへ。なきて別れ。し人ぞ戀しき。後撰集櫻花雨にぬれたる顔みればなきてわかれし人ぞこひしき

事するとて。文の端に書付て遣けける。

深草の野邊のさくらし心あらば今年ばかりはすみぞめにさけ古今集

ともによひ出ける。扨友達の許へ返り

彌生にもなれば。三十餘五日の御法。四十まり九日の御法なども。世の人聞ならむ樣に。心遣して。さる山寺を頼み。石の塔玉垣樣の事までも。云々聞え遣て。内には親しき尼達二人三人にて。靜に法華經をなむ。千卷讀たてて。供養し奉らむとぞ誓ける。さて母人なむ如何に坐すらむと。心去らず萬葉 思へど。世の誌にあひて。今は離果ぬれば。密に便せむ樣もなし。漸く夏にもなれば。庭の草木いと闇なりて。日はこと更暮難きに。その事なく物悲しくて。伊勢物語 暮れがたき夏の日くらしな詮術なき時は。程も遠からねば。彼住ひける家に行て見れど。有し事どものこと。更に思出るまゝに。悲しくて出て行に。七郎が住なる門邊を。夕暮の人間に紛れて源氏物語 過來しみれば。人ありとも見えず。打靜まりたる古家の。門には萩生ひ登り。軒には忍草打繁りて。卯月ばかりの若楓のみぞ。折る人もなければ。所得顔に廣ごりたり。彼時雨降り出し群紅葉の頃をしも。唯今の樣になむ思出らる。さて庭樣の所には。石など壘上げて。小さき山ども築き列たるは。かの母の痛着を慰參らせむとて。亡人として設たりしよ。又栗柿の若秧。萬葉 梅桃のみづえ萬葉 わかはへの枝なりなども。根堀て古事記 植し事も侍しなど思ふに。心噫つゝ涙の止まらぬに。萬葉 わきもこが植し梅の木見ることに心むせつゝ涙しながる

妹としてふたりつくりしわか庭はこだかくしげく成にけるかも萬葉

と懷紙に。柄短かき筆して書付て。源氏物語 物の枝につけて過ける。こを母見給はゞ。殊に泣給はむ。深草にかへりても。猶さる心一になむ責られて。煩ける。時鳥の啼て過ければ。

ほとゝぎす啼こゑきけば別れにし古郷さへぞ戀しかりける古今集

その後又痛く煩臥して。皐月水無葉萬 は唯夢の樣になむ明し暮程に。秋にもなりけり。漸く涼しき風吹出て。月の影も淸くなるに。少し人心地出來て。夜ばかりは迫て起あがりつゝ。深沈なる火掻照して。歌物語など讀に。我如物思ける人も。昔より多かりき。さて寢られぬまゝに。

秋の夜のあくるもしらず啼くむしは我ごと物やかなしかるらむ古今集

今宵はけに思出つゝ。唯涙の流るゝに。御經一卷讀奉らむと。思ひつゝ奥床を見れは。蟲などの仕けむ。御燈火二昇 處まて消たり。尼たちも斟合せて源氏物語 臥給へるに。火を打出して古事記 御燈火を照らし。提婆品といふ御卷を。心靜に讀居ける。扨悟の道には。男女の相なしてふ事を。わだつみの神の娘萬葉 女なり に說給ひし所にいたりて。燈又二所ながら暗くなるに。御經を讀止て立て捧むとすれば。火は其まゝに照。さてよといふ聲す。さて見れば白き衣を身に引纏たる未通女の。頭の髮はいと黑くて。俯伏に伏居たり。しか宣給ふは誰ぞや。いと闇きにといふに。忘草の種をば。早くも御心に蒔せ給へるなりとて。古今集 今はとてわするゝ草の種を細やかなる頭を擧たるを見るより。現なく心踊りて。空蟬の世語 にある人と。思迷ける程に。こは仇しめきたる御振舞かな。先此程は何處にや行給つる。御文も聞えずといふに。さればよ今往て侍國は。穢のみ多て。人の便とてはなき所なれば。心の外に隔たり參らせしぞ。さる所へは何しに參り給ひつる。聞れば。暫時潸々と打泣て。御傍を離れて。何の心をもてか參るべき。兄なりける七郎。我胸を摑へて。何事も願は叶はず。早く退出よと。氷なす劔を拔て。我を追ひ放程に。倒になると覺えしが。いと闇き國に出づる。さてその國の恐しき事限なし。身は消もやらで。雪氷に閉られて起臥時もあり。或は又けしからぬ鬼獸の集來て。身を斷々に食ひ裂るゝ時もあり。まして双語古 にかゝりて亡しものは。垂氷を空樣に植なみたる如き劔の林を。牛馬の面なす醜女共の日本紀 黑鐵の策をあげて追ふに。詮術なければ。走登り走下る事屢々なり。かゝる苦しさは。此國にては見も聞もせねど。少しの隙にも立歸り來て。戀しき人の顏形を見る時は。さる苦しさも打忘。又その人の御手より。水をたうべ。花をたうべ。或は戀しとも床しとも。心に思ひ詞に述給はるを。影の如くに。付添て承はるときは。彼劔を踏炎に焦。雪に凍。鬼に食ひ苛責るゝ樂 苦しさも。此嬉しさに引返つゝ。思たまへらるれ。もし何時迄もかく相見と思召ば。必ず佛の道に入て悟

心にな返し給ひそ。たとへ御身を墨染になし給ふとも。御心だに晴やらずは。戀しとも思す御心に付て。幾度も幻の中に。ありし姿を見せ奉らむといひつゝ。寄添ぬ。男いと嬉しくて。さる事とも知らで。その闇く恐しき國に。御伴も申さず。獨さすらはせ祝詞さまよふなり參らせし事の悔しさよ。かく通ひ來給ふには。程も遠かるべし。その時だに知らは御車にても參らせむ。願はくはさる恐しき國には歸り坐さで。何時迄も爰に留給へ。兄君へは如何樣にも取なし聞え奉らむといふに。又打泣て。さ現心なく坐るを見につけて。痛いたう悲しくなむ今聞え參らせし如。日に千度夜に百度。假令御夢のうちにても。戀しとさへ思召ば。その御心ぞよき迎の御車なり。たとへ炎の中に候ふとも。さる度毎にはあり通つゝ。万葉つばさなしありがよひつゝ見る らめと人こそしらぬ松はしるらむ 御心に添奉らむ。返へす〳〵吾を憐と思召ば。御心の悟を開給ふな。又御心の悟だち給ふ時は。我返り來べき便なし。さる時ぞ長き御別と知り給へ。さてかく申すうちに。黄泉の大王の待せ給ふとて。したべのつかひ泉下の使なり の來たち呼ふ聲すなり。万葉今は歸りなむ。明日の夜又人をしづまらせて古語人を震させてなり 爰に待たまはゞ。迷ひ來て契ひ參らすべしと。すこ〳〵と立て行と見れば。煙の樣になむ消亡けり。こは何處に行ぞ。恐しき國には何ぞ歸るなる。我跡追て万葉伴なり 參らせむ。やよや古今集 待せ給へと。呼ひて駈行むとするに。看病居けるおふなども老女とは夢見給ふか。いと物狂はしと。つとよりて袖袂をとるに。扨は夢なりしかと。思へど思へど。物の正しかりしに。いとゝ戀しさの立勝て。搔穿れども手にも觸ねばと。獨言つゝ臥けるとなり。万葉夢のあひはく

るしかりけり露きてかきさくれとも手にもふれねはは

第二　ほきの卷

惣治熟々思ける樣。我姉なる刀自の。敢なく亡し事も。全く八郎が心の劔を。兄が手に貸して。かく計はせたるなり。兄七郎は親に事る心の深きより發りて。太刀合にも恥を得。將恨の一太刀をも報ざりしが。我にしては姉が

恨を。八郎に報ずは非じと。心振發し万葉思けれど。母に聞え奉らば。中々受引給ふまじと。密かに兄七郎に向ひてなむ。云々思立ぬる間。暫時のうち東へまかり下べき。御暇を賜はれとぞ言ける。七郎これを聞て。そこにしては理あるに似たれど。大なる道をもて是をいふ時は。露計も當らず。そこの八郎に恨を報むと聞ゆるは私なり。吾萬八郎に負て。剩さへ堪難き恨も。報ずといふは。親を重ずるなれば。これ公なり。なぞやそれ私の怒をもて。天が下の道を。破らむやと敎ければ。宜々と應へて。思止まりにけり。さて匿たる從古語 あらはれたるはなしと。異國のまらを夫も宣給ひけるが如。七郎が匿し勢ひ。四方八裏よもやもに聞え渡れりける。さて八郎は黄金千枚を出して。寺をたて經ををさめ。亡人の奥津城には。万葉石を疊み珠を鏤。そがうへに飢凍たる者には。米を與へ布を與へ。例なき御法を盡しける。此故にや。宇須美病怠たり果て。清々しくなりにけり。又始終をよく知りたる人の。八郎が心なく聞えけるは云々の故よしある事どもなりしと。七郎親子にも聞えければ。扨は定まれるすくせ宿世源氏物語なりけるものなりし。然も知らで恨つる事の悔しさとて。交元のごとくなりにけり。されば七郎が隱たりし光。終に昇る日のごとくなりしかば。西東北南の國の守より。我家の子にせむ。彼侍士人にせむと。馬を走せ。車を上せ。て迎給しかど。七郎嘗て受引ざりしかば。しからば母を養奉るべき料にとて。遠近國の守より黄金白銀。太刀卷物まで。よき使をもて送たうびし程に。今は並なき幸の人となりて。その子孫までも。豐く富榮え侍りしとかや。こは中つ代にありし事よとて。人の語らひける。

近江縣物語

近江縣物語序

ひとゝせ近江國にまかりて。月ごろとゞまりをりけるに。山里ながら。小家たちならびて。とひくる人すくなからす。をりから。秋雨しめやかにふりて。さう〳〵しかりければ。旅のあはれも例ならず。おぼへゐたるに。ひと〳〵いりきて。うちかたらふ。いづれも〳〵。こちなくかたはなることのみ。さへつりいふめれば。きゝいるべうもあらぬなかに。いと〳〵神さびたる翁の。あくびうちして。かたへによりゐて。かくいひ〳〵のはて〳〵は。とうちずしたるが。何となくはづかしげなれば。なにごともみなわすれて侍り。その中に。むかし此國のあがたにおはしける人の。御どてか。とし老くちて侍れば。翁のわたりにこそ。興ある物語は侍るめれ。すこしのたまはせよ。といへばなみつから書のこし給へるふみとて。ちかき比まで。あたり近きみてらにこそ。つたへて侍りしか。このてらやけてのちは。かたはしをだに。聞しれる人も侍らず。たゞ翁のみ。そのしさいはしりて侍りといふ。うちきくよりわりなうゆかしさそひて。さしよりて。そゞのかせば。翁すけみたるくちひゞらかして。かの雲林院の菩提講に。まゐりあへりし。翁どもの。まねびせんも。かたはらいたく。をこがましけれど。御とぎにさふらひて。くちふたげてあらんも。ふようにゝ侍るめれば。といひつゝ。柿しぶにそめたるうちは。ふた〳〵とうちつかひて。そも〳〵。とわなゝかし出たる。かれ聲にて。しはぶきがちなるも。古代なる物から。さすがに。ふた〳〵とりところあるこゝちすめれば。やがて。ふところ紙とうでゝ。だみことのまゝに。しるしつけつ。このごろ。なにがしのあるじ來りて。めづらかなる物語。かきつゞりあたへてよとこふ。ことさらに筆とらんも。物うくて。此ふみとりいでゝつかはしつ。いかにきゝひがめたるあやまりどもおほかりなんかし

六　樹園

近江縣物語目錄

第一 ふなをか

此卷は藤原の季光が妻初瀨に祈て子を設けるに。其子はかなく成ければ。葬送しけるに。乞食の來て。墓をほりうがちける時。其子よみがへりけるを。旅人來逢て乞食をなやましし。子をひろひてとり行しことをしるす

第二 せいがいは

此卷は藤原保轉。同齊光。强盜となりしおこりより。橘安世が弟子坂上梅丸。藝能いみじかりければ。婿にせんといふを。同弟子なる常人といふ者ねたみて。さまざまの姦計を用ひたるにより。梅丸亡命して。遠江國に下らんとする迄をしるす

第三 すのまた川

此卷は梅丸すのまた川に泊りけるに。盜人なりとて。人に恥かしめられしを。こらへ忍びゐたるに。嵯峨の左衞門といふ者。感じて引つれて。尾張へ下ることをしるす

第四 草まくら

此卷は橘安世が家。盜賊入來て。狼藉に及び。娘蘭生をうばひゆく事より。嵯峨の左衞門。梅丸を養子となし。都へ出たゝせやる事。梅丸途中。ぬす人の家に泊りて。安世が家の婢をたすけて。常人が惡事をはじめてしる事

第五 山のとね

此卷は夜叉丸といふぬすびと。蘭生を妻にせんとして。蘭生がはかりごとにおちいる事。梅丸法師の命をすくひ共に都にのぼりゆく事をしるす

第六 ひはぎのうひ山ぶみ

此卷は常人盜賊に降參して。山だちとなり。盜賊共を欺て。かへりて恥辱に及び風呂の湯をたく事迄をしるす

第七 いもかしら

此卷は常人。金剛二郎といふ盜人の案內して叔父の家に入て。物ぬすまんとしてからめられ。さて命たすけられて。金剛がもとを逃出て。近江なる。安世が家に歸りきて財あまた掘いだしそこのぬしとなる事をしるす

第八 袋のうば

此卷は盜賊うばひ取し女ばうをやす川にて。ひさき賣る時。常人梅丸。ともに蘭生を買とらんとて。來りてあらぬ物を求めて歸る事。又梅丸嫗がすゝめにて。蘭生を買とり。家に歸りける夜。盜人入來て。蘭生をつれゆかんとせし所へ。安世來あひてとりかへし。梅丸に對めんする迄をしるす

第九 石山寺

此卷は安世梅丸をともなひて。賴光朝臣に。目みへさせける時。梅丸。飛鳥を射て落す事。それより保昌のもとに行て。盜賊退治せんとて。出陣する事

第十 田村將軍

此卷は保昌。近江なる齊明を。ほろぼす。梅丸智計の事。梅丸常人が家に至りて。田樂を舞。安世が軍代の貨とせる鎧をとり返す事

第十一　うどんげ

此卷は嵯峨左衛門。伊勢の國なる。袴垂が陣に向ひて賊營を燒事。頼光の館にて父子對面の事。西念法師物語の事。梅丸近江掾に成て。子孫繁昌せる事

近江縣物語目錄終

近江縣物語卷之一

○ふなをか

今は昔村上の御時。藤原の季光といふ人有けり。白河のほとりに。家ゐつくりて住けり。兄は源の滿仲あそんにつかへて。仲光とぞいひける。此季光弓馬の道にかしこく。智勇兼備へしことは。兄仲光にも。おとらざりけり。常に子のなき事を。愁ひ思ひけるが妻なりけるもの。思ひおこして。忍びて初瀬にまうでゝ。なげき祈りける。願文御燈などたてまつりて。御佛の右の方なる局に入て。終夜誦經して。曉のころしばしまどろみぬとおもふほど。あたりまばゆきまで。かゞやきわたりければ驚て見あげたるに。たふとき法師の幼き兒をかき抱き。立おはして。此みどり子給ふなり。されど育てん事かたかるべし。養はれんことは安かりなん。とのたまふ。妻此ことのいぶかしければ。猶問奉らんとするほど。雲霧のはるゝやうに。見えずなり給ひぬ。さて目さめて感涙とゞめあへず。山をくだりて。京に歸りつきぬ。日數ふるほどに。身たゞならず成て。あたる月といふに。やすらかに子をうみつ。男子にしも有ければ。季光よろこぶこと。おほかたならず。親族の限り。つどひ來てよろこびいはひ。かしましき迄。どよみさわぐ。この子みめすぐれてよかりければ。愛丸と名づけて。夫婦手のうちなる玉のごとく。思ひいつくしみ。なで養ひけり。ほどなく一年の日數たちて。愛丸誕生の日に成ぬ季光うるせき心より。愛丸がもてあそぶ調度は。もとよりにて。笏文房の具など。ならべ置て愛丸を。中にすゑて。いづれをか取と。うち守りゐけるに。愛丸ゐさりて。笏を取て喜て放さず。季光うち見て。此兒百玩の雜器にめをかけず。笏を取たるは。ゆくすゑ我家の榮え見すべき兆なりとて。大きによろこびて。卽宴席を設て。うちあげ祝ひける。これより愛丸。かた時笏を放さず。ひゝな。ふりつ

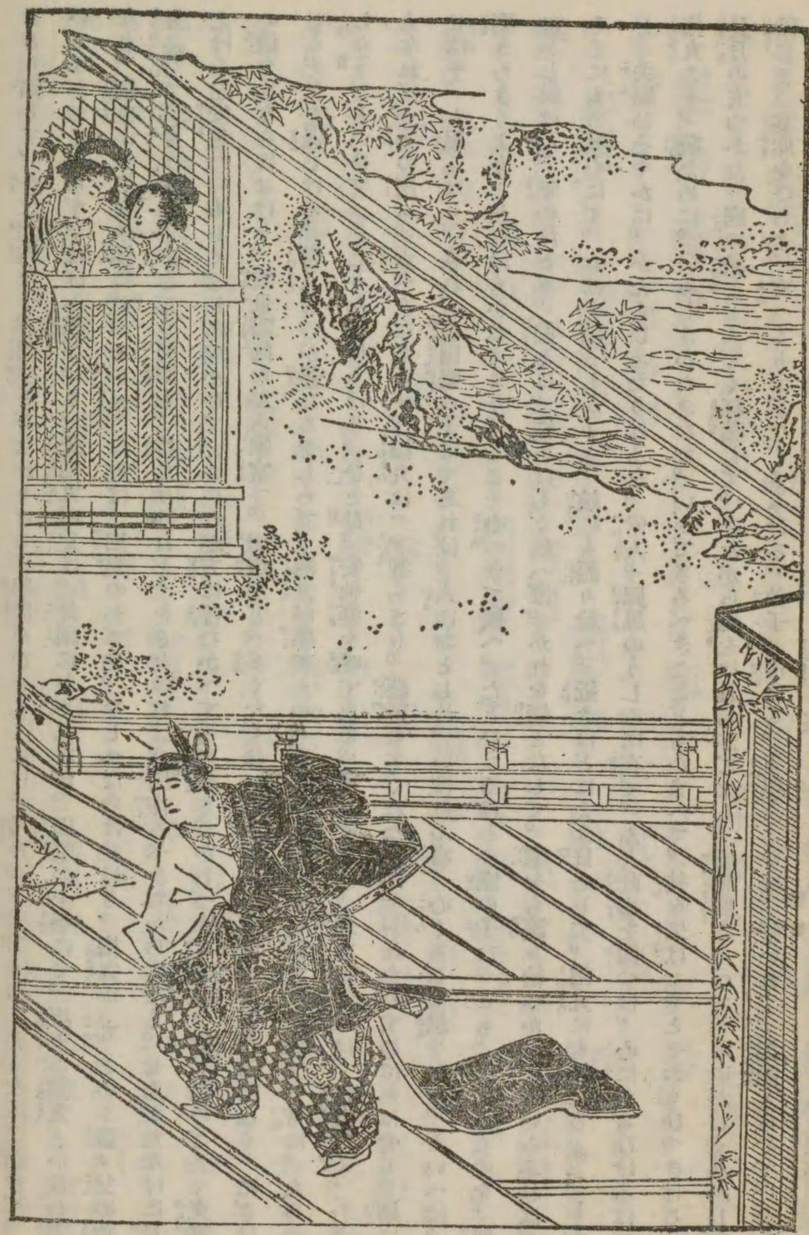
づみなどは。手にだにとらず。ひたすら笏を取てぞ遊びける。うまれつき。さとくかしこかりければ。乳母なども。いみじき物に思ひて。もてはやしけり。其年も暮て。愛丸三といふとしに成けるに。思ひかけず。痘瘡を病てくるしみける。顔などには。さまで其しるしも。あらはれされど。身あつく。堪がたげに見ゆ。父母あわて。おどろきて。醫師請じて。藥をこひ。讀經はらへなど。さま〳〵にし。あつかひけれど。かひなくて。五日ばかり過して。午の時比にはかなく成りぬ。父はあまりの事に。涙だにこぼさで。あきれゐたり。母はなきからにひし〳〵と抱つきて。かきくどきてなく。家のうち老少となく。聲を擧て。ひとつに泣あひたり。季光しばしためらひて。目うちたゝきて云けるは。今はかひなし。むなしきから(骸)を守りをらんは。なか〳〵に。胸ふたがるわざなれば。とく葬送の用意すべし。彼が衣服玩器の類。いさゝか留めおくべからず。金銀珠玉の類なりとも。彼が手に觸たらんかぎりは。悉棺にをさめて。葬り物せよといふ。妻こよひ。のべにおくらんは。あまりに俄なり。あすこそといへど。夫頭うちふりて。いな。死けるものよと思ひて。しばしもかたへに添をらんは。腸を斷つ思ひすれば。とく出したてよといふ。家の長をさなど。かたのごとく用意して。その日の暮がたに。船岡のあたりに。舁ゆきて。うづめ葬けり。世の中をなにたとへん。と順あそんの讀たりしも。かゝる時にこそ。といひて。父母はさらなり。親族の人々みなひと所にこぞりゐて。顔におほひたる袖。引はなつ人だになし。さるにても。初瀨の觀音の。夢にさへ入給ひて。などてかく。命みじかきものを。授させたまひけるにか。諾こそ。育んこと。かたかるべし。とのたまひしは。あらかじめ。死うせなんことを。告給ひつるなれさるを心もえず。日を過しける。をさなさよとて。母はうつし心(現)もなく。泣まどひて。絶入る事度々なり。父も今は人まじはりせんもものうし。つかへ(致仕)をかへして。心やすき山里に。かきこもりてん。などいふを。したしき人々さま〴〵にいさめ。こしらへけれど。やらん方なき悲しさの。日々にいやまさりぬゝぞ。げにわりなき心の。闇とはしられける。此舟岡山といへるは。亡人を。をさめ葬る所にて。さびしく物すごきゝ

たりにて。晝だに人げまれなれば。まして夜に入ては。ゆきゝするものもなし。何となき。木草の露さへ。こと所には似ず。きらめきわたり。木ぶかき松の風は。野寺の鐘にひゞきをあらそふ。天狗こだまなどいふ物も。かゝるあたりにこそ。ところえて住わたるべかンめれ。いと〳〵物おそろしく。うとましげなるさかひなり。此日宵やみの。をぐらきに。垢つき。破れたる衣に。蓬まとひたる乞食の。鍬うちかたげ出きたりて。そこら打見まはしつゝ。季光が子を葬たる。塚のもとに來りて。鍬とりて。うがちほる。とかくして掘あばきて。土かきよけて。棺の蓋をひらき。衣服調度など。とり出して包につゝみて。持ゆかんとせしが。をさな子の死骸の腰に。何やらん物の見ゆれば。さるべき寶にこそとて。たちよりて。ひきぬかんとするに。世にはおもはずなる事にそありけれ。兒が死骸ふたゝび息出て。聲をあげて。泣出しぬ。しやつ。甦けるにこそ。うちころしてくれんずとて。鍬ふりあげて立かゝりけるに。いかにしけん。かたはらなる石に。つまづきて。のけざまに。ころびたふれぬ。こはくちをしとて。ふたゝび。起あがらんとする時。あなたより。松ともしてくる人あり。見つけられなば。あしかりなんとて。高ばひにはひて。森の中に入て伺ひをるに。旅人と見えて。菅笠きて。太刀横たへ脛高くかゝげたる男の。松ふりつゝ。きたるが。包のすてあるを見て。驚て。頭うちかたむけて立ゐたるほど此兒。しきりに。泣出しければ。又これに驚て。松てらして。塚穴を覗見て。やがて。手さしのべて。兒を抱きとりけるに。いよ〳〵頻に泣ければ。しわびて。ふところにおしくくみつ。かたゐは。いかにするにかと。あからめもせず。まもりをれば。此旅人。かの包を背におひて。立あがるにぞ。かたゐ大にあわてゝ。森をはしり出て。包に手をかけて。ひきければ。旅人は。のけざまにかへりぬ。此時手に持たる松をなげすてければ。火きえて。あやめも見えず。旅人。ぬすびとござんなれとて。起あがりけれど。くらくてさだかに見えず。かたゐ兒のなく聲をしるべにねらひよりて。旅人が腰かいつかみて。投んとす。旅人とく身をひらきてければ。乞食はうつぶしにたふれぬ。旅人兒をふところより出して。樹の根にすゑ置て。さぐりよりて。かた

ゐをとらへんとす。乞食は。ころびたる所に。鍬の有けるを取て。兒がなく聲を。めあてに。樹ある方により來て旅人の頭と。おもふあたりを。てうどうつ。あまりに高く。ふりあげて打ければ。此鍬兒にもあたらず。いたづらに樹の片枝を裂をりつ。旅人此音を聞より。えたりやおうとさけびて。左の手をのべて。乞食が腰かいつかみ。右の手にえりをとらへて。かいふつて投ければ。ふた〳〵と成て。彼塚穴の中へおち入ぬ。かたゐはなえ〳〵。くた〳〵となりて。起あがるべくもあらず。旅人は。かたゐをもしらず。又かの兒を。ふところにおしいれ。包脊に負て。大聲に云けるは。ちからわざ。はやわざなど。きしろひ爭はんには。おのれらにまくべきかは。無慙のぬすびとやつめと。あざけりわらひて。啼いる兒の。脊うちたゝきつゝ。がごぜ〳〵と。いひ〳〵て。のどかにあゆみてぞ。過ゆきける。乞食は。塚穴に。投いれられて。棺の角にて。腰を打さきて。しばし絶入けるが。やう〳〵。人こゝちつきて。穴をはひ出て見るに。有し包もなく。兒も旅人も。いづちいにけん。見えず。さるにても。かやつ。腰刀をば。いかで拔かざりけん。ぬきたらんには。まふたつにこそ。せられめ。いかなれば。身のかろき事。飛鳥のごとく。力さへつよかりし。世にはおそろしき者こそ。ありけれと。舌をふるひつゝ。猶おとしたる物もぞあると。そこらさぐり見れど。竹にて作りたる。弓鉾。又は紙にて作りたる。鼓。人形など。棺の底に。のこりたるのみにて。錢にかふべき物もなければ。かしらかきて立あがらんとするに。腰をつよくうちをりければ。立あがる事。かなはず。兒があしだの二のこりたるを。左右の手に持て。ゐざりばひにはひて。おのがすみかをさしてぞ。行ける。そも此旅人。いかなる者にて。かくあやふき所に。來あひて。兒をたすけけるにか。又此兒がゆくすゑ。いかにおひたちぬらん。おまへたち。くはしきゆゑよしを。さぐりしらんとならば。のどかに。すぎ〳〵の卷を。ひらきて。御覽じしり給へかし。

○せいがいは

さても其後。花山院の御代にあたりて。藤原の保輔といふ者ありけり。左京太夫致忠の四男にて。保昌あそんの弟なりけり。又右兵衞尉齊明といふ者あり。是は保昌あそんの兄齊光が子にてぞ有ける。此兩人。ちからつよきのみならず。横ざまなる事をほしいまゝになして。人を殺し。財を奪ふ事などを。常としければ保昌あそん。天祿の初めに。公家へ奏聞を經て。兩人とも勘當して。追やらはれけり。それより兩人かたらひあはせて。盜賊の大將と成て。數多の賊をしたがへ。都鄙をいはず。白晝にも。おし入て人の物を奪けり。後々は。勢つきて。五六百騎引つれて。甲冑を着。弓矢鉾など。携へて。あゆみつれたるさま。さながら武將の。追討使。蒙りて。よそほしく。出たち給へるに異ならず。この賊等。國々におしわたり。國司を追出し官物をおしとり。民家の美女を奪ひ。あるは寺社を燒はらひなどして狼藉いふ計なく。振廻ければ。公家より官兵をつかはし是を責給へども。はか〴〵しき事なく。かへりて。賊徒の爲に。兵器を奪れ。あかはだかに成て逃歸る者のみぞ多かりける此保輔があざ名を袴だれとよびて其比の人。いたく怖おそれけるとぞ。一日保輔。ぬす人らを集め。酒宴していひけるは。今はこゝろ安し味方かく大軍に成ぬれば。齊明と調じあはせ不日に都に責いりなん。但我軍中。兵粮多からず。汝等兵を富ます良策ありやといへば。調伏丸といふ者。進み出て。いひけるは。こはかしこき御諚てこそ候へ。古語に三軍いまだ動かざれど。糧草まづ行と申て候へば。餉をまうけ候事。第一の軍謀にて候。我ともがら。とても盜賊の名をとり。凶殘を以威をかがやかし候うへは。姑息の愛。婦人の仁など。顧申べきならず。調伏丸が存知には。軍勢の至るところ。豪民の家に打入り。財寶牛馬。ある限り。奪ひとり候なんには。糧に事闕こと候まじくやといへば。多妻丸といへるがいはく。道のゆくてに。富めるやつばらが。家の物とらんことは。もとよりの覺悟にて候。某が存候は逃まどふ女ばら老少をいはず。引くゝりて。俘となし。陣中につなぎ置。高札を出して。身のしろを出し候者には。返しつかはすべく。觸しらせ候はゞ。親に離れ。子に別れ候者ども。財を惜まず。持來りて。あがなひとりて歸り候はんず。

さらんには。陣中の人々。居ながら。過分の財をえ候ならずやといへば。袴だれ。手を打て。あはれいしくも申されつるかな。此計我心にかなひたり。昨日までは。かほよき女ばらをのみ。奪ひて。各にわかちあたへて。閨の伽となさせつれど。今日よりは。老少美惡のきらひなく。いけどりて。軍中に繫ぎおくべしとて。其旨三軍に觸しらせ。身價に隨ひて生捕の賞あるべしと。いひわたしければ。賊勢こぞりて。たやすきことかな。女ばらの。二十人。三十人からめうことは。干潟の貝を拾はうより。やすかりなん。繫ぎ置て。涯分の賞に預らんとて。いさみよろこびけり。其頃袴だれは。伊勢國鈴鹿山に。籠りゐけるが。猶近國を惱まし。財寶を集むべしとて。賊等をわかちて。國國につかはしければ。伊勢。尾張。美濃。近江の百姓等。おそれまどひて。男は田かへす事を止め。女は機おる業をすてゝ。ひたすら戸を閉てぞ守りをりける。其頃近江國。神崎郡。神崎の里に。橘安世といへる人ありけり。祖父は。此國の介にてありけるがゆゑありてつかへをやめて。かく田舍に引こもりて。世々醫師をなして。いとなみゐけり。薗生となづけし。むすめ一人もちたり。顏うつくしく。姿たをやかにて。絲竹の道はさらなり。歌の道さへいたりふかく。よろづらう〳〵じかりければ。父母。になき物に思ひて。いつくしみやしなひけり。安世が甥に。常人といふ者あり。父母もなくて。乳母が家に。ありけるを。憐に思ひて。引取て。養ひ置けり。常人。うまれつき心ひがみ。まが〳〵しきのみならず。藝能の方も。無骨なりければ。安世心のうちに。ゆく末いかゞあらんと。たのみなくおもひゐたりけり。安世博識なるうへに。兵術にも。達したりければ。あたり近き人の子どもは。弟子と成て。學問するも有。又劍術弓馬の道など。學ぶ者も多かりけり。此數多ある弟子の中に。坂上の梅丸といふ者ありけり。年はたち斗にて。面きよく姿みやびかに。學ざえの方も。人にたちまさりて。志もうるはしかりければ。誰々もほめ物にぞしたりける。安世も此人こそ。我業を。繼べき物なれと。思ひければ。經文の道〳〵しき事は更なり。歷史百家の書に至るまで。發明せる說どもを。こと〴〵く傳へ。をしへける。もとよりかしこき若者なれば。一を聞て十を

さとり知りて。今は左右なき。書生とぞなれりける。學問のひま〳〵には。弓ひき。太刀うちのわざをも。習ひて。いさゝかおこたらず。はげみ學びける。此梅丸が父は。此國にかくれなき。田樂の上手にて。坂上の猿丸といひし者なり。梅丸がをさなき頃は。おのが業なれば。田樂のわざを。をしへならはせけり。梅丸が九といふ歲。父の猿丸病て。身うせぬ。すこしの田畑も。持たりけれど。をさなければ。田作るべきちからもなく。せんかたなけに見えけるを安世たのもしく。しあつかひて。おのれが方に呼むかへて子の如く。かしづき。養ひて。かたのごとく文武の道をもならはせけり。安世醫師ながら家富て。田畑など。多くたくはへて有ければ。萬はぶきたる事なく。にぎはしくぞ世を過しける。常人おのが愚なるをしらで。梅丸が學ざえの。すゝみゆくを。ねたみ思ひて。常に。あらぬ後言しりうごといひて。そしりあざけりける。ひとひ。安世妻を呼すゑて。語りけるは。甥なる常人は。性鈍く。むざえなれば。物の用に。立べきにあらず。梅丸は。才智あまり。藝能もすぐれたれば。かれをむすめにあはせて。婿にせばや。と思ふなり。されど彼田樂の子にてあれば。人におとしめ。いはれん事。心ぐるしう思うなり。といへば。妻うちきくより。わらはもかねてより。さこそ心づきて候へ。たとひうるはしき家の子なりとも。愚たるものを。何にかし候はん。年のほども。娘とは。にあはしく候へば。かれを婿となして。家をも讓り給へかし。といらふれば。そこにも。其心にて。おはさば。しか〳〵。娘にも語り給へ。近きほどによき日とりて。梅丸にもかたらふべしなど。夫婦ひそやかに。かたらひゐたりけるを。常人。屏風のうしろに在て。ふと此事を聞つけ。心におもひけるは。梅丸こそ。我ために。いみじきかたきなれ。いかでさるべきことどもかまへて。彼を失はゞやとぞおもひつきける。長月の末つかた。庭の梢こと〴〵く紅葉して。さながら錦をはれるがごとし。安世興にたへて。なにがしくれがしを請じて。宴席をひらき。文つくりて。なぐさみける。弟子の中にも。才學あるをば。呼いれて。探韻とらせて。おなじくふみつくらす。梅丸常人も。共に其席にをりけるが。梅丸が作れる詩ことにかうざくなりとて。人々ほめのゝし